

国会図書館所蔵の蔵書を基に

明治維新から三十年余で急速

な発展を遂げた日本の解説本

である為に、日本国民が魂を覚

醒する事を恐れて、GHQが発売禁止と共に、焚書とした由縁の書籍です。

謄写物であり、読み難く倍率できる、PDFで公開しました。

著作権は、終了しています。

神戸市須磨区緑が丘
中橋泰治が作成

<http://tainak.jp/>

日本大陸に進む

大衆明治史

卷下

210.6
K124
2

寛著

大衆明治史

著 寛 油 菊



汎

[上巻_Link](#)

| | | |
|-----|-----------|-----|
| 第八章 | 日露戦争と對米宣傳 | 一七一 |
| 第七章 | 日露開戦 | 一四五 |
| 第六章 | 近衛篤磨と開戦論 | 一一九 |
| 第五章 | 對露強硬論と七博士 | 九七 |
| 第四章 | 日英同盟 | 七一 |
| 第三章 | 北清事變 | 四七 |
| 第二章 | 福澤諭吉と國權伸張 | 二五 |
| 第一章 | 川上操六と師團増設 | 五 |

919
102

日本大陸に進む 目次

ざるなり。しかして現在の兵備は、以て今後の中樞軸を維持するに足らず、何ぞまたその利益を既得して、以て東洋に覇をふるに足るべけんや」と、堂々と論じてゐる。

軍に中樞軸の維持のみを以て足れりとせず、進んで東洋の盟主を以て任ぜんとしてゐるあたり、戦勝の意氣奮るべからざるものがあるを、察せられる。

そこへ露露のやうに、三國干渉が勃發したのである。國民が悲憤した以上に、軍當局の態度は深慮なものがあつた。

謀士はロシアだ。

「よし、今度はきさまが對手だ」

と固く決意したものの一人に、時の參謀本部次長、大本營參謀官、川上操六があつた。

川上操六とモルトケ

日清戦争の陸軍の作戦を、殆んど一人で指導したのは、川上操六であるといはれる。

論功行賞では、金地勲功二、勲一等旭日大綬章、そして將官が一律に勇將を贈つたのに、川上だけは特に被贈で子爵を贈つてゐるのみならず、その功績が如何に重んぜられてゐたか分かる。

事柄らしく、彼はまたモルトケと比較して論ぜられた。勿論モルトケは一夜の雄だが、その下にあつた將官は、みんな自分の生徒や後継だから、やりよかつたのだ。

しかし、川上が引つばつてゆかねばならぬのは、内に在つては、伊藤、山縣、井上、松方、浪速軍では大山、野津、みんな自分より先駆ばかりである。そして現地に在る旅團長が、やつと自分の同僚なのだ。これをよくとめて、自分の作戦計畫に協力させ、人の命を以つて戦争を指導していつた

手続は、モルトケ以上に丁寧なものである。

とにかく帝國陸軍の發展の初期に於ける、大村益次郎と川上操六の存在は、たしかに國民の誇りであるといつてよい。二人とも、軍政方面より、作戦方面を得意とし、藩閥出身者であつたのに拘らず

權力に對する欲望が比較的淡泊であつた事など、よく似てゐる。

非難する態度たちは俸祿に懸くとして情誼を顧みずと罵るが、彼の目指すところは、そんな小さな私欲ではなかつた。政治史上の大汚點の一つといふべき、露露將士の近衛親文のことを知れば知るほど、この時の川上のやり方は正しいと思ふ。

だから、後年彼が軍の中樞軸に立ち、人材を國軍のために用ふるに當つても、一部の藩閥員をも止めや、既に人物本位であつたことは、どの位、わが陸軍の發展に幸ひであつたかしのれない。

いやしくも人物本位さへ優れてゐれば、朝鮮人だらうと、東北人だらうと問題にしないで拔擢したのである。例へば福島安正大將は信州、田村實造中將は甲州出身だ。東條英毅中將（現東條中將の父君）は南都だし、第五師中將は會津である、みな陸軍の偉材として、川上が特に目をかけて、

に薦めよるはせに薦めばかりであつた。

初期議會では、政黨は藩閥政府を攻撃してやまず、敵軍には特に露露軍と言はれて風言が飛んだのに拘らず、陸軍に對して比較的攻撃が少かつたのは、川上が早くから陸軍を擁護して天下の英才を集めたためにもよるのではなからうか。

伊藤博文は、この川上操六の才幹を極力推賞して「軍國の首領たるべき人物」と言つてゐる。

日清戦争中、しばしば軍が機軸を擡つてゐて、われわれに頼してゐると云つて、つむじを曲げた伊藤も、この川上の機軸でどれだけ御機嫌を直してゐるかもしれない。そのくせ、最も作戦の機軸維持に配慮したのも、川上であつた。

伊藤の川上談は、一通りではない。後年、

「故西郷南洲と大村益次郎とは、やゝ軍國の首領たるも、その死後、これに代るの人物としては僅かに川上操六子あるのみ、子もまた既に軍中の結會となれり。

子はもとより露露に於て老西郷に及ばず、村幹に於て或は大村に劣れるものあるべしと雖も、その一身を軍國に捧げて絶々經營したる功勞に至つては、決して消えたる他の軍人と同視すべからず。

特に子は露露出身の軍人なるに、はらず、勉めて人材登壇の門戸を開放して、露露に私せざるが如き、而してその參謀本部の内容を改造し、老朽を淘汰し、後援を依頼してよくこれを統御統一した

りし如き、最も心事の暗喩、器宇の恢廓なりしを見るに足る。元來わが陸軍は、長國の勢力範圍にして、參謀本部に於ける重要な位置も、曾て長國系の軍人を以て占領せられたとき、子一人だけこれ

が部長となりてより、長國の勢力範圍に對すると同時に、學術智能ある軍人一時子の門下に集まり、そ

の施設策案また一生懸命を凝らしたるものなりき。頼み子には、必ずしも自ら才を用ふる人に非ず。而もその全局を打算するの識力、その群衆を指揮するの威風、冷淡にして従者過らざるの頭腦、その布置の精にして、規模の大なる殆んどモルトケに類したるものなきに非ず」と、褒めてある。

川上は伊藤によつても、モルトケに比較されてゐるが、川上のやり方にモルトケの匂ひが透つてゐるのは當然だつたのである。

川上は二度目のドイツ留学で、親しくプロシヤ参謀本部で近代兵學の精奥を、モルトケから聴取してゐるのである。

モルトケは當時八十六歳の高齢だつたが、なほ参謀總長の要職に在り、普佛戦争の大功労者、歐洲の兵學界の最高者として仰がれてゐた。

モルトケはこの日東の青年將校を遇すること厚く、その家庭にまで招いて、國々兵學を説いてうまなかつた。

「軍、並びにその主腦者は、政治の富強や強國から、絕對に獨立してゐることが必要である。つまり

めて、明治天皇御統監の陸軍特別大演習が、尾張三河の平野を中心に行はれたことだらう。

この大演習は、今迄にない、假想敵國を想定し、兵隊の動員から夜襲まで、戦時そのまゝにやつて、實況に見事な西來突えを承したのであつて、川上將軍の得意態ひみるべしであつた。

モルトケが戦きへれば流行に出かけたやうに、川上も旅行好きで、國防の見地から、内地はもとより、二十六年には朝鮮から支那へ出かけて行つてゐる。

「なほに、支那の兵隊など、恐れるにはあたらん。第一、足がないではないか」と、その觀察所感を語らしてゐるが、鐵道はなし、給糧は不十分だし、あれでは大規模にして、絶大な軍事行動は出来な

い。川上は、一層して勝算ありと、疑かなる確信を懷いて歸つてきたのであつた。

日清戦争中の川上の活躍は略す。しかし、とにかく作戦的に見て、獨り強豪と言つてよいだらう。しかも、日清の干支がさまるや、またしても川上の勢力が必要となつてきた。

それは、戦後の軍備擴充計畫であつた。六ヶ師團より十二ヶ師團へと、驚愕的な擴充計畫の中心に立つて、眞に巨膽をくだいて苦心をしたのは、また川上参謀次長であつたのだ。

對露作戰の機密

明治二十八年の晩秋の頃であつた。伊藤總理大臣官邸の廊下を、ゆつたりと歩を進よ、一人の壯漢があつた。巨幅の廣い背を、心持ち張つて、行く。自由黨の健士として仰々たる名を博してゐる。對露河野廣中であつた。

廊下の奥の角で、ベツタリと逢つたのが、参謀次長、川上六六である。

「やあ、お珍らしい、河野さん」と、川上は如才なく河野の肩を叩いたが、何を思ひ出したのか、「さうく、あなたに、一寸お話ししたいことがあるんだが、どうです、少しわたしにつき合つて下さらんか」

と、促した。

河野は、直観的に「はん、例の大ヶ師團増設問題だな」と感じた。對露的の擴充計畫として、この議會は相當採るだらうと、政黨方面でも、かね／＼研究中の大問題だつたのである。

参謀本部は、平時は陸軍省すらからも、隠れたものにしてをかなければならぬのだ」と云つて、歴史を好んだモルトケは、その例證を岸山に舉げて、説いた。後年、川上が統帥權の獨立を明確に決めたのは、實にこのモルトケの教本も讀つて大なるものがあつたに違ひない。

「軍備などといつて、材料にむつかしく考へる必要はない。當量の國威。これが融結した軍略の無難であらう」

と、言ひ、「はじめに國威、次ぎが軍行」これを口癖にして、繰り返した。

慶應一年生、丁度モルトケが参謀總長の職から退いたのと前後して、川上は歸朝した。それから川上の活躍は目覚ましいものがあつた。

有精川宮仁親王殿下を参謀總長に拜し、自らはその下に次長となりその改革強化に全力を挙げた。今日見るやうな、國軍の中核たる参謀本部が出来たのは、この頃からであつたのだ。

對露作戰の機密

明治二十八年の秋の頃であつた。

伊藤陸軍大臣官邸の地下で、ゆつたりと歩を練ぶ、一人の壯漢があつた。肩幅の廣い背で、心持ち張つて、行く。自由黨の闘士として御名を博してゐる、伊藤河野廣中であつた。

地下の奥の角で、バツタと逢つたのが、急謀部長、川上操六である。

「やあ、お珍らしい、河野さん」と、川上は如才なく河野の肩を叩いたが、何を思ひ出したのか、「さうく、あなたに、一寸お話ししたいことがあるんだが、どうです、少しわたしにつき合つて下さらんか」

と、促した。

河野は、直観的に「はん、例の六ヶ師團増設問題だな」と感じた。秘密的の機密計画として、この議事は相宜であるだらうと、政黨方面でも、かねく、研究中の大問題だつたのである。

川上操六と河野廣中

一五

大衆明治史

一六

河野は大きく「さう」と言ひ、川上は先に立つて、官邸の一室に導いた。覆つた丸窓の花紙には、大きな青銅が一輪生けてあつて、いかにも静かな感じが傳つてゐる。

川上は椅子につくと、腰は一言、

「今日は、國家の一大事に就いて、御相談がありますか」

とやつた。

河野は、落つき張つて、

「國家の一大事とは、何ですか」と、反問した。

「貴は今度の陸軍軍備擴充に就て、政黨方面では四ヶ師團増設で充分であるといふ議論があるやうに承つてをりますが、われく、専門的見地からすれば、最低六ヶ師團擴充にやならんと考へてをるんです。遼東還附後の形勢は、これは容易ならんものです」

河野は、じつと川上の顔を見詰めてゐたが、「お尋ね致したいが、東洋平和を確保するに、六ヶ師團の擴張だけで、充分でござるか。こゝが一番大切な點だから、念のため確めてをきたいと思ひます」

「從來の觀成による師團ならば、六ヶ師團では足らんです。しかし、私見によれば、今後一ヶ師團の

兵隊を倍加する所存です。そこで新に六ヶ師團増せば、全部で兵隊は二十四ヶ師團増したと同様な計算になります。もちろん、この擴充はロシアに對するものですが、御承知のとほり、ロシア近年の極東進出は非常に積極的なものがあります。シベリア鐵道は數年ならずして全通する豫定ですが、その機に於けるロシアの極東に保有する莫大な兵力を計算して、この六ヶ師團増設を決定したわけです。これだけあれば、必勝です」

河野は更に、

「然らば貴政のやうに、六ヶ師團の増設をすれば、何ヶ年にこれを完成する豫定ですか」と、訊く。

川上は大きく言ひ、

「御天です。勿論、極力急がねば、何にもなりません。われく、の計畫では六ヶ年にして完成する豫定です」

「御りました。しかし六年後に六ヶ師團の増設が完成し、ロシアの極東兵力に優越するとしてもロシアは此の事を知るや、新しく造じた鐵道によつて、歐洲の兵力をどしどし極東に増援することも

大衆明治史

一七

出来るわけですね。その時、せつかく六ヶ師團増やしても、兵力量から云つて、對露の作戰計畫が無意味になるといふことも考へられるわけです。だから、完成と同時に、早くこれを用ふる機會を與へる必要がある。この點に關し、用兵の中樞に在る貴下の意中を伺ひしたい」

川上は暫く黙つてゐたが、やがて決然として言ひ放つた。

「これは極端だが、あなたの熱誠と覺悟に對して、打明けてお話しすることにします。御説のやうに六ヶ師團増設が完成しても、我々が安閑としてゐたら、必ずロシアの兵力はわれを凌駕するやうになります。そこで大いに兵を用ひる機會を逃してはならん譯だ。われくはこの點に就て、充分に確信を持つてゐる譯です。我等が現に朝鮮に於てとつてゐる行動は何か。すべてこれ戰爭の導火線たり得る事ばかりです」

さう云つて、一寸言葉を切つたが、更に川上は語を續けて、

「師團増設の機は、いつでも取れるわけですが、戰爭に就てわれくは恐るる機會を想定して、鐵道たる自信と成算を持つてをるです。大體、各國の兵備擴充は、六ヶ年の豫定なら實際は七ヶ年かゝるのが通例です。だからロシアは、七年目と斷んで準備を整へるでせう。そこで、われくは六ヶ年を

五ヶ年に短縮して、鋭意、盡行せりても、五ヶ年にして六ヶ師團を作り上げるのですよ。そこで二ヶ年の開きが出来る。この二ヶ年の開きは、相当長期に亘つて大きいですよ。ここに必勝の算があるわけです。師團の増設は、決して無意味に終らせん覚悟です。政黨の協力を奮発してやみません」

無説をこめた川上の師團は、火を吐くが如く、河野の胸をえうて止まなかつた。内に燃きたる愛國の熱情を秘めた國士、河野對舟のことだから、感激しないではなかつた。

「引揚げました。川上さん」

と、川上の大きな掌を握るのであつた。

當時の日本の國力では、六ヶ師團増設は容易なことではなかつた。まして、實質的には、現有兵力の四倍といふ大増設だ。しかし國家存亡の岐路とあれば、思はねばならん。本十國に頼するは今日である。河野は意をまとめて、その實現に盡力することを約束したのである。氣部と、愛國の熱情に燃える、初期の政黨人の面目、想ひ見るべしである。

かうして、河野廣中は、自由黨、樺垣派はじめ、中島信行、林有造、原實、松田正久などの有力な黨員を説いて、六ヶ師團案に同意させ、全黨を挙げて、政府及び軍の方針を支持することに決した。

川上様六と師團増設

軍備擴充案議會を通過

廿八年十二月、第九議會が開かれると、伊藤首相は、この陸軍擴充案及び海軍擴充案を議會に提出した。即ち陸軍省經費は、三千五百五十八萬圓餘、海軍は三千七百十二萬圓餘、今から考へれば僅かなものであるが、これを前年度と比較すると、共に二千有餘萬圓の増加であるから、これは全く劃期的な大増設であるといつてよい。これに對して、自由黨を除く、改進黨、その他の政黨は反對してゐる。彼等は「膨大な陸軍はどこで用ゐるのか、それより四面環海のわが國は、海軍の擴張こそ無窮の念である」と考へたのであつた。

しかし、自由黨のバックがあるため、この政府案は衆議院では、田口龍軒などの詞々たる反對論があつたが、難なく通過し、更に貴族院に運ばれることになつた。

六ヶ師團増設の次に来るものは、従軍師團につづいてゐた騎兵師團を獨立させて、旅團編成に關

大させる。昔一年には、軍事上の最高顧問として元帥府が設けられ、

勳仁親王、山縣有朋、大山巖、海軍では西郷從道に各々元帥の稱號を賜ふてゐる。その傍、新たに教育總監部を置いて、陸軍の實際的増大に相應する教育總監の改良強化に努めるなど、近代陸軍の威容完成のため、精進がかけられた。

これらの大買され、整備された軍備が、實地に試みられる機会が與へられたのは、東洋早くて、三十三年の北清事變がそれである。この事變には、各國は兵を出して、北京封鎖軍を組織したが、その地位が最も低かつたため、一帯多くの兵を出したのは日本であつた。組織訓練を異にする外國兵に値し、勇猛な戦闘と軍規の嚴肅を以て、列國中に異彩を放ち、大いに國際的な賞讃をかも得たのであつた。

三十一年十一月、清、河、東に於て行はれた陸軍特別大演習に川上は參謀總長としての職務上、病軀を押して、臨幸の車駕に扈從し、奉つたが、それから病篤くなり、遂に三十二年五月上下諸節の中に、死んだ。

「ロシアを、うむロシアをなあ……」

川上様六と師團増設

これが遺言であつた。死のまで、對露作戰が念頭から離れなかつたのである。享年五十二歳であつた。

川上様六の對露作戰は、六ヶ師團増設問題の外に、頗る重大秘密なものであつた。

川上は戰時謀略の頗る重大であることに、早くから意を用ひ、當時の明石元二郎少佐に、四ヶ月の間、自ら謀略の訓練を施してゐる。明石は後年月富戦艦隊に於けるや、遠く北歐に在つて、富國革命黨を組織し、ロシアの内部擾亂を計つてゐる。その時、レーニンなどと逢つてゐるのも、有名な話である。

また福島安正中佐の、シベリア横隊取崩旅行も、當時の青年たちの血を清かせてゐるが、ロシアの内部觀察が眞の目的で川上様六が中央に在つて、大いに援助してゐたことも忘れてはならない。

實業武夫、田中義一を露都に駐在武官として派遣してゐるのも、同じ目的に出でた。川上將軍の指圖だつたのである。

その死ぬ頃は、人あたりは益々衰へ、頭も傾くなり、船仕の少年にまで一々挨拶を遣して、遂に「今日は閣下」といふ節者までつたといふが、人間も頗る出来てゐたのである。

面白いは、あれほど支那を叩いてをきながら、戦争が終ると、支那に對して最も深い同情と親善の手をさしのべたのは川上であつた。日本の將校を澤山に支那へ送り、その訓練に當らせたり、澤山の支那留學生に陸軍講學校の門戸を開放したのも、川上であつた。

川上の對露作戦の衣鉢をついだのは、田村竹真中將であり、これを實戦に於て、はじめて試したのは、兒王源太郎中將だが、この兒王がその風格といひ、智識といひ、川上後六に最もよく似てゐたといはれるのも、一奇であらう。



福澤諭吉と
國權伸張

反封建主義者

明治三十四年二月三日、福澤諭吉は朝野新聞で急死した。

當日、彼は平常のやうに邸内を散歩し、夕暮後には來訪した學生二名を相手に談笑してゐたが、彼の胸の内を察知して、そのまゝ終に起たなかつた。六十八歳であつた。

明治史を語るに就ては、どうしても福澤の名を述べる事が出来ないで、故に特に死を記して述べざるわけである。

福澤諭吉は、天保五年十二月に、大阪東區の中津藩家臣に生れた。父百助は豊前中津、奥平家の藩士で、藩命によつて薩長藩に勤中に、彼が末子として生れたのである。

三歳にして、諭吉は父を喪つてゐるが、それから一家は郷國に歸り、彼の貧窮の生活が始つたのである。

福澤家は下級士族であつて十三石二人扶持の小姓であつた。そのため、當時の貧乏武士の例にもれず、彼の家は小内職をやリ、諭吉は少年時代は家の雜用を手助けしたり、下駄作りや、刀の細工などをしたのである。

斯うした生活から来る反封建意識は、長ずると共に、封建的な門閥制度に對して、熱え上つて行つた。

彼はその自叙傳の中に、
「私のためには門閥制度は親の仇である」
とか、大名たちの無能を痛罵して、

「此輩をして全國の各地方に君臨せしむるは、人類にして豚犬の命令を奉ぜしむるに異ならず」とか、しきりに激しい罵言を浴びせかけてゐるが、その反封建意識は、一直線に幕府打倒の政治運動には走らなかつた。彼は安政元年、二十一歳の時、長崎に留學作家のため遊學して以來、學者、思想家、教育者以外、その一生のコースを變へなかつたのである。封建の激越な志士にならず、學者となつたのは、彼が憤熱家であると共に、非常に理知的な性格を備へてゐたことを示してゐる。

どんなに理知的だつたか、その自傳の中の少年時代の想出を見ればよく分る。

「私は、幼少の時から神様が怖いのだ、神様が有罪だのといふことは、一寸もなかった。トシガキ
一切不信仰で、私利が過るといふやうなことは、はじめから馬鹿にして、少しも信じない。子供ながら、
神様はよことに、カウリとしたものであつた」

とあるが、例事にしても迷信的だつた當時としては、まことに「怖るべき子」だつたのである。

「私の十二、三歳の頃と思ふ。兄が何か反古を語つてゐるところを、私がドタバタ踏んで通つた所が
兄が大喧嘩、コウヤ特と酷く叱りつけて、「お前は神が見えぬか、之を見なさい。何と書いてあ
る。奥平大藏大夫と殿様の御名があるではないか」と、大變の騒動だから「あゝ左様でございますいた
か、知りませんでした」と云ふと「知らんとても神があれば見える筈や、御名を足で踏むとは如何
いふ心得である。辰子の道は……」と何かむつかしい事を言つて叱るから、溜らずには居られぬ「私
が神に思ひございましてから暴息して下さい」とお辭儀をして謝つたけれども、心の中では誰よりも何
もせぬ「何の事だらう。殿様の御名も踏みはしなからう。名の書いてある紙を踏んだからつて、構ふ
ことはなさうだ」と其の不平等で、ソレカウ子供心に強ら思案して、神様の名のついてゐる御札を踏
んだらどうだらうと思つて、人の見ぬ所で御札を踏んでみたところが何ともない「ウムこりや何とも

ない。コウヤ面白い。今度はこれを手洗器に持つて行つてやらう」と一歩を進めて、便所に試みて、
其の時は少し怖かつたが、後で何の罰もあたられぬ「ソリヤ見たことか、兄さんが御計な、あんなこと
を云はんでもよいのや」と嘲り言を吐いたやうなものだが、こればかりは母にも言はれず、姉にも言
はれず、云へば叱られるから一人で黙つておりました」

西力東漸を慨す

「西力東漸」として、西方列強の勢力を指し、二度までも外寇をして、つよきに先達諸國の文
物制度を襲つてきた彼の際に、明治維新の變遷はどう感じられたであらうか。
神聖論者が歴史論に結びつき、西力東漸を痛罵するのをみて、彼は日本の前途に對し、悲憤せざる
をえなかつた。

「その時の私の心事は實に淋しい有様で、……維新前後無茶苦茶の既成を見て、連もこの有様では國
の獨立は大かしい。他日外國人から如何なる侮辱を受けるかもしれぬ。さればとて今日日本中東西南北、
例れを見ても語るべき人はない。自分一人では何事何事も出来ず、また勇氣もない。實に憤けないこ
とであるが、いよく／＼外人が手を出して、國威を損ないしよ時は、自分は何とか、命を懸けるとする
も、子供は可哀相だ。一命をかけても外國人の奴隷にはしたくない。或ひは耶穌宗の教主にして、政
事人事の外に獨立させては何れ、自力自食して他人の庇介にならず、その身は宗教の教主といへば、
自ら辱しめを受けることもあらんかと、自分に宗教の信心はなくして、子を思ふの心より教主に
しようなどと、種々無量に考へたものである」

「西力東漸」の論議、しばしば東洋人が白人の奴隷として、酷使されるのを見て、日本の將來に對し
て、こんな悲憂を懐いたのであつた。悲憂と云ふより、當時の心ある論者は、みなこのことを真摯に
憂へたのである。

上野の山の遊樂を耳にしたが、然否として彼がウエーランドの遊園地を請じてあたといふ遊園も
當時の彼の心境としては、必ずしも時勢運命のそれではなく、暗鬱として陰鬱なものもあつたので
はないだらうか。かうした悲鬱的な時代の中にも、新しい時代は、西力東漸の變遷以上の速かきで準備
され、やつて来た。明治政府の西力東漸の決定は、猛烈な「文明開化」政策の強行である。これが
あれほど強固に、權威を主張して、政府を震撼させた同じ國長政治家のやることだらうか。西力東漸が受
けつては、かうして急に大きくなつて行つたのである。

西力東漸のやつた大きな仕事は、大體に三つある。一つは「西力東漸」の強行による文明輸入のさきが
けであり、二は東洋の獨立の確立であり、三は時勢運命の顛覆である。これ以外に、先覚者としての彼
が手を染めた仕事は無量にあるが、この三つの仕事は、どうしても西力東漸でなければ出来な仕事ばか
りである。それだけに、これらの仕事を計画した人物は洋山にあるから、故ではあつたことにして、こ
れからは主として、國權伸張論者として、わが大政政策に大きな功績を築いた、西力東漸の、どちらかと
いへば政治的な面に對して考へてみることにしよう。

この大政政策の動機は、實に西力東漸の強行にわたる洋行の足踏に基くものであつて、英國の
勢力が東洋の各地に發展し、遂には英國領を擴張し、陸上には英國兵の屯營を構へ、この西力東漸を
とする英人が、支那人や印度人を皆も奴隷にする現場を見て、痛恨してやまなかつた。

「我輩は海外に往來して歐米諸國在留のとき、動もすれば彼の國人の待遇からざるに不愉快を感じたることも多し。去つて船に乗るに印度洋に乗り、英國人が南洋南洋の地に上陸し、又は支那その他の地方に於ても種族を専らにして土人を制するその状況は、種族無差、種々同等の人類に接するものとは思はれず。當時我輩は此有様を見て、一方を憐しむの情に一方を羨み、われも日本人なり、何れの時か一度は日本の國威を輝かして、印度支那の土人を制すること英人に倣ふのみならず、英人をも奪めて東洋の權柄を一手に握らんものをも、社午血氣盛んに心に約して、今何忘ること能はず」明治十五年、時事新報社説。

福澤はこの考へを早くから懐いてゐたが、當時の日本が尙ほ幼稚であつたため、國威の地に輝してゐたのである。それが明治十一年になると、そろ／＼と出て来て、この年「國權論」の一書を書き、「百老の萬國公法は教門の大敵に若かず、聖書の和親條約は一位の強權に若かず」と喝破して、わが國權を全うするには外敵を排さず「英人をも、我等が支那人に等しつゝあるが如く、試み試みにしてみたい」と、萬丈の氣概を吐いてゐるのである。

彼は、西方東漸の勢を大事の憂慮するのに警へ、わが日本はその自衛のためにも、どうしても、

福澤の木造バラックの朝鮮支那を指導して、アジアの大事を早く済しとあねばならぬと、俄大の筆を振つて、世に訴へたのであつた。

その順序として、福澤は朝鮮の獨立國化を極力援助して、志士金王均等を早く保護したことなどは既に述べたところであつた。

また支那に對する政策としては、その軍備の決して弱るべからざることを力説し、西洋諸國の支那分府の野望の懸々たる態を描寫して、日本は極東政策を一日も早く確立すべきを高唱したのであつた。

そのためには、どうしても日本の軍備の擴充が急務である。當時のわが國會は、政學黨系を極めてゐて、國防費の豫算は削減され、否決され、増徴たる有様であつた。

明治廿四年七月、支那の水師提督丁汝昌は、定遠、鎮遠以下北洋水師の艦隊を率ゐて、威海衛に碇泊した。名は威遠であるが、實は一種の威嚇艦隊であつたのである。然るにわが國の現狀は官民反目的極、議會は解散また解散、豫算は不成立だから、海軍計畫などは固より行はれない。

この時に於て、福澤は「一大英艦を要す」と叫んで、朝鮮に警告を發し、わが軍備の充實を要望し

日清戦争と福澤論古

日清戦争の戦報、牙山に於ける種族を序意として日清のあひだに干戈が交へられると、福澤は、非常な意氣込みで、時事新報の社説を執筆し、人心を鼓舞したのである。

「さて日清の戦争は世界の表面に開かれた。文明世界の公衆は是して如何に見るであらうか。戦争の事實は、日清兩國の間に開かれたが、その根柢を尋ねれば、文明開化の進歩を謀る者と、その進歩を妨げんとする者との戦であつて、決して兩國間の戦ではない。即ち日本人の眼中には、支那人なく、支那國なく、唯世界文明の進歩を目的として之を妨ぐる者を打倒せんとするまで、人と人、國と國との争でなくして、一種の宗教争ひとも見るべきものである。苟も文明世界の人は事は道理非曲直を言はずして、一も二もなく我目的の所在に同意せんこと、我輩の決して疑はざるところである。即ち日清戦争は文明と野蠻の戦争なり」

と、戦争の意義を、はじめて定義づけてゐる。

多年の積望であつた國權完成伸張の夢が、今や堂々と世界の輿論に始まつたのであるから、福澤の得意は想像される。

彼は言論文章を以て、人心を鼓舞指導するばかりでは満足せず、進んで資金を募集して、戦費に充てようとする、戦後の實際運動にまで乗り出した。時事新報の社説に「大いに軍費を提出せん」と題して、読者衆人に訴へ、自らも金一萬圓を投げ出してゐる。現在の事變の例でみれば、一萬圓の資金など、ものゝ數ではないが、當時としてはこれが大きなセンセーションを博したるのである。

彼はまた「日本國民の覺悟」と題して、自らの心境を述べて、戦時に於ける日本人に警告するところがあつた。

「我輩は平生文明開化の西洋主義に従ひ、まづ一身一家の獨立を成し、自然に立國の基礎を固くせんとして、時としては世間の風潮に應じて人心に應じ、他國の議論の盛なる時代に一身を惹くしても、これに同意しなかつた。世人は往々我輩主義に偏して他國の輿論を弄び、又は大和魂の靈氣を囁く者があつた。我輩は忠勇義烈を重んずること苟も他人に譲らざるも、これを言論するには場所

もあり時節もある。漫に忠勇義烈の世評を吐かずして、内に自から自重するは、文明人士の心掛なりと深く誇りを懐きたるも、今や不幸にして支那人のために、戦を捲かれ、日本國民は自國の榮譽のため、東洋文明の先導者としてこれに應じなければならぬことになつた。官職の階級を拜した以上は、其の身の軍務にあると否とに論なく、共に陣頭に立つて戦ふものと心得、國のために進出することこそ本意なれ。我々が平生に沈黙したのも今日を待つて大いに發せんためである。たゞ獨り奮發するのみならず、天下の有志者と共に奮發して文に武に其の平生の世評を實にせんのみ。

と、前向きして、第一「官民共に政治上の恩恵を忘れること」第二に「日本國民は事の終局に至るまで鎮んで政府の政略を非難すべからざること」第三に「人民相互に報國の義を奨励して、その事を稱賛し、又知々に承認すべきこと」の三箇條を擧げて、戦時下の國民の誠言とした。

彼は國內の大小の不平等に對し「父母の大病中には兄弟喧嘩は一切無用なる如く、百戦の論議は、外戦時全快の後のこと」と言つて、戦時中の國內分裂の危険なことを反復々々極論してゐるのは、今日の日本國民も深く記憶すべきことが非常に多い。

また「日本國民の愛憎」の中には、

「我が國民の兄弟姉妹四千萬のものは、同心協力してあらん限りの忠義を盡し、外に在る軍人は勇氣をふるつて敵と戦ひ、内に留守する者々は先づ身分相應の義捐金をするなど、悉向きの勤めなれども、要道に至れば財産を擧げてこれを賑つは無論、老少の差別なく切死して、人の權の盡るまで戦ふの愛憎を以て、遂に敵國を降伏せしめざるべからず」と極論してゐるが「幼少の差別なく切死して、人の權の盡くるまで戦ふの愛憎を盡す」とは、その意々ならぬ決意の程を示してゐるものと思ふ。

彼は新聞紙上で熱烈に論ずるばかりでなく、戦後の務めに就ては殊に熱心であつた。嘗て河津津波の被害地に滞在し、村の若者たちが、武運長久を祈るため、毎夜村社の八幡宮へ参詣するのを見て、左の書と蠟燭代を添へて贈つた。

「兩三日來官報中、毎夜村の若者等打揃うて手に手に提灯を携へ、館の門前を疾走して村社八幡宮へ跪足踏の勇しき姿を見物して、其祈願の趣意を聞けば、今度官村より徴兵現役の者は勿論、豫備役の召集に應じて従軍したる者少なからざるゆゑ、其若者等が戦場に於て武運長久、天明の亦も手紙を懸かし、日本國の大勝利を以て日出度凱旋するやうにと、願望の好に又報國の爲に、斯くは毎日の勞

働を終りし後に兵陣に祈るものなりと云ふ。

その友情誠意の厚き、實に世の中の手本ともなるべき事動なり。抑も今日日清の戦は我が大日本國體以來若々の遠き先祖も曾て知らざる所の大事件にして、事いよく切迫の場合に至れば國民軍の働にもあるべし。その時には今の若者は足踏りの勇氣を移して支那に討入ることならん。誠に難しき次第にて、之を思へば只感涙の外なく、余も參謀の仲間に入りたり程のことなれども、年老して身に叶はず、或ては年少ながら燃焼の料として金五圓寄附致したく、参謀の時、提灯を照らすの一助にもならば本懐の至に候也。

そして、河津は毎夜門前を出ては、この若者達の姿を見ては、

「御苦勞だの、元氣だの」

と言つて嬉り、涙を浮かべて喜んでゐたといふ。

また鹿屋の知友に宛てた手紙では、軍費のためには、一身を大儀にしてもよいと愛憎をしてゐると告げてゐる。

「……實に今回の師は、空前の一大快戦、人間壽命があればこそ、此の活躍を見聞致候哉、小生な

ど壯年の時より洋學に入つて、離分苦しき日に逢ふたることもあり、世間の實情に於らず軍手大軍に教育して、空國の大志は唯西洋流の文明主義に在るのみと、長き歲月の願望々として志すも、自ら期する所はあれど、世も生涯の中には實現に逢ふことはなかるべしと思ひしに、何ぞ料らん、唯今眼前に此盛事を見て、今や國體の支那朝鮮もわが文明の中に包摂せんとす。學生の愉快、領外の仕合せに候。

戦争も今より尙長く相成候事ならん。雖て兵も多く、又隨て軍費も大ならんと存じ候へども如何なる戦費に逢ふも、中流にて、止むべきにあらず、軍費の知きは國民が赤擧になるまで腹中申さず、國家などにては或より其の愛憎にて候。

その愛國の熱情の旺盛なること、驚くべきものがあるではないか。

當時に於て、盡忠報國の精神に燃えてゐる者、實に編譯論古一人ではない。しかし、早くから西洋文明がよれと悪口を言はれたり、期々同種などをかつぎ出して、一部國粹主義者から説かれて来た編譯論古が、反面に於ては極端な國權伸張主義者であり、熱烈なる愛國者であつたことは、いろいろな意味に於て、興味深い。

明治史の特徵として、人間でも政治でも、比較的バランスがとれてゐたことを指摘する人があつたが、この標準なんかの場合も、その一例だと思ふ。西洋心算と、愛國精神がうまく調和してゐて、飽きない。明治時代の悉くも指導者たちが、結局よい意味の良識家であつたことを、われ／＼はこの點よく含味すべきであると思ふ。

偉大なる警世家

日清戦後、閣議にやつて来た李鴻章遺骸で、日本中が驚愕で湧き立つてゐる時、福澤は冷やかにかう評してゐる。

「李鴻章の遺骸で、われ／＼として同情の餘り、償金を負けてやる必要はない。不良少年が掛りきつて自殺をしようとし、登壇して初顔面の女郎に情死を追つたやうなものだ。李も小田六之助といふ狂人に、死後の道づれにと見送られたもので、この一事で日清談判の大事を成す必要は少しもな」と云つてゐる。

當時、國民は國家の餘り、日清和議の條件を少しも縮くし、償金も負けてやれと云ふ論が盛つたのに對して、福澤は絶對に反對してゐるのである。

「世の俗論者どもは、兩國交戦の中に居ながら、義侠などと云ふ一個人の私徳に倣つて、國家萬民の大利害を忘るゝものと言ふべし。義侠の徳美ならざるに非ずと雖も、之を施すに時あり處あり。大戦争の大利害を決するに、義侠などにはすべし場合に非ず。こゝより見るときは、李氏の如きは唯是れ一個の怪殺人のみ。

試みに思へ。わが征清軍の連戦連勝以て今日に至りしは、幾萬の將校士卒が精銳奮勇を逞し千辛萬苦、彈丸に飽れ、負傷に苦しむ、飢寒を病むものあれば、病みて死すものあり、一戦一戦、總てわが國民の生命を賭して得たるその成績こそ、今日の講和談判に現れたることなる故に、眼前に一個人の怪我したるを見て遂に心を動かさず、却つてわが軍人の千辛萬苦を思はずして、その辛苦死傷の成績を輕重せんとは、義侠の徳心より論ずるも、一人に對する小義侠に倣して、萬人に對するの大義侠を忘るゝものと言はれて、之に答ふるの辭はあるべからず。天下の俗論とるに足らざるなり」と、痛烈に喝破して、當局に警告した。

しかしわが當局は、この突發事件のために、寛大な處置をとり、無條件で二十日間の休戦を許してゐるが、その他の講和條件は絶對に譲らず、以て戦局を結んだのである。

その後に出た三國干渉では、福澤は止むを得ずして屈した政府當局の苦衷を察して、寧ろ國內人心の激昂の鎮壓に、全力を注いだ。

彼が國民に向つて、ひたすら隱忍自重を説いたのは、一時の姑息を許るためではなく、他日、三國に對して報復するまでの實力を養ふためであつたことは、言ふまでもない。

だから、その後彼が躍起になつて喝へたのは、軍備の充實、特に海軍の擴張であつた。三國干渉當時、わが海軍の艦隊を擧げて大陸に在り、わが海軍の主力は、殆ど自國の沿岸を塞いで、朝鮮方面に在つたのに、ロシアの如きはその極東艦隊は十萬噸、油槽船を雇してゐたのである。

この事實は、成程に政争に没頭して、海軍力の整備充實を怠つてゐた政治家たちに無言の教訓をたれてゐる。福澤諭吉は聲を大にして、わが朝野に訴へた。日清戦争當時の海軍と、日露戦争當時の海軍では、その量に於ても質に於ても、全く絶期的な進歩がある。福澤たちの努力は、見事に結せられたと言つてよい。

とにかく、當時の時事新報は、殆んど全力を擧げて、海軍擴張を叫んだので、その頃、福澤がある處で海軍の有力者と會つた時、その對言が、

「時事新報の御進力は非常なもので、實に感佩に堪へない。何分よろしく」と云つたところ、福澤は笑ひながら、

「世間では時事を海軍の御用新聞などと云ふ者があるさうだが、この事ばかりは、海軍のお頼みがなくとも、われ／＼手前當で御用を勤めますよ」と答へたといふ。

そして、此の海軍擴張の財源は、どこに求めるかといふ問題に對して、福澤はその持論とも云ふべき酒税の増徴を以て充つべしと主張して、遂にその意見通りになつてゐるのである。

慶應義塾以後、わが外交は宣氣激昂し、國民もまた不平不満で、當局の振奮を責めてゐるだけで一定の範圍とした外交政策はなかつた。一方、極東の天地には、新たにロシアと云ふ新勢力が露骨にその腕手をのばし、これに對する對策は、漸く焦眉の念となつて来たのである。

伊藤博文などの日露同盟論が起る前に、福澤は率先して、日英同盟論を唱へた。極東に重大權益を持つ英國と手を握つて、ロシアの東侵に當れと云ふのである。明治二十八年六月に彼が書いた「日本

と英國との同盟」の一文は、實に日本に於ける日英同盟論の第一號だつたのである。少壯の時、英使東使の勢力を打破するの爲一つの目標にして生きて来た福澤は、茲に全く面目を變へて、新たに英國に手をさしのべたのである。總極の目的は、日本の興隆であるが、とにかく一時的にもせよ、英國と手を握らうとするに至つたのは、新たなる露國の脅威によるものである。自傳の中で、福澤はかう言つてゐる。

「顧みて世の中は、堪へ難いことも多いが、一國全體の大勢は改進黨の一方で、次第々々に上進して、数年の後、その形に現れたのが日清戦争で、官民一致の勝利、愉快とも有難いとも言ひやうがない。命あればこそ、ヨシな事を見聞するのだ。前に死んだ同志たちは不幸だ。ア、見せてやりたいと、厚皮私に泣きました。實を申せば、日清戦争など何でもない。唯これ日本外交の驕りきでこそあれ、ソレ程喜ぶわけはないが、其時の情に迫れば夢中にならずにはゐられない。」

要するに、日清戦争など、外交の序幕だと建設してゐるのである。英國打倒など、當時としては未だ夢の夢なのである。しかし、更に大いに爲すところあらんとしたが、福澤は日英同盟も日露戦争も見ないで死んでゐるのである。

福澤諭吉の譯々たる大衆精神を想ふ時、どうしてもわれ／＼は今日の日本の非常時を考へないではゐられない。

その意見、その筆力、またザヤリナリスタツクな才能など、今ならどうしても、情眼局總裁になつてもらひたいところだらう。

私は、明治の人物をと、訊かれたとき、福澤諭吉を第一に挙げてゐる。維新の大旗など、二人や三人居なくつても、明治維新は立派に出来てゐる。が、福澤が居なかつたら、明治の文明開化は五六十年は遅れてゐたと思ふからである。

福澤の事業で、残つてゐるのは、慶應義塾である。私は、慶應では、今でも「福澤自傳」など教科書代りに使つて、學生の教育に資してゐるのかと思つてゐた。

だから先日慶應の學生に（福澤さんの故郷は何處だ）と訊いたら知らないのである。慶應義塾は、三田に移る前は何處に在つたか）と訊いたら知らないのである。こんな偉大なる人物を學校の隣町としながら、それでいゝのかと思つて驚嘆した。

北清事變



北清事變の儀禮

義和團事變

日清戦争が日本の歴史的な勝利を以て終りを告げると、茲に支那は完全にその無力を全世界の前に暴露した。それまでは、列國は、支那の軍備を見かけ倒しであることは知つてゐたが、その人口の龐大と領土の廣大なことに一日置いて「驚れる獅子」などといふ妙な形容をしてゐたが、日清戦争に於けるその惨敗は、結局「倒れる雄」でしかないことを暴露したのであつた。

露國領土の列強の帝國主義は、これを藉として猛然とその牙をむき出して、相次いで支那を脅迫して、利権獲得に乗り出したのであつた。日清の役が終つてから数年の間に、列強が支那から強奪した利権は、右にも左にも三十一件もあり、老大帝國支那は全身をすた／＼に喰ひ込まれ、のた打ちまはつてゐるといふ惨状を示した。

日本の遼東半島の領有を、東洋平和に障害ありと稱して、三國干渉によつてこれを阻止した。露國の三國は、是して支那にどんな恩恵を與へたのであらうか。

露國は北滿を通じて博愛に到る鐵道敷設権を得、更に旅順、大連を租借して、その極東侵略の秋實を露國に現はしてゐる。

カイゼル陛下の帝政獨逸は、その宣教師が設けられたのを口實に、膠州灣を占領租借して、青島經營ののり出してゐる。

佛蘭西は、南支金鐵に對して大きく發言權を増大し、支那鐵道を支那領土内へ延長し、海南島の不割讓を宣言してゐる。

英國は三國干渉に加つて日本の怨みを買ふのを巧みに避けると同時に、支那の弱味につけ込むことに於ては、第一の手段を示した。

まづ威海衛、九龍を租借すると共に、山海關、牛莊鐵道の借款、津浦鐵道、張九鐵道、濟南鐵道の敷設権を得、また上海、漢口に於ける特權を得てゐる。

支那に對しては、門戶開放を叫び、いつもカレイな口を利いてゐる英國まで、これらの割前に預つて、支那鐵道の敷設権を得て満足してゐる有様である。

支那に於ける列強の露兵は、僅か数年ならずして、頂上に達したやうな觀を呈してゐる。これに

對して、支那の政治家たちは、何をしてみたのか。勿論、康有爲一派を中心とする光緒帝の進歩的開政改革の念ではあつたが、西太后はクーデタによつて光緒帝を幽閉し、朝廷の實權は守舊的な慈禧太后によつて占められてからは、専ら以英法美の古いやり方一本で、その日その日をヨマ化してゐる有様だ。そのため、列強の侵略に對して、中央地方を通じて、猛烈な排外、仇敵の風が起つたのも當然であつた。

中でも、明治三十二年、山東省に起つた義和團は、耶穌教徒、外人鐵道の熱をあげ、見る見る中に支那全土に擴がつて行つたのである。

義和團といふのは、一種の宗教的な秘密結社であつて、彼等はみな集つて拳銃を練習して、その術に長じてゐたので拳匪とも云はれてゐる。神術を得れば、槍も鐵砲も傷けないと信じてゐて、呪文を唱へながら勇気に戦ふのである。

彼等の唱へる「仇敵、滅洋」の口號は、外人の横暴に憤慨してゐた當時の支那民衆をうまく捉へ、勢力が増大すると共に、諸所の教會堂を焼き、宣教師、教民を虐殺した。しかも保守派で占められてゐた朝廷が、これらの暴徒を義民として保護するや、義和團は北支一帯に蔓延し、遂に天津居留地

を攻撃し、北京の各國公使館區域を包圍するに至つた。これが北清事變の發端である。

明治三十三年六月中旬から八月中旬まで、約六十日間、苦戦の中に、三萬の義和團に包圍されながら、公使館區域を死守したのが、有名な北京龍城であつて、日本側で龍城したのは、公使の西德二郎男（オランビック馬車選手、西竹一大尉の父君）以下五十名、それに原良雄大尉の指揮する陸軍隊、わづか二十四名であつた。この北京龍城の名士には、この他に石井勇太郎子、また留學生として藤部半之吉、狩野直喜博士があり、みな義勇兵の一人として銃を執つて力闘したものである。この他に今は無名として壯者を流して榮五郎大尉が、當時義和團中佐として、わが義勇軍の總指揮官として活躍したのは有名な事である。

日本陸軍隊の外に、各國は各々七、八十名位の陸軍隊を持つてゐたので、外國兵全部で四百三十名ばかりであつたが、これでは兵力は絕對に足りない。支那側は、拳匪の他に、官兵も加はり、甘肅提督董福祥の兵三萬も北京を包圍してゐるので、城門からは一足も踏み出せなかつた。殊に、イギリスのシーモア中將が、各國陸軍隊二千餘名を率ゐて、天津から長役にやつて来て、途中で拳匪にさんざんやられてからは、北京は全く孤立無援に陥つたのである。

日本公使館の林山青児生が、支那兵に包圍され、また龍城公使が支那當局と交渉に於て途中でやられるなど、事態は完全に悪化し、各國の救兵隊が大舉してやつてくるまで、六十日間も龍城をしのげなければならなかつたのである。

北京龍城

龍城當時の想ひ出は、榮五郎大尉も、藤部半之吉博士も書いてゐるが、龍城で一奮闘したのは、武器彈藥と食料の不足絶望であつた。

義勇兵の武器は、日本刀、ピストルから、仕込杖、竹槍までとび出し、中には棒の先へナイフを結びつけた即製の武器まで想像したのである。

最後には死んだ支那兵の武器を射とり、彈藥の代用品として、石や瓦をボコで包み、これに石油をひたして火をつけて投げたこともあつた。

また、米や麥が最先きに無くなつてしまつた。そこではじめは、食糧を半分に削減したが、やが

て海になり、その例も一日二回になり、最後には青草を噛り、大鍋や炭まで見つけて食べる始末である。馬も連隊で作れるものから食べ、二百餘頭の馬も、殆んど食ひ盡してしまつた。まるで、加藤清正の蔚山籠城である。

かうした中でも、英蘭の兵隊たちは、朝になるといつも、捕虜に知を刺つてゐたのには何だ、と要部博士は語つてゐる。

捕虜たちは、れいの呪文を唱へては、城壁を乗り越え、勇往に攻めて来たが、やがていくら呪文を唱へても、捕虜の弾丸には敵はないと分つてからは、餘り無茶な攻撃はせず、城壁と土壁を境として既み合ひの戦場が續いたのであつた。

朝から晩まで、奮闘してゐたわけでもない。銃眼からのぞいて、城外の園圃と、

「馬鹿野郎ア」とか、

「阿呆め」とか、

とか、砲口の投げ合ひをしてゐたが、一ヶ月も對峙してゐると、そこに一種の情が湧いてきて、「お互ひに、御苦勞なことだな」

といつた態度が交はされるといふ始末である。

何しろ對手は金に目のない支那人であるから、馬鹿銀といふ支那の大きな銀貨をそつとやると、既成や卵などを持つてくる。そのうちには、銀貨を賣りにくる者まで現れてくる。そこで一計を案じた龍城組は、彼等に金をやつて密偵を募り、外部との連絡、殊に天津にある列國の主力軍との連絡を計らうといふことになつた。

二十餘回、かうした密偵を派遣したが、皆失敗したが、最後に張德麟といふ男が首尾よく使命を果して歸つて来た。

張は、やはり此の密偵に釣られて、うで脚を持つてやつて来た支那兵の一人だが、張中佐は、彼をこつそり呼んで、

「天津の日本軍へ行つて、龍島少將(安正)の返事をもらつて来てくれ。金は三百兩やる」

といつて、彼に暗號の密書を興へた。服皮紙に細かく毛筆で認め、かんざせにして、衣服の縫ひに縫ひ込んだのである。

どうせこれも敵目だらうと歸つてゐると、八月一日に無事に歸つて来た。見ると左手の指を二本も

切られてゐる。天津に着いた時、日本軍に捕まれたといふことを示すため、進んで自分で斬り、密書を龍島少將に渡したのである。

その返事だと云つて、張は密書の龍目から龍島少將の手紙をさし出した。

當時、北京天津間の通信社絶して久しく、北京龍城軍は全滅ではないかとの懸念論が行はれてゐたが、龍城軍健在との報は、天津の各國人を驚愕させたのである。そのための救援軍の派遣も、これからチヤバキと決り、日本軍を主體とする強力な聯合軍が、北京へ向ふといふことになつたのである。約束の金だといつて、張中佐が三百兩やらうとすると、張はどうしても受取らない。そのわけを聞く。

「天津へ行つたついでに親密に會つたら、そんな金は買つてはいけぬ。兵隊をやめて、天津へ歸れと云はれたから、これから直ぐ天津へ歸ります」といふ。

それでは何故、危い思ひをして密書の返事を買つて来たかと聞くと、一旦男が約束したからだと答へる。更に、途中の支那軍の兵力や配置を訊ねると、そんなことは約束外だと一言も喋らない。

さうして金も受取らず、名も告げずに飄然と去つたが親密の張が歸ると、一日、民政官をしてゐる張中佐の許を訪れてきた。

その時、何故日本軍の密使を助めたかと動機を訊かれると、

「自分は親密の一人として事變に参加したが、戦争が長引くにつれてだんだん疑問が湧いて来た。支那がかうして列國の外交團を苦しめてゐるのは、つまり金貨を對手に喰ひ合はせてゐるやうなもので、いまにこれはヒドイ目に合ふ。これは何とか早く収まりをつけねばならぬが、それには一番信頼の出来る日本軍を助けるのが早道だと考へたからです」と答へた。

併し事變が終ると彼の想像以上に、列國は支那をイタメつけた。これはどうも自分の責任のやうな気がして、良心が咎めて仕方がない。その相談のために張中佐の所を訪れたのであつた。

張中佐はその後、日露戦争にも滿洲事變にも、終始日本人の誠意を信頼して、日本のため、支那のためを盡してゐる。昭和十一年にも、日本の龍目をやつて来てゐるが、張中佐は、

「お金のいらぬ人、直情径行、支那人には珍らしい人だと思ふ。眼に一丁字なく、私に手紙をくれる時でも、封筒は誰かに書いてもらひ、中には白い電紙をキレイに巻んで入れてあるだけ、それでも

張さんの心は十分に通じる。一種の疑問答のやうだが、私にはこの白紙の手紙が、何よりも嬉しい、有難い。

と語つてをられるが、日支兩國人が本當に手をとれ合つて仕事をするのに、これだけの誠意と情誼がなければならぬと考へさせられる佳い話ではないか。

第五師團の動員

北京城の連中のなかには、各國外交官の親類や子弟が津山に居り、それが非常な苦楚をなめてゐるといふことは、人道問題として、漸く英國などの輿論を刺激した。

それまでは各國とも、自國こそは本國から大軍を呼び寄せて、北京を救ひ、名譽と共に賠償の甘い汁を津山に吸はうと思つて、互ひに牽制し合つて、策動をつまけてゐた。しかし、北京の危機は一日の命を掛けてゐる。最近日間に、最大限の兵力を支那に運び得るものは、正に日本を置いて外に一國もないのだ。人一倍野心もあり、支那にも近いロシアでさへ、その極東兵力を放逐や大連から撤退

するには、一定の限度があつて大したことは出来ない。

三國干渉のことも口を拭つて、今度は急に日本に頼り出し、その出兵を促して止まない。

時の駐英代理公使の松井虎四郎男の談話によると、英首相ソールズベリーは松井男を促へて日本の出兵を督促してやまなかつた。

松井男が、

「何しろ三國干渉といふ前例があるから、出兵した後で、また何とか文句をつけられては、日本としては堪りませんから」

と答へると、ソールズベリーは、

「それはさうかも知らんが、今度は従ふ、人道問題です」

と、しきりに得意の人道問題をかき出す。ロンドン・タイムスの如きも「人道のため、この際日本にやらせるのが一番いい」と、しきりに日本を勧めにするやうになつた。

いざと云ふ時には、日本が一番頼りになる、極東の英國權益を守るためには日本と協同するより他はない、といふ氣運、即ち後年の日英同盟の氣運が、ハツキリと英國輿論の表面に現れてきたのは、

この頃からであつたと云つてよい。

そこで日本は、直ちに第五師團を動員した。師團長は山口素臣中將であつた。

先遣部隊として、樺島安正少將の下に張成旅團が東島で編成され、直ちに太沽に上陸すると同時に注に日本陸軍の眞價は、各國陸軍の面前で、評價されることになつた。

これより先、太沽砲臺攻撃に向つた六ヶ國の陸軍隊の中で、日本海軍の陸戦隊が最も勇敢であつてその實力は列強の間に伍して、漸く認められたものである。白石大尉の砲臺一番乗りは、最も有名であるが、なほしる日本の陸戦隊は餘り前へ進みすぎで、却つて聯合軍の彈丸に後から中つた者があつたといふくらゐである。

張成旅團は太沽上陸後、直ちに天津城攻撃に向ひ、得意の雄火藥で支那軍の據る城門を破壊し、漸く津城を占領し、同時に直ちに水師營(支那海軍の兵營)を襲撃、これを砲撃に閉ぢられてゐる。

この水師營は、その前日、劉冠雄の聯合軍が攻めて取れ、日本軍に助けを求めに來たのに對し、日本軍は返答がはりに占領してやつたのである。

師團主力の集結を待つて、遂に日本軍を中心に、理強の聯合軍は陣容を整へ、八月四日天津を出發北京討伐の途についた。總兵力二萬二千人程であつた。

齊川龍之介の友人であり、お賢者であつた下島安吾氏は、この張成旅團の衛生部長として従軍してゐたが、吾師の行軍と、衛生部の困難について次の様に書いてゐる。

「天津城が陥落して五師團が到着して、進軍隊に移ると、私は少數の部下と材料を携行して、樺村に病院を開いた。水質不良のところへ、この兵隊の進軍隊は不幸にも多数の赤痢患者を出し、携行藥劑を使用しつくして補充の途なく、しかも進軍隊の憤しきは、落伍患者が職員に知らぬ間に、病室へ投入りこんでゐるといふやうなことを繰出すものだつた。赤痢患者は、後進に集え得る者は天津まで送つたのだつたが、臨終のため醫院へ行つて先づ眼に映するものは、船ばたに一列に並んでゐる患者のお屍である。しかも船の側には、紅い血便の跡が船に流れ下つてゐるではないか——」

しかも、わが軍は悉ゆる吾師に對して、土氣はいよく旺盛で、聯合軍の中堅として各地に陣營を築いてゐるのである。

聯合軍は各國とも互に功名を争つて、はじめから統一を欠いたが、廣州を發する頃から醫學はまず

ます激しくなり、八月十四日各國軍は一齊に北京城外に達し、各城門を破つて先きを争つて入城した。

印度兵が公使館區域の水門をくゞつて午後三時頃英國公使館へ達したのが一番乗りと云ふことになつてゐる。これに對して、日本軍は真正直に北京の英文、譯である新陽門、東直門を破つて、敵の主力と内閣をやり、その數千を殺戮し、その屍を踏んでわが公使館に達してゐるが、いかにも日本軍らしい、やり方だつたと思ふ。

義和團軍や、龍城の各國人は相繼して泣いた。殊に外國婦人などは、感極まつて夢中に城門外に駆け出し、流弾に中つて死んだ者があつたからであつた。六十日振りで龍城軍は城から出て天日

を仰いだのであつた。
北京城と共に、西太后は暮夜ひそかに宮殿を脱け出し、變装して古馬車に乗じ、西安へ避難したのであつた。

日本軍の軍規厳正

清朝末期の首都北京は、國威衰へたりと雖も、その官力は天下に冠たるものがあつた。殊に康熙乾隆といふ黄金時代を去ること遠くないので、皇城には天下の寶物金銀が溢れ、富家には珍財奇貨が澤山に蔵してあつた。

下島氏の語によれば揚村あたりの敵は、縮緬や扇子で土費をつくつてゐたり、通州など、泥濘の路へ移り代りに、五兩、十兩の馬蹄銀を數りつめてあつたといふ。北京でも、喇嘛寺の床下や、豪家の井戸の底などには、とても數へきれない程の銀貨が蔵されてあつたといふ。その富の程度は、その後兵費に充てられた今日の北京などでは想像もつかぬ位だつたと思ふ。

その北京へ入城した各國の兵隊は、そこで何をしたであらうか。まづ掠奪であつた。

「西洋の兵隊の分捕といふものは、諺にもならぬ位ひどかつたもので、戦争は日本兵にやらせ、自分達は分捕専門にかゝつた、と云つても言ひ過ぎではなかつた程でした。」

と、下島氏は語つてゐるが、中でもひどいのは佛蘭西の兵隊で、分捕隊と云つた組織立つた隊をつくり、現役の少佐がこれを指揮して、宮殿やら豪家から寶物を掠奪しては、支那の衣食を羅つて白河を下らせ、そつくり太沽に碇泊してゐる佛蘭西の軍艦に運ばせたと云ふが、その品數だけでも莫大な數だつたと云ふ。

英國兵も北京や通州で大掠奪をやり、皇城内では露西亞兵はその本領を發揮して、財物を盡んに運び出してゐる。

若き日の下村麻直氏も、事變後すぐに北京の町へ入つたが「氣のきいたものは、何一つ獲つてゐなかつた。持つて行けないやうな大きな骨董類は、みんな奪してあつた」と言つてゐるから、どんな掠奪を行つたか分ると思ふ。

關東兵は天文臺から有名な地球儀を奪ぎとつて行き、これが後に伯林の博物館に並べられて、大分問題を起してゐる。

有名な高野山など、日本兵は北京占領後、手廻しよく儲けて保護しようとしたが、この時にはもう事早い佛蘭西兵が入つてゐて、黄金鏡の約録など案を消してゐるのである。後に日本軍が懸念する

と、今度はロシア兵が入つてその寶物を掠奪し、英軍は更にその後に入つて、大規模に荷造りをして本國へ送るといふ始末である。

それにつけても、日本軍の軍規厳正、清廉だつたことは、明瞭であつたことより傳へられていと思ふ。それには軍當局の處置がよかつたことで、兵隊は常に官費検査を受けて、いやしくも文明國の軍隊としての名譽を失墜させることに、細心の注意が払はれたのであつた。

また下島氏の語によれば、通州に於ける佛蘭西兵の暴行は言語に絶するものがあつたといふ。通州入城後、佛蘭西の警備區域で支那の婦人達が籠城したといふ女劇場へ行つてみると、そこは一面の女の屍體の山であつたといふ。しかも若い婦人に對して、一人残らず行はれた行爲は、人間業とも思へぬものがあつたと語つてゐる。今度の通州事件は一世の憤慨を買つたが、この時、佛蘭西兵が通州に入城してやつた行爲は、更に大規模なものであつた組である。これが支那兵や安南の土民兵ならいざ知らず、文明國を誇る佛蘭西人ばかりの安南駐屯兵がやつたのであるから、懸念の餘地もない。

戦後、駐日武官に出かけた田口龍樹博士は、この通州を訪れた時のことを、次のやうに書いてゐる。

「通州の人民は皆聯合軍に歸順したるに、翌日ちんや、露の占領區に於ては、兵が暴行をばしめしかば、人民は驚き日本軍に訴へたり。日本守備隊は之を救ひたり。故に人民は皆日本軍の占領區に歸りて、その安全を保ちたり。余は現に佐本守備隊長の案内を得て、その守備隊本部の近傍に避難せる數多の婦女老人を目撃したり。彼等はみな余を見て上下座したり。佐本守備隊長は日本に此の如き惨事なしとて彼等を立たしめたり。彼等の多數の者は身分ありしものなりしが、その夫、若しくは兄弟の殺戮せられたるが爲に、襦袢家に居住して難を避け居るものなり。

余の聞くところを以てするに、通州に於て上流の婦女の水櫃に投じて死したるもの、五百七十三人ありしと云へり。その水櫃とは支那人の毎戸に存するものなり。かの司馬温公が石を投じて之を割り人命を救ひたりといふ水櫃是なり。露の兵に辱かしめらるるも、下等の婦女に就きては此の事なし。故に水櫃に投じて死したる婦女は、皆中流以上の婦女にして、身のやるせなきが爲に死したることを知るべし。其の情愴むべきものならずや。」

と書き、その後、北支各地で聯合軍の犯した罪状を列挙して、

「凡て此の如き場合に於て、日本軍は支那人の保護者にてありき。支那人は大約日本軍に訴へ来れり

而して日本兵は其の訴を得て派出して之を救出せるなり。故に日本軍は北支地方に於て、實に無敵の長兵を極め込めるものなり」と、感服してゐる。

田口昭幹は更に筆を進めて、

「日本軍が正直すぎたりとの評は、余が北京に居るの際、しばしば耳にしたり。その説として列強せられる處に曰く、萬壽山は日本軍が第一に占領したるに、之を軍備に不必要として放棄し、露軍之を占有してその貨物を奪ひ、露軍その後をうけて方に荷造をなしせり。俄爾は露軍之を占領してその貨物を携帶し去らんとす。然るに日本軍の占領せる皇城に於ては一切の寶物珍器みなそのまゝにして、清國官、官等をして之を保護せしめ居れり。これ餘りに正直過ぎたるものにあらずやと。然れども余は、日本軍が之をそのまゝに保護して清國皇帝に送付するは日本帝國が清國に對し同情を表するの好き方法たることを信じ山口師團長の舉措を喜ぶものなり。嗚呼王珍寶之を得るも何れの價値あらんや。日本軍の舉動は實に大國の舉動なり」と斷じてゐる。

蓋し日本軍の品位は、當時の國民が知る前に、列國の間に無言の中に重んぜられてゐたのである。また日本軍の實力は、歐米の輿論がこれを知る前に、歐米の軍人たちが支那に於て、計に鑑じて認め

たのである。更に日本軍の品位と實力は、實に支那民衆の間に、大きな信頼の念を植えつけたことに於て、北支事變は今日更に大きく評價しなければならぬと思ふ。日本軍の駐屯する所は、各國の守備地域の何倍も狭小したし、民衆ばかりか、支那の政府も日本を信用して、北京の警察事務など、舉げて日本に委託する、といふ風である。また戦後は、日本によこす留學生も増加したのであつた。

日本は北支事變に對して何等の野心もなかつた。兵隊は勇敢で清廉だ。軍部も政府も足踏加へて、たゞ留民の保護と支那の平和の爲に全力を盡して、他に求める處がなかつた。此事變の解決には、日本當局者の考へは公明で大きなものがあつたのだ。あれだけの大軍を動かさし、あれだけの犠牲をして物質的利益の要求は日本が一番少なかつた。清國は各國へ四億五千萬兩の賠償金を支拂つてゐるが我國の得たものは一幣にも満たぬ四千万兩であつた。

これは野心満ちたる露國や露國の要求とは非常な違ひであつた。小村海軍大臣の態度がそこに存したわけだが、軍部も民間の有志連も一致して、支那に對して外交の手をさしおいたのであつた。

今度の支那事變の收拾に當つて「無難策、無難策」の原則に基き近衛首相が何故叫ばなければならぬか。國民はこれに、また實明に北支事變の教訓を酌みとらねばならぬと思ふ。

露西亞の野望

北支事變に於ける露西亞の態度は奇性を極めてゐた。

石井南次郎子の談によると、ロシアは北京に露兵を駐屯してゐる者が、皆殺しになることを希望してゐたと云ふ。だから、天津で北京教授の軍議を窺めようとする、それを妨害するのはロシアであつた。

つまりロシアは滿洲を奪取するためには、北京に露兵を駐屯してゐる各國のウルクが、全部殺された方が好都合だつたと云ふのである。これは露兵が石井氏の計へ持つて来た情報だから、どこまで信用してよいか分らぬが、とにかく、露國が此の變を好機として一仕事目ろんでゐたことは事實であつた。しかも獨逸のカイゼルはこれを歓迎し、佛蘭西は國債を引き請けて、これが兵糧方を勤めてゐるのである。

即ち、事變が起ると共に、ロシアは聯合軍に加ると同時に、その動向が滿洲地方に波及するや、露國保護を名として、大軍を滿洲に派遣して、これを軍事的に占領したのである。しかも露國は死傷の被害に處つて、滿洲の秩序回復の爲は、占領地より撤兵すると宣言したが、それは實行されなかつた。

た。若々と侵略の歩を進める露國の南下は、茲に日本の決定的な決意を要求したのである。極東に大きな権益を持つ英國も、今や日本と同じ露國の脅威下に立つことになつた。日英同盟、そして日露戦争と、北清事變の勃発は幾多の波瀾を生み、極東の天地は更に戦雲の去來憤しきものがある。

露國の野心

明治三十二年、外務省通商局長、林權助は韓國公使に任命されたが、その赴任に先立つて、一週の露國公使の案内旅行を買つた。

その案内旅行には、陸軍の中堅參謀將校三人の名が連署してあり、内容は「露國公使の前に、懇談を述べたいことがあるから、是非来ていたゞき度い」と、武官な文面であつた。その三人とは、田村怡興、遠大佐、鍋島安正中佐、長岡外史中佐で、隨從こそ佐官だが、對露作戰に關しては、參謀本部内の輝ける権威者ばかりであつた。

その雄飛れが面白いので、林は出発前の寸暇を削いで、所定の場所に出かけて行くと、主人役の三人が、軍服姿で待つてゐるだけで、誰も他に相客らしい者もない。簡単な食事が出ても、誰も来ない。妙なことをやると考へて、林は、

「諸君は私を認察すると云ふが、人数はこれだけかい」

と訊くと、

「さうです」

と言ふ。

三人の中で、最もしつかりした口を利くのは、田村大佐であつた。

「今日は、日本の一大事に就て、あなたに折入つてお頼みがある。誰も呼びはせん、さう思つて下さい……」

と、冒頭して、一枚の朝鮮地圖を壁の上に掲げた。随分大きな地圖で、幾何枚位のもので、筆つきや色の塗り方など、彼等が密かに書いた手製の地圖であることは一目瞭然たるものであつた。

「いやあ、大きなものを書いたね。これは大變だ」

と、林は一座の緊張しきつた空気を破るべく、輕口をたゞいたが、軍人たちは「ヨリともしない。

思ひつめた表情で、話し出したのは、最近の陰影なる日露關係であつた。ロシアは西比利亞鐵道の完成には、まだ数年かゝるので、その對滿洲、對朝鮮の野心を、返すためには、旅順の外に、どうしても朝鮮の海岸に、海軍根據地を設けようとしてゐるといふのである。



日英同盟

「かうして地圖である……」
 といつて、村田大佐は、現在の朝鮮半島にあたる場所を指して、

「……特に、この邊を、ロシアに押へられたら、日本は必敗です。われ／＼として、その場合の悉ゆる作戦の對案を想定してみたが、絶対に日本の必敗です……分つていたゞけるでせうな」

林は暫く考へてゐたが、

「承知しました。朝鮮公使として、此の地點でのロシアの策謀は、絶対に防止する積りです。何が起つても、必ず引掛けませう」

さう云つて、互ひに感徳的な握手を交したのであつた。

元來、さうした關係に就ては、外務大臣なり、陸軍大臣、または參謀總長といつた方面から正式に來るものであるが、この場合は、三人の仲間の發意であつたらしい。而も、三人とも非常な熱心さであり「費方を男として頼む」といつた風な頼み方であり、三人とも固中たゞ日本國運の將來あつて、外に何もなしといつた意氣に溢れてゐたので、これが機軸點に燃る氣に入つたわけである。

日英同盟か日露協商か

林は村田公使は、かうして任地へ出發したが、それから一ヶ年ほどして、京城へ至る程で、海軍大臣の軍命が飛んできた。

「ロシアの艦隊が、朝鮮海峽の邊を遊弋中だから、その行動を監視せよ」

いよ／＼お出なすつたな、といふので、林は直ちに仁川へ行つてその行動を調べてみると、ロシア艦隊は、そのまゝ仁川に投錨して司令長官は京城へ乗り込んで行つた。そこではロシアの公使が待つてゐて、共に朝鮮國王に拝謁するといふ願になつてゐた。

何かしら、策謀してゐるといふ豫感がしたので林は、折よく京城の公使官邸を訪ねて來た、外務大臣林有造をつかまへて、早速聞込みにとりかゝつた。

「實は、貴君に折入つて、お訊ねしたいことがある」と言つて、例の村田大佐等が作つた地圖を、林の前に置けた。

「これは朝鮮方面の地圖ですが、一體ロシアが今要求してゐるといふ地點は何處ですか」
 と、何もかも自分によく知つてゐるのだといふ顔つきで、眞向から答ひかけた。村田大佐が驚いて、ボカンとしてゐるところを、更に、

「いづれ軍艦が着ける港に違ひないが、一體何の處ですか」

村田大佐は、面喰つてゐたが、林の鋭い眼光に屈されて、

「これは私としては非常に秘密を守らなければならぬことは、御承知でせうね。口では言へんが、ロシアの要求してゐる地點は、この邊りです」

といつて、地圖の上を指で押へた。馬山浦方面だ。

「いや、有難う」

と、林は村田大佐を玄關まで送つて、引き返して來ると、直ぐ釜山の日本領事に電報を打つた。

「釜山の商人に命じ、商人の見込として、馬山浦附近の地圖を、直ちに買占せられ度し」

商人に命じたといふのは、これが日本政府の仕事とすると、外交上面倒になるからである。買占めが完了すると、果してロシアの公使の耳にも達したと見え、カン／＼になつて朝鮮政府へ抗議を申し



送んできた。まんまと裏をかかれたわけだが、かうしてロシアの厭くなき野望の一つも、軍部士族の先見と、出先外交官の奇智によつて、叩きつよすことが出来たが、いつもこんな巧く成功してばかりあつたわけではない。

ロシアは朝鮮の親善派を巧みに操縦して、韓廷から親日分子を一種することに、全力をそそぎ、事ごとくに策動をつゞけてゐる。

ロシアが滿洲を併し、支那本國の利権を握る中は、まだ日本としても我慢出来るが、これが朝鮮まで手を伸すに至つて、俄然わが國論も硬化したのである。これでは何のため、日清戦争までやつて、朝鮮の保全を計つたのか、意味をなさなくなる。

ロシア親善を叫ぶ民間の聲と比例して、責任ある政治家の中には何とかして此の窮境を外文的に打開せんとする氣運が勃然と湧つたのであつた。

それには方策は二つしかない。一つは此の平和の擾亂者そのものと直接に交渉して、これを鎮止することであり、その第二は、第三國の勢力を借りて、この平和の擾亂者を制圧することである。勿論兩方の場合共、日本の武力を充實して、單獨で充分に押へることが出来るといふことが必須條件であ

るが、外交の手段としては、この二策の外には無い。

日清戦争を主張する者は、前者を採り、日英同盟を支持するものは、後者を採つた。

伊藤博文、井上馨などは日露協商論であり、山縣有朋、桂太郎、小村謙太郎などは、熱心なる日英同盟論者であつて、ここにロシアの極東政策が、文化につれ、日本の外交政策は、二分されることになつた。

英國側の魂膽

日英同盟を當初から一番熱心に主張したのは、林董であつたが、彼自ら認るところによれば、三國干渉後の形勢を見て、清東洋の平和を維持するには、英國と同盟するより外になしと信じ、その所論を閣議報告に示した。

閣議は一讀して、賛意を表し、その大意を採つて、自ら執筆して「日本と英國との同盟」といふ論文を、時事新報に掲載した。これは明治二十八年五月のことであつた。これを機軸として、悉く日英

同盟を論ずる者が揃えては来たが、いづれにせよ、後進國からこんな話を持ちかけても、英國に相手にはされまいといふので、賛成する者は少かつた。

あれほど機軸機軸であつた陸奥元帥でさへ、日英同盟など、一種の夢物語だと断じてゐる。明治二十九年八月、雜誌「世界之日本」に「外交同盟の概論」といふ論の中で、彼は次の様に述べてゐる。

「日英同盟の如き、其の名義は美にして時人之より枚めんと思はれる結果決して少くない。然れども英國は、人の愛を愛ひて之を知れんとするドン・キホーテにはあらず。同盟に依りて日本の安全を保障するを得ると同時に、英國もまた其安全を保障するの義務を日英同盟より得ざるべからず。若しこの義務を與ふる能はずとせんず、英國は決して同盟の與國たるものに非ざる。知らず、論者は、日本現今の国力、果して限りなき英國の防衛に安全を與ふるの力ありと爲す。英國が日本に親好を表するは固より信すべし。英國が何等かの手段によりて、東洋に於けるその地位を維持せざるべからざるは事實也。唯だ英國は日本の兵力は内は以て己を守りに餘りあれども、外に同盟軍を起して大陸に轉戦し、シシボポール以外の海洋に艦隊を出すの力あるを信ぜず。而して、此の力なくんば、日英同盟は無意味なり。此の力なき同盟は、英國より見れば、日本を保護するに過ぎず……故に日本の兵力今

日と大衆なくんば、日英同盟は夢想のみ、虚空のみ、書紙のみ」

陸奥は、三國干渉の時、これを英國の力を借りて押へようとして失敗した苦い経験がある。英國外交の本質といふものに就ては、誰よりもよく熟知してゐるのである。日本に自主的な實力なくして、徒らに他國に頼る外交の無意味なことを知つて、現状のままでは日英同盟を以て空論としたのである。「英國は人の愛を愛ひて之を助けんとするドン・キホーテに非ず」の一頁、今日尙ほ、われ等の耳を打つものがあるではないか。

陸奥の死後、わが国力は衰へと衰へし、殊に軍備は飛躍的に増大し、陸軍は七ヶ師團から十三ヶ師團へ、海軍は五萬噸から二十萬噸に増加する計畫も立ち、陸奥の反對論の有力なる論議が湧らなくなつた。明治三十二、三年頃には、駐英公使加藤高明、前駐露公使西郷二郎など、有力な外交官たちの間に、この日英同盟を支持する者が漸く多くなつてきた。殊に、元老山縣が、これを支持するに及んで、日英同盟は理想論の域から脱して、漸次具體的に進歩して来たのである。

しかし、日英同盟を確定的にしたのは、明治三十四年六月、桂太郎が内閣を組織し、小村謙太郎が外務大臣に就任してからである。桂も小村も、日英同盟支持者であり、殊に首唱者ともいふべき林董

が、外務大臣から駐英公使に轉じて赴任するに及んで、秘密裡に英政府との間に交渉交渉が行はれることになつた。

小村外相は、林公使に、

「日本政府は、英露同盟の締結に、秘密の考慮を施らし、これを支持し、貴官が前に示せる方針を認可する確定の政策を立てた。茲に此の一件に關して、英政府と公式に意見を交換する権限を貴官に授けらるゝ。」

と、公式の電命を發した。そこで林公使は、英国外相大臣ラングスタンを訪ひ、公式に報告を開始することになつた。

當時英露は南阿爾卑に没頭中で、土人相手の戦争ながら、これには手古摺つてゐたのである。「存心ある孤立」など、其つて感傷つてゐたが、國際的に言つて、決して安全ではなかつたのである。殊にロシアとは近東に於て、中央亞細亞に於ては事毎に衝突し、殊に極東に於ける帝政ロシアの進出は、英國の支那に於ける権益に、重大なる障礙を投じようとしてゐる。このロシアの積極的な攻勢に對し、新創日本の優秀なる武力を、その障礙に利用するのは、實に願うてもなき幸である。たゞその

日英同盟

大東明治史

島に日本が却つて強くなつて、ロシアの代りに日本が極東の覇を握り、英國の在支権益を侵しはした。いだらうかの疑念が、英國をして、戰艦に日本に手をさしよべなかつた理由なのであつた。

伊藤博文の披露

日英同盟の氣運が高まるにつれ、一方日露協商の運動も盛んになつてきた。殊に、東海海峽を兩國が買収して海軍根據地設置を企てるに及んで、わが國の日露協商運動者は、ますますこれとの妥協の必要を感ずるに至つた。

一定の協商を早く兩國との間に結んで、その便益を享受し、少くとも朝鮮だけは兼はねばならぬと考へた。彼等は日英同盟の實現性乏しきを信するばかりでなく、英國はともも事を共にし得る國ではないと考へたのである。

明治三十四年八月四日、栗山にある林首相の野田長瀬邸に於ける歴史的な元老會議に於て、伊藤博文は、山縣有朋、松方正義、井上馨の諸元老を前にして、日露協商説を力説してゐるのである。

元老會議の卓上には林駐英大使が打電して寄こした、英政府の意向が詳細に書かれた電文がある。勿論、その内容は、英國側が日英同盟に對して、かなり乗り氣なことを報じたものである。

伊藤は、

「何事も自分相手の英國と聯合したところで實効は無いし、却つてロシア、佛蘭西の怒みを買ふだけで、その結果、滿洲地方に於ける日本の有望なる商工業の利益まで放棄せざるを得ないことになるのではないか。」

と、露面腹見、英國信すべからざる事を主張してゐるのである。

また言つてゐる「日本とロシアは元來協盟はない。若し互ひにその勢力範圍を決めて妥協したら、兩國は永遠に親和出来る。これに反し、萬一干戈を交へ、ロシアを叩くなら、滿洲領土は爾傳のアルナス・コレイヌとなり、日露の間に永遠の仇敵關係に陥らん」と。

これが爲に、伊藤は、日露戰前、野田長瀬として一部民間志士から取られたわけである。同時に、今日考へてみても、當時伊藤たちが主張したやうに日露の間に、一時妥協協約が出来ても、これが果して何時まで續いたものか分らないと思ふ。

日英同盟

大東明治史

當時ロシアは西比利亞鐵道の工事が進まず、その完成は、明治廿七年にならねば出来なかつた。それまでは、何とか日本との妥協に應ずるであらうが、歐亞の連絡が完成し、ヨーロッパの大軍を極東に送り得ると成算が立つた以上、日本との協盟など、いつまでも後生大事にしてゐるわけがない。

この見通しの言不當は説げぬとして、伊藤が大政治家と言はれるわけは、彼が直ちに挺身露都モスコに赴いて、日露協定の懸案解決に當つてゐることである。公使などを介して話をつけても、まだるつこい。この上は自ら露國に乗りこみ、直接、ニコラス皇帝はじめ、各大臣政治家と會つて隨意なき意見を叩かう。誠意を以て、押し切つてみようといふのである。この実行力、殊に自ら國家の運命に任じてゐるその責任感と氣概は、何と云つても高く買はねばならぬと思ふ。

「日本の運命なくして、眞の東洋和平なし」といふ彼の信念は、後年また老翁をひつきげロシアに赴かんとして、ヘルピン驛頭に宛傳に付れるといふ悲劇的な運命を招くのであるが、責任ある大政治家の存在といふことを思ふにつけ、今日のわれ／＼は何となく、明治時代が懐しまれ消えゆくと思ふのである。

栗山に於ける元老會議が終つて、秋の身にかゝる頃、伊藤は女將軍氣風六を伴つて、露露の途に

上つた。どうしても、自ら主張するやうに、日露の調合ひをつける意氣込みであつた。

尤も表面の理由は、アメリカのニール大學創立百年記念祭に列席して、名譽博士號を貰ひ、保養かたがたアメリカから歐洲方面を巡遊するといふのである。

ワシントンでは大統領である、先代のルーズヴェルトに會見、大いに語り、更に在留邦人の歡迎會では、例によつて贈答を揮つて、よい氣持ちになつてゐる。

「いち（位置）は素より重しと雖も、に（荷）は軽ろし、さん（産）は豊じところなく四（時）五（暮）いまだ曾て學ばず、ろく（政）はいまうけず、しち（實）もまだおかず、はち（轉）には要の中にて時々割され、く（言）は絶ゆることなく、じう（住）は大體の清静にあり」

この數文は、曾て大體に自述中作つて、觀察に附らしたものだといふ語つて、一座をやんやと言はしてゐるのである。それから本國を賣つて、わざと本國を離れて、パリに直航した。

廟議の決定

パリに着いてみると、そこへ林義順駐英公使が待ちかまへてゐた。

「閣下、日英交渉は、もう九分通り成功でございます」

と言つて、關係書類を逐一提出して報告するところがあつた。林公使は、勿論伊藤の意見がどんなに大きなものであるか、まだハツカリとは知つてゐなかつたのだ。そして、彼は英國との話がこれ程進行してゐる以上、閣下の露國行は單に邊疆に止め、露國の意見交換に止め、一切具體的な露國議に入らざるやうにと説いた。

伊藤はこの話を聞いて意外の様子であつたが、直ちに林、首相に反動的な問合せ電報を出した。返事は勿論林公使の要求したのと同一の趣旨であつた。

「林の奴、彼の居ない留守に、勝手なことをやもせよ」

と、頗る不健康であつたが、彼は日英同盟の題目に反すの範圍で露國との協定の骨地ありと信じて豫定の如く、十一月二十八日、シアムス・セロ軍官に交會シヨラス二世を訪問、提議を伺つてくれた。

伊藤は、伊藤が英法に關する態度を知り、終始英語で談話を交された。

「我が日本に遊んだ時、誰に會つたことがありませんが、何處でしたか」

「京都で豫説し、同處から神戸まで供奉致しました」

「さう／＼思ひ出します。明かに記憶してゐる。わが國と貴國はその交遊最も厚かるべきで、私の信ずるところに依れば、兩國の協和は、單に兩國のみの利益ではなく、人類の幸福と信じます」

勿論、露國上下の伊藤に對する歡迎は、伊藤をして、すつかりよい氣持にしてゐる。これなら日露の協和可能なりと信ぜしめた。

十二月二日には露國外務大臣ラムズドルフを、翌三日には大藏大臣ワイツナを、それ／＼官邸に訪問して、日露協和の進路を行つてゐる。

その結果、伊藤は日露協和可能と信じて、林首相、東洋報に電達し「日露協和可能と、日英同盟維持」を要請した。

廟議は、ロシアを控るか、英國に頼るか、露國に投訴するか、露國の決心を決めなければならぬ。明治天皇の御諮詢に對する、元老等の意見は「日露協和の成否の懸念せぬのに、今や暫に成立せんとする日英の協和を延期し、若し英政府にして、その提議を撤回するに至つたならば、日本は英露兩國の同協

を失ひ、國際的孤立に陥るや請し難い」

といふので、速かに日英同盟を促進するを可とするに一決した。

殊に、此の頃から、英國領が露國に、日本提出の同盟原案に歩みよつて来た。今まで、露國に對してゐた條件を、全面的に露國撤回して来たのである。それは、伊藤の露國に於ける活動によつて日露協和が出来上つたから、由々しき一大事だと露國からである。日本をロシアの側に立たしては、その露國提議は露國の危険にさらされると、あくまで實利的な英國は、日英同盟へと進んで身を投じてきたのである。そこで、日本政府の原案を悉く承認して、翌明治三十五年一月三十日、日英同盟は露國に成立し、兩國全權の調印が成立したのである。

此の點で、伊藤の露國行は、思はぬ側面の大手柄をしたわけである。

だから、日英同盟成立と共に、ロンドン・タイムスは伊藤を以て露國の協和者と稱賞してゐるし、當時のフランス外相、アノトーは「伊藤は露國の巧妙な策士を用ひて、日英同盟を成立させた」と、メアの新聞記者に語つてゐるが、伊藤としては、盡し苦笑に堪へないであらう。

歸朝後、記者があつて「どうもロシアではお氣の毒でしたなあ」と云つて、彼のために慰め語をす

ると、伊藤はいつも「あれは、わしの失敗ではないさ。勝手に花といふのが、こんな場合のことを言ふのだからな」

と言つて、こたはりなく呵々大笑したと云ふ。

君子は約變するといふが、伊藤が柏林にあつて、日英同盟と露議決定と聞いた時の態度こそ、いかにも伊藤らしかつた。

これが他人ならば、自分の言ひ出した日露協約が容れられず、外國で立ち往生させられたと言つて不快がり、直ぐにでも日本へ歸つて来るところであらうが、伊藤は此の電報を受けた瞬間から、内心はいさ知らず、忽ち日英同盟論者になり、十二月の末にはわざわざ英國を訪れ、外相フランスダンをその邸邸に訪れて、自分の露國行きが、全然私的漫遊に過ぎず、と言ひ譯を言ひ、日英同盟の必要を切實してゐるのである。

日英同盟の成立

明治三十五年二月十一日、紀元の日を以てして、日英同盟成立のことは、東京とロンドンにて、同時に發表された。

こんな重要な同盟が、少しも外泄に洩れず、秘密の中に進行し成立したといふことは、當時でも珍らしい例であつて、日本の外交が如何に堅實なものであるか、諸外國に異様な感服を與へたものである。

開戦の日に、フランスダワン外相は、林公使に向つて、

「一年餘りにも及ぶ永い交渉の間に、この秘密が漏れず、今日開戦することが出来たのは、兩國外交の互に信頼し得ることを表明したるものであつて、兩國の親交これより益々厚きを加へるものである」

と、實詞を述べたのである。

日英同盟條約は、六ヶ條から成り、その旨意は次の語を以て、その目的を明かにしてある。

「日本政府及び大不列顛國政府は、偏に極東に於て現状及び全局の平和を維持することを冀望し、且兩國の親交の維持と領土保全とを維持すること、及び該二國に於て各國の商工業をして均等の機會を得

せしむることに關し、特に利益關係を有するを以て、茲に左の如く約定せり」

その要點は、

一、日本の朝鮮に於ける權益、英國の清國に於ける權益が、他國の侵害を受けた時は、兩國はその防衛に必要な措置をとること。

二、若し兩國の一方が第三國と開戦した時、他の一方は該第三國を助る。若し他國が該同盟國に對し交戦に加はつた時は、兩國は協同して戦ふ。

これによつて、日本がロシアと開戦した時は、英國は露國中立を守り、若しロシアの同盟國フランスが更に参戦する場合は、英國は日本側に立つて参戦する、といふのである。

日本もこれで、ロシアに主力を注いで戦へるわけである。即ち日英同盟は、要するに、日本をけしかけて、ロシアを叩く、英國の軍略的とする露國の論議となるわけである。

何か事件があると、いつも露國政府の調々たる議論を吐く谷干城は、伊藤、林に極力加へて、

「伊藤は、輕躁なる林、小村に導かれて露に行き、款物を開始し、遂にはこれを中止して歸朝せねばならなかつた。政府の真意は日英同盟の成立で、天狗の如く高かつたが、伊藤は當然として露に取の如

くなつて歸つて来た。しかし國家をして日露戦争に突き進めたのは伊藤でなくて林等である」

と言つてゐるが、日露の開戦は、日英同盟なくしても、必ず勃發したのである。日露戦争當時、露國の露亞から三國干渉の大失敗を喫した日本外交としては、近づき来る日露戦争に對して、これだけの外交的の布石を定めてゐたのは、寧ろ大成功といふべきであらう。

殊に、日本が露國の脅威で、露國の露亞大國と同盟出来たといふことは、露國民に非常な大きな自信を與へ得たのである。この露國の自信だけでも、とにかく、日本の露國に對して、大きな優待だと思ふ。

併し、更に谷干城は次の様に言つてゐるが、この點になると、今日われわれは、充分に思ひ當るものがあるではないか。

「英國の領土からざる、實に日露戦争に於て、支那に勝算ありと認むるや、支那に好意を寄せ、支那の運に降伏するや、忽ちわが國に軍艦なる軍隊を寄す。今日、英が我と同盟を結ぶるは、一に以てわが海陸軍の力を強めて、自己の威力を東洋に輝かし、露國をして英を懼かしむるの策に過ぎず。要するに、我が外交政策のみ、決して露國の同盟にも勝せざるが如き懐快心なきは、後右に英の文明國

たる所以なり」

と、喝破してゐる。

この意見は、日露戦争前なりし明治廿七年に發表されたものだが、當時、わが國民は學つて無知無識に日英同盟を詠歌してゐる時だつたに、時の賢者は、時勢の一端は察かに書いてゐたのである。

然るなること世界に定評ある英國實科外交の實績も、當時の國民はもつとよく認めるべきだつたであらう。

餘蘊ではあるが、當時わが駐米公使館が、英國新聞記者性報のために使つた機密費は二十萬圓であつた。何しろ輿論の風潮を相手に、日本に有利な條件で同盟協約を結ぼうといふのだから、官談集には一方ならぬ苦心が窺つたのである。

當時の機密費といふものは、極めて少額で、特に外務省はケチ臭くてなかく、送つて寄こさない。林公使は機密費に十萬圓要ると思つたが、本省に對して十五萬圓と少し吹つかけた。すると、小村外相は、當時としては破天荒の機密費二十萬圓を送つてよこしたのであつた。

これは林公使の直話だから間違ひはないが、そのため、日本の宣傳戰は極めて圓滑に運ばれたのであつた。

小村外相の機密たることは、随く世間に喧傳されてゐるが、こんなところにも、その太つ柱なところは窺へると思ふ。

當時の林内閣は次官内閣、閣内閣などと新聞などから揶揄された位、お粗末なものであつたので小村の外相としての入閣を聞くも、その友人たるは、

「こんな海軍内閣へ入るのはよせ」

と言つて止めたが、小村は、

「いや、たとへどんなにお粗末な内閣でも編はん。内閣の壽命が三ヶ月でも続けば、俺はその間に是非やつて置かねばならんことがあるのだ」

と言つて、入閣したのである。

小村がやらねばならぬと言つたのは、近づくつゝある日露戦争に對する、外交の準備なのである。即ち、日英同盟の締結、更に外務省陣容の整備強化であつたのである。

聚して小村は、その兩方面に大馬力をかけた。

日英同盟のために、在外使館を増設すると共に、軍材の本省集積を計り、特に、山縣大將を抜擢して、樺省の政務局長の椅子に据えた。

山縣は樺省駐在の窮乏であつて、時に年俸僅かに三十六歳であつた。

かうした、日本外交界空前とも云ふべき小村、山縣の名コンビが出来上つたのであるが、彼等は益に全力を傾注して、軍部との協調を保ち、日本民族にとつての最大の偉業と云はれる日露戦争に對して、水も漏らさぬ外交陣を布くことになつたのである。

對露強硬論

と七博士



本多 眞太郎

露國の南下

日英同盟の成立は、ロシアをしてかなり反省せしめるところがあり、その結果、ロシアは、北滿洲を以て北滿洲に威嚇させて来た軍隊を、撤去させることになった。

明治三十五年四月、露國との間に出来上つた、露國海軍條約がそれで、その内容は、三期にわたつて海軍を約し、調停後六ヶ月毎に、三期で全部の兵隊を撤退することを規定したものであつた。

此の條約を、ロシアがどれほどの誠意を以て履行するかは、わが領野の、いやしくも日露間の國交の將來を憂ふるの士は、非常なる注意を拂つて見まもつて来た。

第一期の撤兵は、無事に實行された。

「この分なら、ロシアとは戦争になるまい」

と、安堵の思ひを、語り合ふ者もあつたが、ロシアの外交の本質を見極めてある、軍人とか外交官は「安心は早い。そのうちに、何等は何か口實を見つけて、撤兵を迫り出すから……」

と、言つて、相成めて来た。

第一期撤兵當時は、知日派とも云はれたウキツアが大蔵大臣で、極力平和のうちに日本との國交を打開してゆかうとするが、ロシア政府の内部に流れて来たのであつた。

この前年、ウキツアは、樞密院の座に上り、各地に駐屯してあるロシア軍隊の軍紀、その撤兵のいろいろの取柄を調査して、露國側、その撤兵の理由を皇命のもとへ提出してあるが、その中で「皇軍の軍隊の士気が如何に衰へ、また滿洲露國の極めて悲觀的な現状は、余をして、一躍も早く、ロシアの軍隊を滿洲より撤退せしめ、日本との間に親善協定を講ずるの必要を痛感せしめた」と告白してある。しかも、彼は、此の日露協定がなければ「將來如何なる慘狀を招くかも知れぬ」とまで加へてあるのである。

一方、露日ロシア大使コーゼンなども、しきりに日本國內の輿論の激化を傳へ、急變の迫れることを警告するし、外相、クムスドルフなども平和主義の男だつたので、とにかく第一期の撤兵は實現されたのであつた。

しかし、翌年八月に、ウキツアが大蔵大臣を解任され、クムスドルフもすつとも皇位の信用を失つ

てしまふと、露國政府は全く國務大臣ベソブラゾフ、樞密院議長アレクシエフ、内務大臣ブレイヴエーなどの、露日主戦論者によつて占められてしまつた。

これでは、もう撤兵もなにもあつたものではない。第二期の撤兵協定も、ブレイヴエー内相は、露國に於て、

「ロシアの今日あるのは、外交官の力ではなく、銃劍の力である。樞密院は外交官のペンに依らず、威嚇の力で解決すべきである」

と宣言して、主戦派の軍人たちの喝采を博してゐるのである。尤も彼は必ずしも其の主戦派ではなく、ある時、クボトキン將軍が滿洲軍司令官に任命されぬ前、ブレイヴエーを殺へて、

「今日の戦争に同意して、政治的冒險國に加擔したのは、大臣のなかでは君一人ぢやないか。君は何の益するところがあるんだ」

と、詰問すると、ブレイヴエーは冷然と、

「あなたは軍人だから、ロシアの内部政治を知つてをらん。今日、ロシア國內に瀰漫する革命氣分を抑制し、散らしてしまふには、どうしても外國と一戦を交へて、愛國心をかき立てるより外に、手段

はないのだ」

と、答へてゐる。内務大臣として、革命黨に努力してゐるブレイヴエーとしては、外に戦を擧げて内を統ずるといふ手段に出でざるを得なかつたのだらう。且に帝政ロシア國家の強弱があつたのだ。

ロシア政府の中で、其の主戦論者は、ベソブラゾフ一派であつた。彼は東亞工業會社を經營し、朝鮮滿洲方面に、多くの利権を持つてゐた。その上、ロシア皇室の中に、豊富な勢力を持つてゐて、本ことに朝鮮進出の必要を説いて、皇帝を動かしてゐた。

ニコラス二世は、暗黒の人ではなかつたが、意欲強盛だつた。しかもその周囲の環境は、ベソブラゾフをはじめ、樞密院や、高官たちがその環境を醸成して、しきりに自尊心を煽つてゐたので、皇帝自身かなり強い自尊心にとりつかれてゐた。この自尊心に乘じて、いろいろの進言が行はれ、樞密院などは、皇帝の意を一つで決定されるやうに働いてゐた。

ベソブラゾフ一派は、

「今、全世界に大ロシア皇帝に向つて宣戰し得る程の勇氣ある者があるとは思はれない。日本などに對しては露國は一切無敵である。故等に對しては威嚇のみが、唯一の外交手段である」

と言つて居るのである。

明治三十六年、ツアールが獨逸のドルムシュタットに滞在してゐる時、

「日本は日下、猛烈に獨逸の準備をしてゐる」

といふ情報があつた。この時、獨逸は極めて平然として、

「戦争はあり得ない、何故ならば、余が戦争を欲してゐないから」

と言つてゐるのは、當時のツアールの自尊心と老練心を的確に現はす言葉であらう。

爾後、青林省から出兵する第二期の進兵、チ、ヘル省から出兵する第三期の進兵も、公然と無視

され、延期された。それどころか、滿洲だけでは満足せず、日本がその生死を賭してと思ひ込んで

ゐる朝鮮へも、後方の手をのべてきた。即ち、名を森林伐採に託して韓江岸の既設港を占領し、韓江

に迫つてこれが租借を要求し、その承認もないのに、若々新設の港をすゝめ、極端まで築造してゐる。

少壯軍人の躍起

これらの露國の積極的進兵はわが國の堪へ得るところではなかつた。今にしてこれを阻止しなくては、東洋の平和なく、また日本の存立もない、といふのは、わが朝野官民の等しく一致した考であつた。

たゞ、伊藤博文、桂、板垣などは、この危機を、戦争によつて打開するといふのは最後の策で、それまでは出来る限りの外交手段を講じなければならぬといふ、どちらかと云ふと消極的な態度を持してゐた。即ち露韓外交論、つまり露國の滿洲に於ける特殊權益を認める代りに、日本の朝鮮に於ける保護權益を認めると云ふ、日本としては進歩的最後の要求を定めて、ロシア當局と血のなむやうな交渉を重ねてゐたのである。

朝鮮に對して、ロシアがその魔手を伸ばして来た以上、いさゝか、何の露韓外交論だ。

といふのが、わが一般の輿論であつて、いきほひ、伊藤、桂の露韓外交を攻撃する大の手は各所に擧がったのである。併し露國露兵の責任を一身に背負ふ後等にしてみれば、露韓はと云はれやうが、とにかく露軍だけの手段は盡してわかれば、と云ふ氣持は無理もなかつたと思ふ。

しかし、國家の國は、東洋百年の控策を變ふるの士は、官民を問はず、猛烈として躍起して、「露

國打倒」の國論喚起に努めたのである。

民間側に於ける、對露同志會の活躍に對し、陸軍軍部の少壯方面に於ける保護論は大の玉のやうに

燃え上つて行つた。

明治廿六年五月二十九日、外務、陸軍、海軍の保護論者が、芝の護本園月に會合して、歴史的な懇

話會を開いてゐる。

當夜の出席者は、外務省が、政務局長の山原四次郎、本郷少輔など五人、海軍が軍令部第一部長官

富岡定太郎(後中將)、山下少輔(後中將)、八代六郎大佐(後大將)、海軍大學教官秋山眞之介

大佐(後中將)、軍令部副官上原徳兼中佐(後中將)、軍令部參謀松井清吉少佐、それに、陸軍側からは、參

謀本部參謀部長井口春彦少將(後大將)、同第一部長松岡敏胤大佐(後大將)、田中義一少佐(後大將)、

副部長太田少佐(後大將)といふ、三名の少壯が目的を同じくして寄り合つたのだから、大へんである。

軍事後、勿論、賛成など一人も座に招ばずに、陸軍は陸軍の立場から、また海軍は海軍の信する

ところに従つて、露國露兵を叩へて、夜を徹するばかりであつた。

ことに、當時の參謀本部第二部長岡島安正少將は、病氣で當夜の會合には出席出来なかつたため、

以象中佐に自分の意見を托して、露國の止むを得ざることを力説したのである。即ち云ふ。

「今更、この期に及んで、議論はないと思ふ。露軍が六六艦隊を建造したのも、陸軍が六箇師團を十

二箇師團に増設したのも、みな今日あるが爲である。日本が負ければ、ロシアに懸望は奪はれるかも知れず、莫大な償金も要求されるかもしれぬ。併し露國の聯合を豫想しても、北海道までよこせとは

云はないであらう。

いつれにせよ、日本が負けたところで、日本は滅びない。併し今更ばれば、あの凄じい勢で東洋

に入つて来てゐるロシアが露國で力を充實し、朝鮮に進出してゐるのは明らかだ。さうなつては、た

とへ露國など結んでゐたとして反古同然となり、日本は大津から永劫驅逐されるは勿論、露兵は

勿論九州にまで手を及びようとするだらう。これを思へば、今更んで戦ふより外に道はない。露一戰

に負けるが如き露國の聯合に際つても、日本國民が憤慨すれば、百年を待たずして、必ずや復讐すること出来る。願じて、妥協すべきではない」

參謀本部第二部長が、こんな熱烈な決意を持つたのであるから、當時の事態が如何に懸危出来ぬものかつたか察せられよう。

此の席上、陸軍の西用少佐が、外務省の山座政務局長を従へて、

「日露戦は、何處まで行けば片がつくと思ふか」

と、メンタルテストの種りで訊くと、

「ヘルピンまで進めば、ロシアはベシヤンコだらう」

と、山座は答へたが、これは曾軍軍事學家が密かに信じてゐた、戦争範囲の極限だったのである。

陸軍の近づくと共に、外務省に於ける山座の権威は益々高きものであつた。深夜に至ると、陸

軍局長の灯は、明か／＼と燈つてゐること驚くであつた。

酒家の山座は、その机の下にビール樽を洋山に置いて、軍人の訪問者でもあつたと、

「わい／＼、これがあるぞ」

と、如何にも嬉し相に、樽をとり上げて、乾杯し合つた。

管内の便所が遠いので、時々、堂の外へ出て、樹木の根元に放尿する、小使が、

「局長さん、木が枯れますが」

と、その度毎に注意すると、

樺太防務局長へ伊藤を訪問した。伊藤は山座を部長間に進めて、陳謝するのを推却しながら、常用の葡萄酒をナビ／＼傾けてゐた。しかも、伊藤はジョ／＼と山座の顔を見てゐると、山座は例の率直な調子で、

「私も御招待しませう」

と自分から手を出して飲んだ。やがて陶然となつた頃、今まで黙つてゐた山座は、

「實は先夜、こんな氣持から、貴方を叩き殺せと言ひました」

とその對面強硬策をのべ、さつきと歸つて来てしまつたのである。

山座は驚かされたが、日本民衆の爲めには、ロシアはぜひ崩壊せねばならぬといふ、不逞極の信念に燃える彼の前には、元勳も元老も大したことはなかつたのだ。

「日本の外交の中心はロンドンでもパリでもない。ロシアと支那だ」

と喝破して、往年の帝大生飯田弘毅氏を激怒した山座は、その後支那公使として活躍中、病

名不明の中に北京の公使館内で客死した。その秘葬を洩れられて、皇軍官報の爲めに、毒殺されたとも言はれてゐる。

「ウソ、ウソ」

と、假いてやめる。しかし、また例になるとやると云ふ有様で、訪問した者は、よくあれで、外務官吏のやうなハイカラな役人が数ももものだと語り合つたといふ。

傳し、小村外相は、事對露問題となると、いつも山座を片胸として、信賴たゞならぬものがあつたといふから、その意見のほどは察することが出来る。

即時開戦論の山座は、ある時附つたとされに、「軟弱外交の親王、伊藤博文を叩き殺さなやいかん」と宣言したことがあつた。

これがどうした経路で伊藤の耳に達したのか、激怒した伊藤は、小村外相を呼びつけ、

「君の部下の山座といふ男は怪しからん奴ではないか。吾輩を叩き殺せと言つたさうな」

これには小村も黙口して、山座に質してみると、

「確かに、そんな風なことを言つた覚えはあります」

と答へた。

小村は、それでは一度伊藤公のところへ行つて、謝つて来い、と命じた。山座は仕方がないので、

對露同志會

明治三十六年十二月十日、この日、車馬騒動し、第十九議會開院式が行はれ、終つて十一時三十分議員の着席するのを待つて、議長河野廣中は、林田龜太郎書記官長を従へて議長席に着いた。開院式の結語に對する、領答文を議決するためである。

議長廣中の中に、長髪を蓄して、領答文の草案をとり出した

「あ、しくれふに、車馬騒動して、故に第十九回帝國議會開院の儀式を挙げ、優美なる聖詔を賜ふ。

以て皇威の振りに堪へや……」

首相明々、この自由黨生え抜きの國士の聲は満座を震して、議場の隅々まで響きわたつた。奉答文の普通の文豪通りで終るかと思ふと、續いて河野は聲を張り上げて、實に近代水師の、内閣閣僚の文

を讀み上げるのであつた。

「……今や國運の興隆海に千載の一遇たるに當りて、閣僚の施設之に作はす、内政は編纂を奉とし

外交は便宜を失し、臣等をして憂慮痛く疑はざらしむ、仰ぎ願くば臣等も亦願ふことを……」

それから、また普通の本答文の形式を讀んだ。

「……臣等協賛の任に在り、慎重審議以て、上、陛下の聖旨に答へ奉り、下、國民の委託に副いんことを期す。衆議院議長河野廣中誠懇誠懇、謹んで奏す」

議場へ入るが如く、腰懸つて拍手鳴り止まなかつたが、やがて夢から醒めたやうに、ガヤ／＼と静き立つた。

「御座いますか、可決致します」

さう云つて、議のやうな河野の巨額を壇上を下りてしまつた。

文句をつけるものもない、アツサリと議会はこの柱内閣協賛の本答文を可決したことになつたのである。

本答文讀中に、これは變だなど氣のついた議員も居たが、暫州の議長、その文を讀んでみて、これは容赦ならざる内閣協賛の本答文と知つて、異常自失する者が多かつた。衆議院議長の内閣協賛の本答文など、わが憲政史上、空前にして、絶後の事件であつた。

暫州去つて後、一方には議長の経緯演説を鳴らし、その演説を唱ふる者があるかと思へば、中には議長の前座を賣り、議長家へ駆けこんだ、奥田義人、尾崎行雄等の議員もあつた。議場は騒がしくなつたやうな騒ぎである。

その間、横濱、横濱、横濱、その處に在つて船んど突進としてゐたが、やがて歸つて議員等と遊遊し、協賛の末、河野に向つて、その取消しを要求したが、暫州は断乎として拒絶するに及んで、議会は解散となつた。

河野の控じたこの演説の二石は、實に野黨外交に於て戦線を事としてゐた柱内閣に對する、わが官民有志の猛烈な抗議だったのである。

倫敦タイムズは、これを評して、

「日本帝國議會の規定なる本答文は、露國に對する明白なる警告と云つてよい。若し露國にして相當なる協賛を承諾せざれば、平和的解決は絶望であらう」

と云つてゐる。

暫州がこの舉に出たのは、既に内閣を弾劾して、自ら快としたものでなく、その根本精神は政府の

議院に對する外交を控して、その強化を求め、露國協賛の解決を期さんとする國民の聲を代表するものである。

伊藤首相も、この本答文のために解散と期し、當局者の措置を期して、

「本答文の真意は、政府が露國に對する決意を促すものであつて、必ずしも解散ではない。このために、議會を解散するのは適當ではない」と云つてゐるが、兎も此れを證據にして、露國が漸次硬化し終にロシアに對して最後の決意を示すに至つたのを想へば、この本答文も相當な意義を持つものと云はるばらぬ。

この外、柱内閣の軟弱外交を弾劾してゐた民間の中心團體は、明治三十六年八月に組織された露國同志會であつた。

彼等はその大會を神田區神保町に開き、

「露國をして露國協賛を履行せしめ、露國をして露國協賛を履行せしめ、以て露國の平和を確保するは、帝國の大難なり。吾人はわが政府が敢て無言せず、速かに之を履行せんことを切望す」と、決議して、政府を弾劾するところがあつた。

露山公、近衛篤磨は病重くして、この處に出席出来なかつたが、演説を寄せて同志を激勵するところがあり、同志會の活躍はいよいよ熾烈になつて行つた。

而も、既に河野廣中の事があつて後、露國同志會の領袖にもは、この上は自ら大膽に訴へるより外に手段なしといふので、十二月十六日、神樂坂、長谷川芳之助は宮内省に出席して、文部大臣細川潤二郎の手を経て、一篇の意見書を呈呈して、日露協賛の止むを得ざることを奏上するに至つたのである。

七 博士事件

露國同志會の決議と歩調を合せて、露國協賛論の輿論喚起に努めたものに、所謂七博士があつた。法政大學教授、宮井政章、金井延、河尾幸、中村進午、高橋作寅、小野塚喜平次、戸水寛人の七人は、建議書を以て、横濱、小村外相等の書記を要請し、世人の注意を惹き起した。

劍牙の場を出て、敢て世論に訴へんとした彼等の行動は、當時、博士の權威の高かつた時だけに、

大いに一世の耳目を驚動したわけである。

「……唯だ切に望むらくは、爾等諸國政治家たるもの言葉を以て、我を説くことあるも、議院交渉又はこれに類似の姑息策に出でず、根柢的に滿洲問題の問題を解決し、結果の決心を以て、極東の平和を永久に維持するの大計を策せられんことを」

しかも、彼等は軍に建議だけで満足せず、打撃つて首相官邸に、種々意見を述べられてある。

軍井政事、まづ口を切つて、

「政府の對露方針は、とかく強硬と云はれるが、何故に強硬手段を採つて、速かに時局の解決を圖らぬのか」

彼は、黙々として聴いてゐたが、

「日露の交渉には、當局者が責任を以て從事し、爾等不抜の態度をとつてゐるから、諸君の心配は無用である」

「政府の方針は議院交渉であると聞くが、本當でありますか」

「それは然りだ。然して、議院交渉は行はない」

と、意氣激昂たるものがあつたが、學者たちは詞を執めなかつた。

「露國または他の列國との交渉が、何如なる理由でかくの如く強硬するのですか」

「それは、同盟國であるイギリス、その他の列國の意向も十分に研究しなければならぬから、さう諸君が考へるやうには、無條件にはゆかんよ」

彼はあくまでも、學者たちを「民間知らず」扱いにした。

「戦争には戦費といふものがある。ぐづぐづしてゐて戦費を失せられたらどうしよす」

此の質問には、彼は、「軍事のことは、傳も知らぬ余も軍人である。諸君の容赦は言さん」と、黙子として、その自信を示してゐる。

「戦費のことは、われ／＼法律學者の知るところでないが、今日戦はずれば他日、戦を喰ふも及ばぬことになりませう、願はくは深思したまへ」

彼は冷然として、

「諸君の精神は固とするが、戸水君などは、少し教授としての職分を超えてゐるものがあるやうだが、くれぐれも注意したまへ」

と、聞つてたしなめてゐるのである。

と、聞つてたしなめてゐるのである。

戸水君は法律大學の羅馬法の教授として、當時に於いて碩學の名が高かつたが、日露の風雲急を告げるや、その名譽を論じて、矢つぎ早に論文を書き、報知、讀賣、日本の各新聞に寄せて、大いに國民の士氣を鼓舞した。

時の東京帝國大學校長は、會津吉武士の風格ありとして知られてゐた、山川健次郎であつた。世論の起つたのを發へて、一日戸水博士をその一堂に呼んで、黙々として説くところがあつた。

「諸君はそれの中に、一脈としたところのある總長の言葉の前には、さすがに剛毅の戸水博士も、徹して反駁せず、互ひに笑ひの中に終つたのであつた」

大學の獨立と博士事件が起つたのは、この後日露で、ボーツマス條約の締結を認めて、再び戸水君が政府攻撃の大義を切るや、當局はこれを休職處分に附したのである。これに對して、山川校長の辭職提出、つゞいて七博士以外の全法律大學教授の辭表、これに對して遂に屈した當局は、久保田漢文相の免官など、一被英使を呼んで、日露戦争終末期の國內に、大きな衝動を興へたものである。

いづれにしても、當時の大學教授、博士などの社會的の尊榮は、今日では想像も出来ぬ程大きなものであつたから、この七博士事件の推く社會的の波紋は、京大事件、英露問題など、この頃の學校騒ぎの比ではなかつたのである。

それだけに、彼等が輿論の先頭に立つて、對露強硬論を叫んだことは、その意味は論ぜぬとして、國民の士氣を鼓舞せしめる上に、大きな役割を果たしたのである。

外務、陸軍、海軍の少壯主義派と云ひ、對露同志會、七博士の活動と云ひ、これ等の對外強硬の活動がわが國論を喚起し、所謂國民精神總動員の實を擧げたことは、大きなものであつた。

彼や伊藤が、日露戦争に於て、よく官民を指導して、深遠とした國內風潮を以て、戰勝の榮譽を得たことを賞讃する者が多いが、實はこれらの立派な風潮は、上から命じて出来たものでなく、國民の間から盛り上つた精神たる組織であつたことを、今日われわれは十分に反省しなければならぬと思ふ。

と、聞つてたしなめてゐるのである。

「公の時、必ずしも著しき特徴あるを見ず。唯々其華容容道らや、遠近自然に顔に合ひ、一見凡庸ならざるを知る。顔る気概に富み、少しく苦言を呈することあれば、双眉紅を漸し、直捷爽快自ら懐す懐はざるの態あり、唯々然り、故に克く諷諭を牢記し、過を再びすることなく、學業本隨つて上述するを見たり」

と云つてあるが、とにかく尋常の公卿の子弟ではなかつたことは察せられる。殊に氣概に富み、と評されてゐるが、其後の生涯を通じての特徴は、實にこの一片狀がたる實氣だつたのである。

大學進門に在學中、明治十三年の冬から翌年の春にかけて、其時は近畿地方を旅行してゐるが、一日、近衛家の祖と云ふべき鎌足の神廟たる多武峯、淡山神社に詣つたことがあつた。

淡山といふのは、往年、鎌足が中大兄皇子と共に入唐謀叛の計を密議した所で、これを淡山と云つてゐたのを、なまつたものらしい。

此の神社の裏手にあつて、密林があり、天下に事あると、忽ち竊動すると傳へられるので、「密林」とも云はれてゐた。場所があつた。其時は親しくその土地を踏んで、祖先の功業を偲ぼうと思つて、宮司に相談した。

ところが、宮司は色を失つて、

「御被製の地は、密林深く、其も生ひ繁つて歩むことも出来ません。よして、此の地に入つて、樹木など折ると、必らず一身上の服装が起ると言ひ傳へられて、今までは誰も近づく者はありません。お止しになるやう、切におすゝめ致します」

と押し止めたが、血氣の熱は、

「自分は藤原氏の末裔に生れ、今この地にやつて来て、祖先の偉業の跡を訪れようといふのに、神隠など言つてよいものか。みだりに神域を汚すことさへしなれば、神威に觸れる筈はない」

と云つて、強ひて奥深く入り込み、訝さにその邊を調べたのであつた。

その手記に、「樹木鬱々、風聲飒々、思はず恐懼の念を生じたり」とあるが、年少豪氣の風に揺れた様が見られるのである。

海外遊學

明治十七年九月、其時を以て、其時は海外遊學を命ぜられた。加藤、海外遊學は其時の熱望ではあつたが、當時華官の青年を留學させるのは、一種の流行でもあつたのだ。

たゞ思慮の決らぬ青年を、漫りに外國にやり、その風に無気物に染まるのを警戒して、英國や佛蘭西のやうな自由民権の國へやるのは、反對が多かつた。殊に保守的な官員其類は、華族の子弟の英佛留學に強硬に反對し、「若し強ひて行きたいなら、帝政盛んなロシアにしたらどうか」と云つてゐた。時の宮内卿は伊藤博文であつたが、目先の利く彼は、留學の機軸を引立て、己れの利算としよると、その人物を内々物色中だつた。其時、留學の海外留學の希望が強いのを聞き、親ら留學の勞をとり、「先米がグアタラレーといかんのなら、其國か、ロシアにしてはどうです」と云ひ、玉璽に奏して外遊の機軸を公したのである。

この時、伊藤は事ある毎に、其時を引立て、自分が貴族院議長の時には假議長に推薦し、後には岩倉の其時を議長に推すなど、努めてこれに目をかけたのであつた。

伊藤のこのやり方は、西園寺公などに對する態度の中にも現れてゐるのであつて、近衛篤磨といひ

西園寺公望と云ひ、伊藤の眼に狂ひはなかつたわけである。

其時の外遊に際して、其時文忠は其時七十七、海外萬里に愛極を送るを惜しみ、其時一編に歌を添へて、饗けとしてゐる。

其時ものよなひ（同近かに）西洋におもむくわかれに水晶の玉をそへて、

いやましに、みがりがりがりな、玉の心のをしへとはせよ。

明治十八年四月、其時は佛蘭西に乘つて横濱を離陸した。特命全權公使西園寺公望、細川護国公使、同船であつた。

途中、船は亞細亞の澎湖島に寄港したが、時に清國と佛蘭西は戰を交へてゐた時で、連年の佛軍は澎湖島を占領してゐた。

其時はその時の感想を手記してゐるが、

「佛國々族の軍々に觸れるを見れば、其地既に佛軍の占むる所となりしや知るべし。然しべき哉、然れども隨所の十種洋次西人の觀察するところと爲る。我國何ぞ之を對峙の火災にして可ならんや、其亡國の憂へ、慄かるべきなり」

青年、紅顔の貴公子、早くもこの感傷がある。後年の支那使を論じたは日本同盟論の主張は、實に偶然ではないのである。

頃國のウキキに着くと、旅費はまづ開港口の勉強にかゝり、續いて獨逸に移つて、柏林に居る定めたる。更にボンに轉じて、その地の大學で國法學を學ぶことになつた。

ボン大學に在學すること二年、この間、駐獨公使品川彌太郎などとも面會、東西を旅行したり、ロン・フンをも訪れてゐるが、後、更にライプツヒ大學に轉校し、憲法學を専攻した。

明治廿三年六月ライプツヒ大學の全課程を終了し更に論文試験もパスして、ドクトル・ムリスの學位を得た。此の論文は、「國務大臣責任論」であつて、どちらかと云ふと、英國風の憲政論の色氣強く、却つて獨逸流の専横主義的の傾向がないのは、她學の目的から云へば、適の効果を齎したわけである。

その年の九月、旅費は歸朝したが、時に若公忠節は八十三歳であつたが猶ほ元氣であつて、茲に互に手を把つてその無事を祝つたのであつた。

此の青年、憲法發布され第一議會も組織されて、日本も憲政國となつてゐたが其時伊藤は歸朝と同時に

貴族院議員に任ぜられ、直ちに伊藤議長の推挙によつて貴族院議長になり、その華々しい政治生活のスタートを切つたのであつた。

初期議會の主な問題は、憲法政府に對する政治家の猛烈な攻撃に開始され、殊に財政削減、民力休養はその最大の論争點であつた。

議會に於ける野黨は、藩閥の代表者、伊藤博文の推挙にも拘らず、どちらかと云へば在野黨と意見を同じくして憲法部長政府の攻撃に當つた。皮肉と云へば皮肉だが、自ら信すること知いだけに流石の伊藤も同感を抱いた。

議會閉會後の或る日、政府顧問の一人が密使として、近衛家の門を叩き、近衛を内務省参事官に迎へようとして、その内意を得ようとした。

一種の買収である。

近衛は、惘然として、

「自分は立法の府に在る者として、更に行政官廳に入る内務省に入ることは、立憲政治の下で、最も恐むべき行爲と信じ、お断り申します」

と云つた。

これから後も、政府は手をかへ、品をかへて近衛を行政の府に迎へようとしたが、彼は始終拒絶し學費院の院長となつた外は、絕對に仕官せず、専ら貴族院に在つて、國政の論を講じた。藩閥の同志は、亦も責へず、常に善後しく政府に當つてゐた。

明治二十四年、松方内閣の憲法干渉は空前の流血の慘事を各所に生み、官民の反目は頂點に達し、「人民の官吏を破ること猶ほ伏魔の如し」といふやうな世相を現出した。

近衛は、「松方首相に與ふる忠告書」を二度までしたため、憲法干渉の罪過を痛感し、その流弊の恐るべき所以を、國家のために衷心悲しんでゐるのである。

また松方内閣の後をうけて、伊藤博文が内閣を組織するや、軍費削減から議會と大衝突を起し、遂に衆議院解散となるや、近衛は同本議員三十餘名と連署して、その解散の非立憲的なことを責め、思人とも云ふべき伊藤に對して、猛烈に反對してゐる。勿論、公事と私事は別のことなのである。

眼中たゞ國事

日本の國交を言げりや、唯天災は特に悲愴を以て、内命を絶望的に傳へしめたまひ、現今侍從長を介して、隨時に國事意見を奏上するの勅諭を下したまふた。

近衛は感涙に涙はす、侍從長徳大寺侯を経て、勅諭三條を奉つた。

その奉諭の三に曰く、

「我國數百萬の國民その開口する所、多くはマツチ箱を振り、藁藁を振り、小稲杖を振り、各地の草取りに類はれ、一日僅かに得る所二三十錢、而して一家三四人の口を養ふ。食する所のものは、種なり、豆類のカラなり、他人の食糧のものを乞ひ得て、食する者は貧者中の上位に位するものなり。これ今日に見る所の状況にあらざして、平常のことなり。而して今、此の弊は物質の騰貴と、糧口の乏

たる糧口の缺乏とにより、實に飢渴に迫りつゝありて、既に今日その哀訴の聲に聞く。今にして之が救済の道を講かすんば、何れ愛國心に驅られて、今回の出軍を壯としたる者も、自己の窮乏のために

戦後に至り、かの急むべき社会主義の如きもの起らざるものとも限らず。

と云つて、世の言葉を以て、自戒せしめ、貴族論の聲を絶たんと云つてゐる。現、歴史文藝協会が嘗て「社会主義」と言つたことがあるが、此の觀子には何處となく一脈相通する社會観があるではないか。

また斯うした社會的に惹かれざる階級への深い同情と關心は、同時にわが華族社會に對する深い批判となつて現れてゐる。

明治二十六年十一月、勸業は國家學會講演會に臨んで、華族論を述べ、その胸中の鬱結を洩らし、その大意は、

「凡そ華族たる者の資格三。氣節、品位、操行これである。この三つを一身に具へて、はじめて華族の體面を保ち、皇室の基柱たる實をあげることが出来るのである。

數次の勲章は、華族の宜しく率由すべき道を盡へたまふたものである。

華族たる者、宜しく常に聖旨を奉讀し、修身齊家、進んで世人の模範となり、以て皇室の御座に相い奉ると共に、以て社會の尊嚴に應ふるところがなければならぬ。不幸にして今日の所謂華族なる

支那保全論の提唱

日清戦争の敗北によつて老犬國支那はその無頼無恥を究つたに、全世界の前に露呈するや、西歐諸國は驚つてその利権を求め、南國は今や四分五裂、半身不遂の虚狀を呈示するに至つた。

この状態を見て、漸くわが朝野は、西力東漸の大家に目覺めるに至り、識者はその念を國民に訴へてやまなかつた。

西歐諸國は、嘗て日支同盟論を唱へて、此の國運と同様とし、相助け合つて西歐人の東洋侵略を防止しようとして来たが、今則ち見る清國は正に瓦解の一歩手前と云ふところにある。とても同盟どころではない、先づ此の分岐と瓦解を未然に防止せねばならぬといふのが、支那保全論の起りなのである。

大隈重信は、明治三十一年に再相になつた時率先して支那保全論を唱へ、大いに内外の輿論を喚起したが、その大意は近衛篤磨と同じやうなものであつた。

者、唯々氣概を失ひ、品位卑しく、操行の物にざる者多し。彼等が如何に没りに皇室の尊嚴を日にしても、その眞意を察する者幾人あらうか。

また華族が貴族院議員になれるのは、別に才力が秀でる爲ではなく、世襲があるわけでもない。ただ爵位を持つてゐればこそ、この特權を賦與されてゐるのである。乃ち議員になつても悉くその人の私利ではない。況んや華族は職を世襲せず、非才無能でも幸ひに當選する者少くない。

かゝる議員が出るから、議案の賛否も自分一個の考へで決断出来る者は、晴天の屋敷のやうに少い。こんな議員を集めて貴族院を組織し、以て英國流の兩院制度の實を舉げようとしても、それは寧ろ空望ではないか。

實に思ひ切つた醜評を下したもので、此の演説は一時、華族仲間でも大分物議を醸したもので、勸業は毅然として譲らなかつた。

二十八年三月、勸業は聖旨を奉じて學務院院長になつたが、その改革は徹底的なものであつた。日白に八萬坪の地を譲んで、此處に學務院を置き、寄宿舎を建て、開校なる上流子弟の教育を計つたのである。

たゞ近衛篤磨の方は、民族の存亡との連絡もあり、どちらかと云へば野黨的だつた爲に、その支那保全論も著しく積極的なものであつた。

「東洋は東洋人の東洋なり。東洋問題を處理するもの、固より東洋人の責任に屬す。かの南國その國勢大に衰へたりと雖も、弊は政治に在りて民族に在らず。眞に克く之を救済活動すれば、指に手を渡へて東洋保全の事に従ふこと敢て難しと爲さず。」

と云つて、此の所論を更に徹底化し、國論を喚起するために、明治廿一年、東の同文會を設立したのである。

勸業は擧げられてその會長となつたが、その傘下には、平生支那問題に留意する民間の志士も甚多として集り、忽ちにして一大勢力となつた。

同文會は總務課の發行の他に、神田區町に東京同文會院を設けて、清國留學生を多く收容し、更に南京にも同文會院を設けて、日本人學生を支那で教育し、大いに日支兩國の融和を計らうとした。この南京同文會院は後に學部省の認可を受け、校舎を造られたので、上海に移したのが、今日の東京同文會院である。

此論はこの東亞同文會の機關雜誌「東亞時論」第一號巻頭に、「帝國の地位と現代の政治家」の題下に一文を寄す。日清戦争後日本の政治も國民も遂に國際に解ひ、清國に對して何種を求めてやまや、眞の日本國民を忘れてゐることに對して、流弊の不慮を叩きつけ、その疑念を促してやまののである。

「今日帝國の最も急務とする所は、速かに國是を定め、國論を定むるに在り。而して支那に對する政策を一定するは、最も急務とせざるべからず。

余は今日に於て帝國と支那と同文同種之故を以て、帝國をして自ら進みて支那の命運を負担せしむべしと云ふに非ず、唯々帝國將來の命運に對し、之に適應すべき切實なる國論を定め、之に順じて實に應じ、變に臨み、急進は行以て今日の宜しきを執すべしと曰ふものなり。

余が少數なる然も應明にして眞摯なる友朋同志と俱に唱導しつゝある、支那保全論の如きも、余は決して空泛なる抽象的文字に依り、世間の流風を追ふて、多數の耳目に投ぜんと欲するものにあらず。

余は唯々之を以て帝國現在の地位を慮り、將來の運命を顧み、而して帝國の利益と光榮との爲に

斯の如くするのまじなきを信すればなり。

余は余の主張が、何の日まで學界の僥倖の爲に斯せらるべきやを知らず。唯々余は之を以て當今の所謂政治家なる者に對して、幾少なる感嘆にても、之を起さしむるを得ば、願はざればとせん。余は之を以て天下の眞實に對し、少數の同志と共に、之が實行に關して力を致さんと欲ふのみ……」

同論其の士は、清國にも乏しくはなかつた。就中、滬漢總督の張之洞は、早くから公に唱導し、彼んにその青年を日本に送り、日支の親善に努めたが、遂にその愛徒厚恩を日本に留學せしめ、その指導の全部を公に一任した。

明治廿二年に、厚恩が來朝すると、總督は學務院に收容して、教官と生徒を講談して、その教育に厚意を施してゐる。

また清國の革新政治家として有名な康有爲は、その憲政一黨のリーダーが置れて日本に亡命して來たが、一日わざ／＼肥後縣を訪れて、大いに時局を談じてゐる。

東洋使安の死は、一に懸りて日清兩國の復讐に在りと激論するのであつた。

また同じく亡命中の志士梁啟超とも、再三會談をとり、清國の國政改革について、意見を交してゐる。

るのである。

北清事變勃發と共に理儀の軍勢、わけてもロシアの野心は露骨に支那内政に伸びてきた。

聯合軍の間に、往々にして支那分派論が叫ばれてきたのは、此の時のことである。東亞同文會はこの狀勢を見て、直ちに臨時大會を開き、かうした侵略政策に反對し、支那保全のいよ／＼必要なことを決議した。

この事實に於て、日本軍は英佛などの聯合軍に伍して、北京に進軍したが、その戰勝報りも勇戦を極め、大沽、天津の陥落は、みなわが軍の健闘のおかげである。これを見て兩江總督劉坤一は公に電報を發し、

「日本は支那保全の政策を放棄したるや」と、言つてきた。

これに對し、總督は直ちに答へて、

「わが軍の率先奮闘したるわけは、速かに軍國を掃蕩し、京畿の平和を回復し、理儀の干渉を出来るだけ阻止せんとする衷情に出たものである。故て他意なし」

と言つたので、劉總督は安心して、暫下の治安維持に専念し、軍部の憤慨を北清の一部で吹ひ止めることが出来たのである。

此の頃の支那新聞の一言は、清國に於てはそれ程東んぜられてゐたし、信用されてゐたのである。要するに、近衛にせよ、大隈にせよ、その支那保全論は、眞に磨かれた支那國民への同情と、日支互ひに關して、東洋の平和なしといふ強い信念から發したものであつた。だから、その所論も、今の言葉で云ふなら、道義的なものであつて、眞に支那の更生と、その振興を願つたものである。

その保全論は、嘗てロシアが唱へたやうに、支那を現状のままに置置沈滞のままに置く方が自己の侵略政策に都合がよいと云つた動機から發した。支那の現状維持論、保全論とは大いに違つてゐる。また北清事變以後、理儀が唱へた支那保全論、即ち支那に於ける親善を、お互ひに尊重し合ふと云つた、保全論とも、全く意味が違つてゐるのである。

併しながら、かうした道義的主張は、必ずしも日本の政府當局の採用するところとならず、わが外交は右顧左盼、何等寫すところなく、近衛一派の支那保全論も果なる懸け懸けだけで終つたのは、何と云つても残念だつたと思ふ。

然も、それらの高潔な主義も、真に支那國民に理解されたのかと云ふと、結局それは無駄だったと思ふ。日本の外交の無定見さは、結局支那の無信を買ふだけでロシアと結んで日本を拒ぐべしといふのは謂々たる大勢となつてしまつたのだ。

江蘇省鎮江一はやがて俄爾日以後を全うすべしと密奏してあるし、知日派の巨頭とも云はれた張之洞すら、今日俄爾の要策は、ロシアと密約を結んで無復を得るにあり、との上奏さへなしである。

彼等はいづれも、支那の最大の患は日本にありとして、これを拒むのはロシアと結ぶより他にはないとし、ロシアこそ信義に缺く、信賴するに足らぬ強大國であると考へてゐた。かうして彼等は、するすると言議密約を結ぶに至つたが、その代價として俄爾大連の租借といふ國恥を蒙れ、やつとロシアの租借に目が覚めた時には、清國領土の地として東んぜられた封鎖の地、滿洲は殆んど事實上、ロシアの領土の下に在つたのである。

對露同志會の活躍

對露同志會の設立だけでは、實際政治の上で無力であると感じて、明治三十三年、新らしく同志を募つて、國民同盟會を組織した。

當時北邊に迫るロシアの魔手は、亞細亞大陸の歩を著々と進めてゐる時だけに、同黨の政治家や學者、民間志士は猛烈としてこれに應じ、支那保全、朝鮮保護の聲は、國內を震撼し、みな驚駭を以てその盟主と仰いだるのである。

國民同盟會はその設立の動機は必ずしも政黨結成とは違つたのであつたが、俄成政黨方面ではこれを反對黨の結成とみてしきりに懸念を放つたので、三十四年には政黨結成を内務省に申告してゐる。

その幹部には、張山濤、大貫毅、神尾知實、根津一、陸軍、佐々友房などの諸氏が組織し、宛然東亞先覺者の一大クラブの觀を呈したのである。

既に此の國民同盟會で特筆すべきは、學者を動員して、各方面の輿論を扇動したことであつて、有名

な七博士は皆この運動の先頭に立つたのである。これは、當然にすれば、一の結果であつて、伊藤博文の學者好きを連用し、盛んに學者を使つて、伊藤の對露報復外交を牽制したわけである。

對露外交協會は各地で開かれ、意氣も對露陣に任して、足踏日本中に響くと云はれる位奔走してゐる。

ある日、某地の大會堂で對露協會が開かれたが、まづ法政大學教授、松澤仁一郎博士が感辭を済まし、いよ／＼これから進行もとも云ふべき、對露協會の善となつた。聴衆一同片唾をのんでゐる。

やがて壇上に現れた松澤は、對露家五文紙の封鎖を着て感憤鬱鬱、おもむろに口を開くと、
「私は近衛です。私の意見は今松澤博士が述べられたと全く同一です。」

と、それだけ言つただけで降壇し、滿場愕然としたと、松澤博士はその感辭で回想してをられる。とにかく、當時のわが當局、即ち桂内閣はロシアに對して、滿韓交換論を、最後の切札として唱へ滿洲の租借をロシアに認める代りに、ロシアも朝鮮に對して日本の特殊地位を認めよといふやり方で必死の妥協工作をやつてゐた時だ。

てゐるが、終始支那の分割に反對し、その保全を強調、更にロシアに對して鐵槌を加へるべしといふ主張論を以て、國內の心ある民衆の血を沸かしたのであつた。

桂内閣の妥協案にも拘らず、ロシアは一步も譲らないのみか、その侵略の手は北滿朝鮮まで伸び、遂に故に日本も軍艦隊の縛を切り、いよ／＼最後の對露會議が開かれるかと思はれる。明治廿七年の正月、近衛首相は急逝してゐる。その死が、もう一ヶ月遅かつたならば、死床の夢の中にも無算してゐた、對露宣言書を見ることが出来たのである。

張山濤、大貫毅等は、今の近衛さんより、権が太いといはれるのは定評だが、權にかさうしたところはある。時代の背出し、救済も、どうしても此の親子の間に、大きく一線を劃してゐるのは明かだが、支那問題に對すると、不思議なほど考へが一致してゐるらしいのが、何處となく感じられてゐる。

所謂、近衛聲明と云はれるものを、よく讀んでみると、先考の支那保全論の匂ひが強く透つてゐる。

所謂、近衛聲明と云はれるものを、よく讀んでみると、先考の支那保全論の匂ひが強く透つてゐる。

所謂、近衛聲明と云はれるものを、よく讀んでみると、先考の支那保全論の匂ひが強く透つてゐる。

それから四十年も無難に続け、遂に今日のやうな支那事變といふ、東亞民族の最大の不幸事となつたのが、今度の近衛軍閥の突如たる逆襲心と云ひ、全國民の勇憤を纏ふ近衛さんの再出陣と云ひ、今度こそ、近衛さんの胸中には成程があるのではないかしら。

親が殺して行つた大きな精神を、子が實際の政治の上で果して行くと云ふ、大きな歴史の運命を、われ／＼は感じないではあらぬ。

先考近衛公は四十二歳の短命だったが、今の近衛さんは、お父さんよりは年齢も熟してゐるし、その大成は、われ／＼も心強く期待されるものがあるのである。

仁川沖の砲聲

明治廿七年二月九日、雲霧する寒夜にも拘らず、外務省の電信室は、明々と電燈が灯り、所員たちの忙しうに右往左往する姿が窺はれた。

日露の風雲は、遂に破裂の一步前といつた状態にあり、世界各國にあるわが大公使館と本省との電信交換で、電信室はまるで電話のやうな、慌しさと緊張した空気で満ちてゐた。

理高く積まれた電報室は、係員たちによつて手早く翻譯されて行く。午後その時、京城の至急電報が受信された。駐韓公使、林權助が打電したものである。

「只今仁川沖にて砲聲あり、我軍用艦隊、砲を交へたるならん。遂んで吾國の前途憂慮を致す」

此の日、わが聯合艦隊の一隻隊たる、瓜生外吉の率ある艦隊は、京城に向ふわが陸軍部隊木城旅團を援護して、無事仁川に砲撃を完了。次いで仁川港内にある露國東洋艦隊コレアツ、ワラヤーク號を撃沈したのである。



日露開戦

最後の外交

僅か二行にも足らぬ、此の林公使の電文は、實にわが五千萬同胞の心の奥からの叫びと言つてよい字句に満ちた日露の衝突は、往々にわれを驚異するばかりで、その間にも着々として露國艦隊を目標してゐたロシアに対して、日本の上下に燃つてゐた憤慨は、この仁川沖一發の砲聲と共に、快く爆発してしまつたのである。三國干渉以來十年、日本國民は一日として、此の北方より来る重壓に耐して、実地の思ひをしたことはなかつたのだ。

日露開戦！ いよいよ来るべきものは来た、といつた意気ではあるが、前途に対する一種悲憤の情は五千萬同胞の胸を衝いて溢れ出るものがあつたのである。

加藤、仁川沖の砲聲は早にもはやすみでやつたのではなく、其處に停つて行くまでには、わが軍事當局の本も揺るがさぬ決意と、外務省局の血の滲むやうな最後の衝動と工作が先行してゐたのである。殊に小村外相は、日露開戦の発端の下に、着々として外交上の砦石を打つて置いた。日露開戦が

その第一手段である。滿洲國附屬的がその第二である。此の條約は、滿洲から露軍の撤退を止むなくさせることを決めたもので、ロシアが撤退を肯んじないとすれば、この條約を破ることになる。即ち彼自ら戦争の責任を負ふことになり、日本にとっては、絶好の立腹への口実となるものである。小村外相は、此の條約を積極的にロシアへ押しつけたが、ロシアが忠實に履行するとは恐ろしく考へてゐなかつた。

第一回の露兵は、それでもロシアは強きと實行したが、第二期の露兵、即ち露京省(奉天省)と吉林省全部の露兵は、なにしる滿洲の中心だけに、實行するかどうかは疑問であつた。

明治三十六年の晩秋、恰度この第二期露兵問題でわが國對が深い關心と憂憤をいだいてゐる時、露山の小村外相の歸歐を訪れた男が二人あつた。外務省政務局長の山本武次郎と、本多助太郎氏である。

山本武次郎と名を賣つてゐる山本は、昔ひが遊つてゐるにつれ、そろそろメートルを上げ出した。

「大抵、ロシアはどうせ露國は手加減しますまい。日英同盟のほとぼりの冷めない中に、一つロシアを叩かうぢやありませんか」

いつも、ウム／＼と遊り上手な小村は、此の時上機嫌な顔をして、

「おい山本君、君は北海道のアイヌが、どういふ工合に熊を生け捕るか知つてゐるかね」

と問ふ。

「いやあ、知りませんなあ」

と、山本は笑ふのを、小村は、

「あれはね、海邊に逃げる熊の子を殺す。それを熊が食ひに来るんだ。村物だから熊の尻尾山食ふんだ。すると喉が乾くもんだから海水をガブ／＼やる。それで腹の中の熊の子が腫れて、熊は苦しがるんだ。……そこをアイヌは出て行つて、遠くまで熊の子を捕るんだよ」

と、言葉遊びを切り、更につゞけて、

「露國のツボはね、その恰度熊の子を食つてるところさ。いよ／＼喉が乾いて、水を飲み海の中へ入つて来る。そこを日本はとつ捕まへるのだ」

と、説明した。

熊の子は滿洲で、これに堪耐して、海へ出て来るといふのは、朝鮮へ手を出すといふことなのだから

う。朝鮮に出た来たら、その時こそ本官に日本は願ひして、撤退をその露上に行らすといふ意味なのである。

それから小村は、

「もう二月もしたら、えらい面白い芝居があるんだがね」

と、山本を眺みて笑つた。山本は、

「あゝさうですか」

と言つたもの、それは何ですかと来たんで聞くわけにゆかなかつた。聞いても本官のことは言はないだらうし、小村はまた聞きかへすだけの隙を、熊子に見せない男だからである。

この小村の言葉は二つとも、その通りとなつて現れたわけである。

二月月したら面白い芝居があるといつたが、それは伊藤博文と桂首相の妥協成立がそれである。

この時伊藤博文は國家の元老であると共に、政友會總裁で、これが何事につけても、桂内閣に對し風当たりが強い。流石に押し強い桂も、やり切れなくなつて、辭表を出して、露山へ引込んでしまふといふことになる。大切な日露の外交交渉をうち捨て、こゝで内閣が替つては、國內の不統一を惹

起するやうなものだと憂慮した元老達は、殊に山本武次郎が中心となつて、伊藤と桂との仲直りに乗り出して来たのである。

その結果、伊藤は政友會總裁を西園寺公望公に譲つて、樺山資紀議長になり、桂は内閣を維持することになり、更に、山本、松方正義の二元老も樺山に入つて、現内閣を支援するといふ恰好で、さしもの危機も納つたのである。

首領部の陣容が、かう一元化されれば、政府もいよ／＼本腰を入れて、日露の交渉に乗り出せるわけである。桂としても、桂に於て必死になつて、日露外交打院に努めなければならなかつたのである。

此の大芝居の黒幕になつたのは、兒玉源太郎中將であつたが、此の筋書には、小村海太郎も参加してゐたのであらう。外交の一元化こそ、どうしても来るべき開戦を前にして、確立して置かなければならなかつたのである。

そのうちに、熊はいよ／＼熊の子で遊んで、海へ乗り出して来た。即ちロシアは、鴨綠江岸、龍江の經常に乗り出して来た。それは樺山資紀がベゾブラゾフが官廳の金を引き出して、龍江の樺木

をばじめたので、その保護を名として、兵隊までもり出し、いよいよ朝鮮にまで侵略の手をさし出して来たのである。

滿洲では漢つても、朝鮮では朝鮮に漢らぬといふのが、當時では最後の社だったのである。對露戦の開始のやうに言はれた桂、首相、でもへ、戦争のはじまる三ヶ月前には、山縣に與へた手紙の中でこの漢のやり／＼のところを語つてゐる。

「小生、左の順序を以て、大々進び居り候間、企のため申上げ置き候。

第一、滿洲問題、外交の手段を以て成し得るだけ諒解を試み、結局この問題にては、最後の手段にまでは進行せざるべし。

第二、朝鮮問題に於ては、わが徳正の要求を充分陳述し、彼れ聽かざる時は、最後の手段（即ち戦争）を以ても買ふべし」

かくて桂、首相は十二月十七日、小村外相を作つて、明治天皇に稟請し、閣議の決定を齎してその御裁可を得よ、日露の國交はいよいよ最後の段階にたつて、ことを突進した。

それと同時に、一方露國の準備ともいふべき、臨時大本營條例、軍事會議院條例、宣戰條約成立令

などが公布され、また露國の申入れて来た、アルゼンチン國製造の軍艦二隻購入のことも決り、二艦は早速サンフランシスコ回航の途に就いてゐる。即ち後の、日露、春日二艦で、露國からの話は、かなり早くからあつたが、何しろ外國の軍艦だけに、性質その他でわが三笠級の軍艦と一掃に軍隊を組むことが出来ぬため、それまで保留になつてゐたのである。

年が明けて明治廿七年、一月六日、露國からは、最後回答ともいふべきものが届いた。その内容は日本の露國に對する特權、即ち日清戦争に於て、露國の犠牲を拂つて得たわが特權を、あくまで一方的に否認し、露國に中立地帯を設け、その特權を相互に決めようといふ、極めて露のよい回答なのである。

これは到底わが國の思ひ得ざるところである。一月三十日午前、さしも露國に對して和協的だった伊藤博文は、桂、首相、をその官邸に訪問して、日露問題は遂に最後の斷を下さざるべからざる時機に達したと、その決心を語つてゐる。

その席には、小村外相と、海軍大臣の山本權兵衛がゐるが、山本は、悲憤慷慨として、深く沈思するものゝ如くであつた。閣議となれば、軍部大臣として如何にその責任を果すべきか、また如何して

必死の覚はあるのであらうか。一座には東西しい空気が流れてゐた。

午後からは、元老として、また陸軍の大先驅として、山縣有朋が駆けつけて来て、その席に導つた。

伊藤は、「後日の參考のためにも」と云つて、紙を出して、その意見を草して、各大臣に示した。

「露國の政略を諒解するに、彼の積年の企圖は南進して、地中海にその覇足を伸張し、列強の上位を占有する露國を一種し、今や極東即ち支那の真境に乗り、一舉にしてその全力を集中し、支那の帝冠を露國の頭上に供せんとすること、疑を容れざる所なり。

日本は之を看過し、今や露國と抗衡し其の懸案問題となり、既に雙方共に海陸の兵力を盡して對峙せり。而して滿洲については、兩國の間、問題の解決や、其の端を見るに足るものありと雖も、朝鮮問題のみ懸つて日露の間にあるものに似たり。

假りに露の我に譲歩する所あるも、これ露の政略全體より觀察すれば、日本にとりては數年間の小慮なるものと見るの外なし。然らば理屈と干支相成るは、早晩受るべからざるものたるは火を見るが如し。然らば我が國力の不足に顧み、此際小慮を得るに安んずるか、國家の運命を懸けて露の政略を阻礙するの手段に出るか、これ日今一決兩國の決を爲さざるを得ざるの地境なり」

伊藤、桂と、今まで和協論を執つてゐた首相部も、今や遂に最後の社を固めるに至つたのであるが、日露問題に逃げられぬ形勢になつてしまつた。

開戦決定と御前會議

この外交の最後手段の決定も、時を同じくして、もはや一週も猶豫されないといふ一大警報が、わが參謀本部に入つた。

それは、露國參謀本部では、既に露日作戦計畫を立案して裁可を得、極東總督は目下紅海にある増援艦隊の到着と、西比利亞第三軍團の編成の終るを持ち、旅順ドックの竣工と同時に、日本に對して戦争をばじめるといふ情報である。

此の情報を手にした參謀總長、大山巖は、二月一日急遽參内し、明治天皇に重大な伏奏をなした。

それは内閣に對する軍の態度を表明したもので、その大意は、

「今日に至つて、わが政府がなほ在外、決するところがなければ近き將來に於て不幸に遭遇するばか

りでなく、自らに彼れの威中に陥り、また挽回すべからざるの勢を調成するに至る。若し時局の解決、戦争を避くる能はずとせば、その發動の期は、専ら戦略上の利害に基いて決定されねばならない。

今日に於て一日の動静は、一日の利益を敵に與へる。若し無日無久して爲すところがなければ内に於て軍の士氣を沮喪し、外に於ては優柔不斷の嘲りを招き、世界の同情は失はれる。

と、内閣に對して、遂に亦閣に出づるべきを覚悟したもので、「伏して軍機を仰ぎ奉る」一言を呈したるのである。

そこへ、翌二日になると、更に重大な警報が海軍省に入つた。それは、露國の極東艦隊が、旅順を出海して何處とも知れず姿を消したといふのである。

事益に至つて、樞密院は、元老とも謀り、御前會議を奏請し奉ることになつた。

二月四日午後、明治天皇は伊藤、山縣、桂方、井上、等諸大臣、大山、副官長、桂首相、山本海相、寺内陸相、小村外相、曾根、海軍大臣等を御前に召して、會議を開かせられた。

御前會議では、一人の異論を以てへる者もなく、議場一致で露國に對する國策を決定し、駐露公使を

野田一尉をして、國交斷絶の旨を露國政府に通告せしめた。

日本帝國政府は、露國と帝國政府との關係上、對露の紛争を承すべき各種の原因を除去すむがためあらゆる和議の手段を盡したるも、その效なく、帝國政府が、極東に於ける東洋恒久の平和の爲なしたる露國の損害並びに露國に無私なる損害も之に對して當に受くべきの考慮を受けず、従つて露國政府との外交關係は、今やその價値を有せざるに至りたるを以て、日本帝國政府は其外交關係を絶つことに決したる。

翌五日、樞密院は陸軍省に對し、露國と交渉を断り、自由の行動を執るに決定せしことを告げたまひ、その忠告亦式を賜ひたまつた。これに對し軍部大臣は、御前會議文を有つて、その忠告を贊つた。國民は奮ひ、開戦準備は成つたのである。

戦勝の成算

戦争は遂にかうして勃發したが、是してわが軍事當局は、確實に露國への見通しを持つてゐたであらうか。また財政的に、果して完全に戦費を賄つて行ける自信があつたであらうか。

國民が熱狂し、對露即時開戦を叫ぶ聲が大きくなればなるほど、責任ある當局者としては、此の大問題について、いよいよ慎重にならざるを得なかつた。

不肖の老外相と云はれる、小村海相がをりながら、わが戦争の對露外交が時に軟弱と云はれ、スローモーションと罵られたのは、結局この戦局の將來に對して、わが政治軍事の最高首脳部に、百パーセントの自信がなかつたからだと斷言してよいと思ふ。

たゞわが軍部當局をはじめ、元老など、此の戦争の將來に對して確實な成算はなかつたが、一貫するところは、此の戦争がどうしても避くべからざるものであること、戦ふ以上最後までやるが、特むところは御機成と國民の忠誠とであつた。

當時のわが國の財政状態は、特に悪いといふほどではなかつた。

明治廿二年以來、歳入は二億五千萬圓から三億の圓を往來してゐたが、歳入は年々數百萬圓の超過を示してゐる。

そこで戦争になつて直ちに使はれる戦費金は四千七百萬圓あつたが、わが軍部の所有金は一億四千

萬圓に過ぎない。

いざ戦争になれば、さしあたりどうしても數億の金は用意しておかなければならぬ。大蔵省は、はじめて三億ばかりの戦時費を計上したが、それは單なる概算案で、その財源を、増税によるのか、内閣によるか、外國から借入するのか一つも成案はなかつたのである。しかも三億圓で九ヶ師團の動員をやるといふ、ケチなものだつたのである。

二月四日の最後の御前會議の席上、伊藤は大蔵大臣曾根を對して、戰時財政に對して成案があるかと尋ねたが、曾根は默然として答へ得なかつた。

伊藤は色を伴して、「財政の基礎が定まらねば、軍費の支拂は出来ぬ。軍費が支拂されないで、どうして戦争が出来るか」と追突した。

樞密院は、大蔵當局の大失策として、これを見かねて、曾根のために辯ずるのであつた。

「財政の難易如何を論ずるのは、平時のことである。今日は戦時であり、豫め定められた計畫通り財政は運用出来ない。」

るうか。また財政的に、果して完全に戦費を賄つて行ける自信があつたであらうか。

國民が熱狂し、對露即時開戦を叫ぶ聲が大きくなればなるほど、責任ある當局者としては、此の大問題について、いよいよ慎重にならざるを得なかつた。

不肖の老外相と云はれる、小村海相がをりながら、わが戦争の對露外交が時に軟弱と云はれ、スローモーションと罵られたのは、結局この戦局の將來に對して、わが政治軍事の最高首脳部に、百パーセントの自信がなかつたからだと斷言してよいと思ふ。

たゞわが軍部當局をはじめ、元老など、此の戦争の將來に對して確實な成算はなかつたが、一貫するところは、此の戦争がどうしても避くべからざるものであること、戦ふ以上最後までやるが、特むところは御機成と國民の忠誠とであつた。

當時のわが國の財政状態は、特に悪いといふほどではなかつた。

明治廿二年以來、歳入は二億五千萬圓から三億の圓を往來してゐたが、歳入は年々數百萬圓の超過を示してゐる。

萬圓に過ぎない。

いざ戦争になれば、さしあたりどうしても數億の金は用意しておかなければならぬ。大蔵省は、はじめて三億ばかりの戦時費を計上したが、それは單なる概算案で、その財源を、増税によるのか、内閣によるか、外國から借入するのか一つも成案はなかつたのである。しかも三億圓で九ヶ師團の動員をやるといふ、ケチなものだつたのである。

二月四日の最後の御前會議の席上、伊藤は大蔵大臣曾根を對して、戰時財政に對して成案があるかと尋ねたが、曾根は默然として答へ得なかつた。

伊藤は色を伴して、「財政の基礎が定まらねば、軍費の支拂は出来ぬ。軍費が支拂されないで、どうして戦争が出来るか」と追突した。

樞密院は、大蔵當局の大失策として、これを見かねて、曾根のために辯ずるのであつた。

「財政の難易如何を論ずるのは、平時のことである。今日は戦時であり、豫め定められた計畫通り財政は運用出来ない。」

しかし伊藤は極めて不満足に、

「日露の役には、日本銀行總裁に川田小一郎があつて、財政運用の效を収めたが、今日、川田はこの人物が大蔵當局に居ないのは残念ではないか」と遠慮會辭はない。

松方は、

「閣下は川田、川田と仰有るが、川田は果してどれほどのことをしたか。第一、當時、閣下は、軍費は富強院の敷金で充分にと言つて居られたではないか。私はこれを不可として、内債募集の議を主張し、それで軍費を支持することが出来たのである。今や國家の安危を顧前に控へ、われわれは大蔵大臣を助けて、あくまで臨時財政の運用を全からしめなければならぬ」

と辯護し、これで此の場は収まつたが、曾根蔵相は御前會議が終ると、自ら責任を感じて辭表を出してしまつた。愕いた松方首相は直ちに伊藤を詰めてその意見を聞いたが、伊藤は激昂として、

「曾根の辭職は、わたしも賛成だ」と、とりつく島はない。

松方はその夜、松方正親を詰めて、曾根蔵相の進退問題と相談した。

松方は、

「曾根の手落ちはずろちとして、今日の曾根は決して一個の曾根ではない。日本帝國の大蔵大臣として、その進退は世界輿論の中にある。その曾根が今にして退くならば、帝國はみな、わが財政を以て戰爭に堪へずと判斷するであらう。帝國の威信を失墜すること、これより大なるはない。私は此の點を斷つて、此の難局を突破してみるつもりだ」

と、力強く言ひ放つたのであつた。

松方の前説と、更に元老井上馨の乗り出しによつて、曾根蔵相の更迭といふ事はさらさらないで済んだが、松方といひ、井上といひ別に今度の御大なる臨時財政の消化について、成算があつたわけではない。唯、どうしてもやらなければならぬ。やつて行く中に、例とかうまく運ぶだらう、といった態度なのである。

そして結局、これら財政當局者の熱誠は、見事にこの難問題の解決を計つてゐる。暫期的な内債の募集と、高橋是清等の奮闘による外債の成立とが、わが臨時財政を最後まで持ちこたへさせた二大支

柱だったのである。

悲壯な伊藤の決心

財政問題で思はぬ波瀾を呼び起した、二月四日の最後の御前會議が終つて夕刻六時、樺山副議長伊藤博文は、臺南東の官舎に、今の伯爵金子堅太郎氏を呼び寄せた。

「實は今日の御前會議で、日露戦争の御裁可が下つた」

さう云つて、伊藤は夜帳の御持で金子伯の顔を見詰めた。卓上には、煙があつて、白濁が一椀と、刺身と惣物が手をつけられずに置いてある。白濁が僅かに残つてゐるのが、主人に全然気配のないことを物語つてゐる。

「それで今日君を呼んだのは、外の用ではない。これから直ぐアメリカに行つてもらひたい」

あまりだしぬけなので、金子伯は、

「それはどういふ譯ですか」

と訊ねると、伊藤は、

「この日露の戦争は一年続くか、また二年三年続くかしらぬが、何れは兩國の中に入つて調停する國がなければならぬ。それには英國だが、これは同盟國だから、勇は出せぬ。佛蘭西はロシアの同盟國だからダメだ。獨逸は日本に對して善だ性しからぬ態度をとつてゐる。ロシアを唆したのは、どうも獨逸空ろしい。然らば獨逸も調停には立てぬわけだ。すると、唯ひとつは、アメリカ一國である。自由な立場で日露の間に介在して、平和克服を勧告するのは、アメリカの大統領より外はない。君が大統領のルーズベルト氏とハーバート大學の學友で懇意なのだから、大統領に會つて此の事を述べ、同時にアメリカの國民をして日本に同情を寄せるように一つ、工作をしてはもらへないか」

つより講和の豫備交渉と、今日で云ふ國際宣傳戦といふふ二つの大きな使命を賦されたわけである。金子伯は、此の使命の重大さを思つて、到底全うし得ないからと固辭すると、伊藤は、

「君は成功不成功の懸念のために固辭するのか」

「さやうで御座います」

「それならば云ふが、今度の戦は、國家でも一人として成功を確信する者はないのだ。陸軍も海軍

戦争の進行と共に連戦連捷の報に、國民は絶望からこの通りだと思つてゐたかも知れないが、それは間違ひで、陸軍は六分四分、海軍は半分を取返さねばならぬ、伊藤は負けたら身を一兵卒に投じて、北九州で戦ふといふのが、當時の實情であつた。

仁川沖一發の砲撃は、かうした實情の下に放たれたものであつた。

國民は連戦連捷を聞き喜氣を示してゐるが、當局者としては、實は此の國難のギリ／＼のところまで覺悟して、身を挺して國難に當らんの決意を懐いてゐたのであつた。

そして閉塞して出来上つた上下一致、國難打破の機が、遂に未曾有の戰勝を、世界の歴史の上に記録することになつたのである。

伊藤博文は、これから数日なちやして、伊勢大嶽に戰勝凱歌に参拜してゐるが、列車中で一詩を詠して、これを各新聞紙に示した。その内容に、

臣は是れ忠臣、先王よこと勿れ

と詠じてゐるが、彼が自ら忠臣と稱した彼の忠臣は、誰も疑ふものはなからうが、忠臣なる者はあに博文一人に止らんやである。日本國民は老いも若きも皆、忠臣だつたのである。國民全部が上は

又老から、下は田野の農人まで忠臣であつたところに、あの数字を超越した日露戦争の勝利の歴史があつたのである。

日露戦争と 對米宣傳



金子堅太郎

國際宣傳戰の必要

戰時外交の最大の困難は、交戦國以外との、國際關係を円滑に導き、第三國の輿論を常に自國側に有利に導きつけて置くことである。

そこで、どうしても第三國に對する積極なる側面工作が必要なのであり、今日の言葉でいふ宣傳戰が重視されるわけである。

日露戦争の勃發と同時に、わが政府當局が対米態度を英國に、金子堅太郎伯を米國に派遣したのも實に此の目的に添ふために、伊藤博文が率先主張した結果であつた。

金子堅太郎伯が、米國へ行く道に當つたのは、主として金子伯と大統領ルーズベルトがハーバート大學の同窓生であるため、米國に於ける宣傳戰には何かと便宜が多からう、といふ伊藤の心事だつたのである。

聖南坂の樞密院議長官舎で、金子伯は伊藤から米國行きを建議された時、その使命が餘りに重大な

ため、初めは言葉を濁して回避してゐる。即ち、

「アメリカに知人が多いと言ふなら、鳩山和夫君が最適任です。小村海軍大臣然り、日買田種太郎君もゐる。その他あらゆる留學したものはいくらでも居ります。どうかそれらの適任者にも命じ下さい。」

これに對して伊藤は、

「それは極立派な人物ばかりだが、ルーズベルト氏との關係は君が一番親密だ。君が往かなければアメリカを取逃す。」

といつてゐるが、この伊藤の建議は、金子伯の親身的な努力と共に、見事に成功してゐるわけだ。

明治廿七年二月二十四日、金子伯は、憤しく旅装を整へて、關口與井徳太郎、鈴木純一郎の二人をつれて、横濱を出發した。

船中の作に、

空無實此の秋に在り

飄然蓬かに向ふ西遊

日露戦争と對米宣戦

一七三

大衆明治史

一七四

五千兩路風雲暗く

皇國存亡一葉舟

とあるが、今や有史以來の大國難に遭つた日本の將來に對する深憂の情が溢れてゐる。

開戦當初のアメリカ國民の日露戦争に對する輿論は、日本のために極めてよいものであつた。極東の小さな日本があつた、歐亞に對する大帝國たるロシアに對して、戰をはじめるとは實に偉い勇氣といふので、日本に對して大いに同情した。

アメリカ人氣質として、「負け犬」を厭はする傾向がある。つまり往來で犬の咬み合ひがあると通行人は下になつてゐる弱い犬をかばつて、強い犬の方はステツキで闘ふ。恰度、日本は小國だし、どう考へても負け相なので、その肩を持つといつた心理だつたのである。

そのため、新聞や雑誌などにも、日本に好意を寄せ、ロシアの横暴を激した評論など、一時は大分擁護されたが、やがて米國の局外中立の布告が發せられてからは、さうした論調も悉をひそめるやうになつてしまつた。

局外中立といふのは、國際法上の言葉で、要するに交戦國の一方に加担し、援助する一切の言

や行爲を禁ずる嚴正中立といふことである。

さうした形勢のところへ、金子伯は乗りこんで行つたのである。金子伯にすれば、同輩生たるルーズベルト大統領に面會して、大いに援助して貰はうと思つてゐたのが主な目算だつたわけに、その失策の情も大きかつたに相違ない。

乘船でもシカゴでも、多数の在留邦人が金子伯の寓舎を訪れて、故國の實情を訊ねるが、みな失望落胆して生色もない。歐亞の運命と共に、大した憂慮となつたが、開戦當初の在留邦人の顔色といふものは、見られたものではなかつたらしい。

最初の言論戦

日本が金子伯を派遣して、對米宣戦戦を開始したと聞いて、ロシア側も驚つて引つ込んでくる筈はない。

金子伯の一行が横濱に到着して、ホランド・ハウスといふ寓舎に泊ると、かねて計畫してあつた

日露戦争と對米宣戦

一七五

大衆明治史

一七六

と見えて、この寓舎の一角先きにあるウォルデンといふホテルのサロンで、大衆會が開かれた。これは報界の社交界の花形と云はれたヒチコック夫人が主眼となつたもので、市内の紳商夫人を一堂に集め、その入場切符の賣上金を全部ロシアの赤十字に寄附して傷兵の手當てに使ふといふ構れこみである。

これは明かにロシア側の計畫的ないやがらせであつて、各新聞は筆を揃へて此の舉を責き立て、當夜は數百名の來客が寄つて、大衆會が開かれた。

その席に招かれたロシア大使カシー伯は、自身は出席しなかつたが、参事官をわざわざ華盛頓から横濱に派して、宣言書その席上で讀み上げさせ、日本の仁用船に於ける電報機を國際法違反なりと盛んに攻撃し、巧みな言葉の中に、米國人の會業に訴へてゐる。しかもこれが全文翌日の新聞紙上に載るのであるから、その効果も馬鹿に出来ない。

開戦と同時に、ロシアの大使館は、積極的に新聞人の侵入を拒絶し、機密に意を用ひ、パーティを盛んに開いて、アメリカの新聞記者の御機嫌をとり結んでゐる。カシー大使自ら出席して、カタールを飲ませ、高價な美酒をやり、シャンパンを抜く。さうして、今度の戦争はロシアは少しも取意はない

のに、日本は突然仁川に於てわが海軍艦隊を撃沈した。宣戦の布告もせず、たゞ國文斷絶だけで戦争を開始する日本の態度は、明らかに國際法違反であると宣傳する。かうした宣傳の效果は、やがて各新聞の上にも現れて、日本に對する反感も自から燃されることになる。

ロシア側が日本を誣める主なる論據は、今度の戦争は一種の宗教戰で、基督教國たるロシアが、異教國であり、野蠻人である日本から戦争を吹つけられたと稱し、アメリカ人の國民的信念たる宗教心に訴へて、日本に對する憎惡を植と付けようとしたのである。

かうした惡宣傳に對して、これを何う論駁したか。ロシア側の發表に對する意見を伺ひたいと云つて訪れる米人記者に對して、金子伯は次の様に辯駁してゐる。

「ロシア大使は宣戦の布告なしに戰闘を開始したのを國際法に背くと云ふが、今日では國文斷絶すれば直ぐ戰闘を聞いてよいといふことは、國際公法の常例となつてゐる。宣戦の布告は後でもよい。現にロシアが先年土耳其と戰つた時、國文斷絶の後、直ちに戰闘行爲に出て、其の後數日はして宣戦の布告をしてゐるではないか。ロシア自身の歴史と、その主張の矛盾せること斯くの如くである」

更に、宗教戰であるといふロシア側の惡宣傳に對しては、

「今日の日本と、ロシアは、どちらが非基督教國であるか、事實がこれを證明してゐる。嘗てキシネフに於て、ロシア政府は人民の大虐殺をやつてゐる。これが果して、基督教國のやる事であらうか。現に此の殺戮に就ては、歐米の文明國を以て任じてゐる國はみなこれを攻撃してゐるではないか。これに反し、日本では憲法を以て宗教の自由を許してゐる。基督教でも、よいと思ふ宗教に對しては悉ゆる保護を與へてゐる。わが日本はロシアより遙かに宗教的に自由である。とにかく、日本は國土と云ひ、人口と云ひ、兵器の精粗と云ふ點に於て、少しもロシアに優る所がないのに、何故敢て起つて此の大帝國と干戈を交へるに至つたのか、これは數年前より日露の關係が險惡になり、我一步譲れば彼一步進み、縮くことを知らぬ貪慾と壓迫を以て日本に臨み、このまゝでゆけば日本はロシアの爲に滅ぼされる危機に臨んでゐるから、坐して自滅の運命を迫るより、起つて己れの運命を拓くに如くはなしと決意して、戰を交へたのである。日本人は一兵卒から、田野の百姓に至るまで、この決心である。このことをアメリカ人はよく考へて欲しい」

この講話は直ちに翌日の新聞に載つた。あくまでも、日本が生死の關頭に立つてゐることを、アメ

リカ人の前に本當に組み込ませる、此の方向の下に、日本の對米宣戦は主力を注ぐことになつたのであつた。

大統領の好意

三月二十六日、金子伯は種痘を引揚げて、いよいよ首都華盛頓に出掛けて行つた。ルーズベルト大統領に會見するためである。

大統領が友人關係なのだから、白星館の支那から名刺を出して、簡單に會へるのだが、例しるルーズベルト自身、局外中立の布告を出した大統領である。これと會ふには、法規によつて正式に會ふより外に仕方があるまいと考へて、金子伯はわが高平駐米公使を介して、正式に會合の手続きをとつたのである。

高平公使の公文に對して、正式の會合日時が指定されてくる。その日になつて、金子伯は高平公使を伴つて白星館に赴き、支那から名刺を出した。

白星館の支那に接して、大きな感興があり、そこにはいつも二三十人の訪問者が集つてを待つて此の世界的に人氣のある大統領に會つて、掌を握つてもらふために待合せてゐる。

金子伯の名刺がとり次がされると、入れ代りのやうにして、一人の巨漢が急ぎ足で、扉を開けて近づいてくる。満面に笑みをたたへ、もう右手を前にさし出して金子伯の手を握らんばかりである。ルーズベルト大統領である。

「君は何故もつと早く此處へ來なかつた。僕は君を疾うから待つてゐた。なぜ早く來なかつたのか」其處に控へてゐた男女三十人ばかりの觀者たちは一齊に立ち起つて此の場を光景に觀望したが、一番興奮したのは金子伯であらう。悉ゆる祝賀の情をこめて、金子伯の手を握りながら、引つ張るやうにしてその私室へ案内しながら尚も繰り返して「なぜ早く來なかつたのだ。君の聲明文は新聞で讀んだぞ、とうから僕は待つてゐたんだ」

と口早に言つては懐しうに金子伯の顔を眺めるのであつた。私室に入つて、座を占めると、

「實は 그리스カム公使が東京から電報を打つてよこしたから、君がアメリカへやつて來ると云ふこと

は早くから知つて居た。今かくと待つたが、一向にやつて来ない。教育には大分居たらしいが」

「なぜ早く来なかつたのか。僕は待つてゐたぞ」と云ひながら、一寸言葉を切つて、

「君は、僕の殿正中立の布告を讀んだか」と訊く。

「讀んだ」

「どう思ふ」

「大望した」

さう云つて、金子伯がその説明をしようとするのを引きとつて、ルーズベルトは、

「さうだらう。君がとても失望したらうと思つたから、僕は君が来たから早く説明してやらうと思つてこんなに焦れてゐたんだ。實を言へば、日露の同職と決まると、アメリカの若い軍人たちで、今度の敗北は日本に是非勝たせたいから、われ／＼は豫備役になつて、日本軍に従軍しようと思ひ出す者が

各所に飛び出して来たんだ。しかもこの連中は盛んにこんなことを演説したり、新聞に寄稿して氣勢を煽る、そこでロシアの大使から盛んに苦情が出たので、止むを得ずあんな布告を出したんだ。眞に止むを得ないんだ。僕自身の日本敵意及び君に對する友情を犠牲にして……」

さうして、更に語を續いで、

「君、今度の戦争は日本が勝つね。僕は開戦と同時に、參謀本部長に命じて、日露兩軍の實力、また海軍兵學校長に言ひつけて、兩國艦隊と訓練状況を調査させたんだが、あらゆる點から綜合判斷をしてみて、今度は日本の勝利だよ」

これは金子伯にとつてみれば、嬉しいが、一面から云へば意外でもあつた。例しろ、出發に當つて、陸海軍當局に戦局の前途を質した時、陸軍は六分四分、海軍は日本艦隊の半分は沈められると云ふ豫想なのである。幸うして勝つとは信じたかつたが、必勝とは思つてゐなかつたのだ。そこへルーズベルトが自信を以て日本の勝利を確言したのだから、豫想外の氣持がしたのである。

「日本にぜひ勝たせねばならない」

ルーズベルトは更に力説するのであつた。

「日本は正義の爲に、人道の爲に戦つてゐる。ロシア近年の外交は行き過ぎた。殊に日本に對するやり方は、甚だ不當であることは、世界中の識者がみな認めてゐるところだ。だから今度の戦争はぜひ日本に勝たせねばならぬ。そこで自分も影になり日向になつて、日本のために働く。尤も、これは君と二人だけの話で、新聞になんか書かれては困るが……」

「のみならず、君はハーバート俱樂部員で、東京に於けるハーバート俱樂部の會長であるから、君がアメリカへ援助を求めにやつて来たとなれば、アメリカ全國のハーバート俱樂部の會長は、日本のよいやうに盡力するに決つてゐる」

金子伯は、

「さう聞けば、今の外務大臣小村謙太郎はハーバート大學で、われわれと同時に卒業してゐる。駐露公使で、國交斷絶で引揚げた栗野慎一郎もハーバートの卒業生、仁川の海戦で、雷艦を同職の血祭りに上げた瓜生外吉監督はアメリカのアナポリス海軍兵學校の卒業生である。かく申す金子もハーバートの卒業生の一人であるが、實に今度の戦争とアメリカの教育の不思議な因縁には、一種の感激を覺える」と、云つた。

とにかく、ルーズベルト大統領との會見は豫想以上の大成功だつた。

金子伯は喉をきけて白屋館を辭すと、直ちに公使館に駆けつけ、大統領との一問一答を細かく暗電報で、東京の小村外相のもとへ打電したのであつた。これは直ちに返事がやつて来た。

「君と大統領との會見は豫想外の好結果である。大統領と君との對話は、歐羅巴、支那、南米の日本各公使館には悉く暗電報で通知して、今後の對策の有力なる資料とすべき旨命じた」

日本の當局としても、ルーズベルトには、最後の調停をしてもらひたいと、淡い希望をかけてゐたのが、日本にぜひ勝たせるべく一蹴説くと云ふのだから、よほど嬉しく響いたに違ひない。時の元老の一人は、ルーズベルトの此の一言は、實に百萬の援兵を得たのより素晴らしい、と云つて喜んだ者もあつたにちろである。

ユダヤ財閥の後援

アメリカの識者階級に於ける親日熱は、大統領とおなじやうに素晴らしく、ことに財界方面に於け

る日本支持の輿論は歴史的であつた。

それといふのも、アメリカ財界の首領部には、ユダヤ人が多く、彼等はロシア政府が長年やつて来たユダヤ人迫害、殊に近きキシネフに於てロシア政府がやつたユダヤ人大虐殺に對しては、想ひ合體に動してゐたので、これに對する報復としても、日本に肩を持たざるを得なかつたわけだ。

アメリカ政界の名門たるジョン・アダムスに、金子伯が會つた時、彼は次のやうに放言してゐる。「今度の戦争では、金に困つてゐるロシアは、同盟國フランスから軍費を借りてゐるが、これは長くは續かない。結局歐洲のユダヤ財閥から金を借りなくてはならぬだらうが、日本政府は早く手を廻してロシアへ反感を持つユダヤ財閥を懐柔して、ロシアを困らせなければならぬ」

また、

「なほ私は日本政府に忠告したいことがある。それは、早く芬蘭、瑞典などの民族主義者や社會主義者を煽動すべく、日本から寄使をやつて、ロシアの後方擾亂をやるべきだ。その費用は二三百萬圓もあればよいと思ふが、軍艦一隻の値段とすれば安いものではないか。どうか然るべく、日本政府に此の考へを具申していただきたい」

此の意見は更に詳細に、金子伯によつて東京政府に通報されたが、こんなことはわが當局としてもぬかりがあらう筈はない。駐露公使栗野實一郎の露都引揚げに際して、當時の公使副武官、明石次二郎中佐は一行から離れて忽然として妻をくらし、秘書任務に當つてゐるのである。即ちロシアの後方擾亂のため、後年の大立物レーマンと會つて運動資金を提供したりその他いろいろの手を通じて必死の努力を續けてゐたのである。

戦況の進展と共に、アメリカの新聞も負けるかと思つた日本が殆んど連戦連捷なので、いよいよ日本に對する善き方は好意的になつていつた。

廣瀬中佐などの旅順口閉塞線の記事が、どしどし電報でやつて来て、新聞に載る。嘗て米露戦争の時アメリカの海軍大佐ホブスンが秋馬の港口に船を沈めて、スペインの艦隊を封鎖したことを想ひ出して「日本海軍の旅順口閉塞は、わがホブスン大佐の教習を學んだものである」といつた調子である。ヤンキーらしくて、いゝ氣なものだが、日本にとつてはよい宣傳になつたのである。

また旅順港外でロシアの提督マカロフ大將が、わが提督に戦死、その旅艦もろ共海底深く沈んだことは、アメリカ人に非常なるセンセーションを巻き起したのであつた。

當時、マカロフの海軍提督と云へば世界的のもので、英文にも翻譯されて、アメリカの海軍大學では教科書に採用されてゐるほど有名なものであつた。殊にマカロフはアメリカへは數次訪問して、アメリカ人の知己も多かつただけに、これを哀悼する気分は上下に満ちてゐたのである。彼の戦死の報は同時に、日本海軍の未知の力の無言の示威でもあつたわけである。

しかしいつも言へばかりではなかつた。五月十八日には、わが軍艦初瀬、八島が旅順港外で、ロシアの敷設水雷にかゝつて沈没したといふ電報が来た。ニューヨーク中の新聞はみな大見出しでこれを報じ、死者何名といふ具合に書き立てる。ところが日本からは一本の電報も来てゐないのである。日本の主力艦二隻が沈んだのだから、日本海軍の一角は崩れたといつて、ロシア方面からは俄に電報が来る。フランスからも、ドイツからも、ニュースが殺到した。これに對して、日本からは何とも云つて来ないので、金子伯は新聞記者につかまつて問ひ質されても「私のところへは何の電報も来ないので、こんなことは信じない」の一語張り、押通してしまつた。

後に日本へ歸つて當局者に聞くと、このニュースは國內では一切控へてしまつて、俄引にロシア艦隊を全滅させるまで發表しない方針だつたと聞かされたが、アメリカに於て宣傳に従事する者として

は手段の採りやうがなく、する分苦しかつたことと思ふ。

いづれにしても、鴨綠江を渡つて進んだわが滿洲派遣軍は殆んど連戦連捷、疾風の掃蕩を擧ぐ勢で進撃した。わづかに黒木軍の一部が、沙河の會戦で苦戦を喫したからで、殆んど日本軍の行くところ、攻めて勝たざるはなしであつた。

或る日、金子伯はルーズベルトに午餐會に招かれて、その官邸に出かけて行つたが、その時の大統領の談話は、なかく含蓄深いものがあつた。

「日本の實力は、今度の戦争によつて、今や全世界に認められた。このまゝで行けば、この戦さは、や日本が勝つ。しかしその代り、このことは日本もよく注意してもらひたい。即ち日本の實力を全世界が認めることになれば、やがて歐洲の強國は日本に對して無敵の念を抱くであらう。現にドイツの大佐の如きは、この關係に向つて言ふには、日本が日露戦役に就て成功するならば、アジアに於ける歐米諸國の地位と利益は、非常に危険な状態に陥らう。日本が成功すればするほど歐米諸國の妨害になる。殊にドイツの如きは、青島の租借地にすぐ影響を受ける。アメリカも比律賓をとり上げられるぞ、それであるべく日本を挫けなければならぬ」と云つてゐた。要するに日本がその成功に

勝つて、國にのつていろ／＼やると、全世界の反感を買ふことになるから、講和などに際しても、なるべく謙虚であつて欲しい。

日本の成功を監視する風潮は、このルーズベルトの注意の言葉でも顕はれるやうに、相當に各國の間にあつたのである。

歐羅巴方面では、「日本は財政的に參つてしまふだらう」と云ふ懸念傳が、開戦當初にはかなりに行はれてゐたが、その後、日本の戰時財政が健實に運行するにつれて、効果なしと思つたのか、今度は例の黃禍論がむしかへされて放逐されるに至つた。

黃禍論といふのは、ドイツのカイゼルが唱へ出したもので、日本の勃興は、アジア民族の興隆を結を生み、これはやがて白人文明に對する由々しき嫉妬となるであらうといふ、頗る勝手な議論なのである。ルーズベルトが以上のやうな忠告を試みたのは、もちろん日露の講和といふことを相當具體的に考へてきた證據で、それには日本から餘り過大な講和條件が飛び出しても困るといふ遠き慮りに出たところが多いのであらうが、黃禍論とまで行かなくとも、日本の勃興の限界點といふものも好意的とはいへ考へてゐたのではないかと思ふ。

米國の對日輿論の激變

日露戦争當時のアメリカの對日輿論といふものを回顧するにつけて、現在の支那事變に對する彼等の態度を、大きな感慨を以て比較せざるを得ない。僅々四十年にも満たざるのに、その相違の何と大きなことだらう。また嘗てのルーズベルト大統領と、その甥である現大統領ルーズベルトの對日感情の違ひの何と甚しいことだらうか。所んど兩極端ともいへるものがあるではないか。

勿論、現在の日本は、アメリカの國民の同情心に甘え且つ訴へる「負け犬」ではない。支那こそ名實共に負け犬であつて、その故にこそ支那に對する評判がよいのではあるが、たゞそれだけのことで、アメリカの對日輿論はこれ程まで悪化したのであらうか。

日本が日露戦争後幾々として發展したことに對する監視もあらう。嘗てルーズベルトが好意的に忠告した輿論的偏見に、今こそ彼等自身が陥ち込んだのであらう。しかし根本的に云つて、アメリカが日本に對して憎惡と監視不足を示すやうになつたのは支那に對するその密接な利害關係であつ

て、その結果をわれ／＼は早くも日露戦争當時に見出すことが出来るのである。

ルーズベルト大統領との第一回の會見で、すつかり氣をよくした金子使節は、つゞいて高平公使を伴つて、國務省にジョン・ヘイ長官を訪れた。紹介状は東京にあるダリヌカム米國公使から買つてあつたので、それを出したところ、ジョン・ヘイは、その紹介状には目もくれずに、金子伯の顔をしげ／＼と見て、

「貴下は御承知ではあるまいが、私は既に十四五年前にお目にかつてゐる。その頃、私は俄々たる新聞記者であつたから、貴下はもう忘れてをられるだらう……」

さう云つて、よく話し合つてみると、嘗て金子伯が各國の議院制度を調査のため、ワシントンにも立寄つた際、ヘンリー・アダムスの晚餐會で逢つたことが分つた。

「それでは貴下は嘗てリンカーンの秘書官として、南北戦争中その側におられ、後にリンカーン傳を書きになつたあの人ですか」

それから二人は、うち解けていろ／＼と時局談を交したが、この時ジョン・ヘイは次のやうに云つて、金子伯を博ろかしたのであつた。

「一體今度の日露戦争は、日本がアメリカの爲に、その身代りとなつて戦つてゐると云つてよい」「それは何ういふ譯か」と訊くと、

「私は外務大臣として、嘗て支那に向つて門戸開放、機會均等といふことを宣言した。それをロシアは門戸開放をやらないうで、滿洲には一切の外國人を入れぬ。滿洲をロシアの勢力範圍として、アメリカの商人を入れない。そして日本も、滿洲は支那の一部であるから、門戸開放、機會均等をせよと云つて、それが聞き入れられないから今日の戦争になつたのだ。つまりアメリカの政策を日本が維持するが爲の戰であるから、今度の戦争については、われ／＼は日本に對しては言はなければならぬ。アメリカの日本に對する同情が愈々として湧上つてゐるのも當然ではないか」と言つた。

ジョン・ヘイの「支那に對する門戸開放、機會均等の要求」政策は、今日に到るまで、アメリカ國務省の一貫して支持する固い主張なのである。

かうした見方からすれば、確かに日露戦争が如何にアメリカの基本國策にとつて都合がよいものであつたか、同時にアメリカの政治家、財界人に好感を興へたか分るのである。たゞ何時までも、日本がアメリカの番犬となつて、支那の門戸開放政策を遵守してゐたなら、それはどんなにか彼等にとつ

て好都合であつたかもしれないが、日本の成長と発展はやがて彼等のいふ、氣な信託と建設を反動するやうになつたわけである。

それだけに、日本の東亞新秩序の建設と云ふ世紀の偉業が着々と進行する限り、われわれはアメリカの絶えざる憎悪と敵視の的となるであらうことは、充分覺悟を失はなくてはならぬだらう。

戦費十五億

日露戦争のわが國の戦費は、約十五億圓と計算されてゐる。

當時の日本の歳計は約三億圓、日本銀行の正貨準備は一億五千萬圓、兌換券發行高は一億圓を往來してゐる。今日から考へれば、實に今昔の感に堪へぬ思ひがする。

さういふ小さな世帯で、當時としては破天荒の十五億圓もかかる戦争をしたのだから、その費用は大の事だつたことは想像出来るのである。

軍備の方はとにかく、財政の方では、戦争に對する準備は、殆んど眞細には考へられてゐなかつたことは、残念ながら本當であつた。開戦と同時に、大蔵省はとりあへず三億圓の豫算を計上したが、それは全くの机上案であつて、財源として増徴によるのか、國債を發行するのか、それとも外國から借入してやつてゆくのか、一つも成案はなかつたのである。

だから、開戦を決定した二月四日の御前會議で、伊藤博文は戰時財政について、つゝ込んだ質問を

發すると、大蔵大臣の會答は「一言も責任ある答へが出来ないのである。

伊藤は吃となつて、

「軍費支拂の目算が立たんで、戦争が出来ると思ふのか」

と會答をヤツつけ、そのため會議の閉鎖問題まで起つたのである。曠古の大戦争をやらうといふのに、内閣の内でも内輪もめがあつたとあつては、外聞も悪いし士氣にも影響するといふので、財界の老井上卿が口をきき、やつと其の時は収まつたのであるが、どうしても此の經濟問題については、誰もハツキリしに自信は持つてゐなかつたといふのが眞相であらう。

しかし誰が實際に此の戦費調達の問題に當らうとも、日本としては外債に主力を置いて此の難局を切り抜けなければならぬといふ點では異論はなかつたらうと思ふ。今日と較べれば、格段に劣つてゐる當時の日本の富の程度では、増徴するにしてもたかが知れてゐるし、今日の事變公債のやうな内國公債を發行しようとしても、巨額に賣れる見込みはないのである。

それに軍需品の大部分を外國から買はねばならぬ實狀では、どうしても外國の金を借りてその支拂に當るといふ外に、方法はないわけである。



高橋是清と

外債募集

そこで高橋は外債募集のこと、決すると、その大任を嘱されたのが、時の日銀副總裁、高橋是清だつた。

時に瓜生戦隊の仁川沖に於ける捷報、つゞいてわが聯合艦隊の旅順口砲撃と、快調を以てすべり出したわが軍事行動が、全国民の血を沸き立たせてゐた頃である。

高橋是清は、元老井上馨の私邸へ招かれた。井上は血色のよい顔を増かしながら、

「御苦勞だが、高橋君、あなたに外債のことは一切お委かせしたい。」

と云ひ、更に次のやうに付け加へた。

「あなたには内地に居つてもらひ、岡田孝吉君に外國へ行つてもらひ、二人の連絡で仕事をやつてもらひたいと思つてゐたが、岡田はあのやうに病身だし、それに此の難況では君を手離しても大丈夫と考へたので、外國行きをお願ひすることになつた。」

高橋は以前に正金銀行の役員として長く外國にゐたことがあるし、外國の財界人とも舊知が多く、國際金融に明るいことでは、當時としては第一人者だから、政府としてもなるべく日本に置いてをきたかつたのだからが、難況の進展は一瞬の躊躇を許さない。

日本が優勢である、といふ此の印象の消えぬ中に、早く外國の財界を動かして、なるべく有利な利率で、外債を募集しなければならぬのだ。

高橋はやゝ熟考してゐたが、やがて、

「喜んで此の大任をお請けしますが、それには一つの條件があります」と云つて、

「とにかく外債募集といふことには、ブローカーが増殖するものですが、政府として一切私に委せたらには、ブローカーの言に違はないやうにしてもらひたい。彼等は私を通じて、直接日本政府に運動して、いろいろ策動するだらうが、それでは出先きの者は何一つ仕事が出来ない。彼等の言ひ分は、政府は一切とり上げず、委任した私に全權をお委かせ願ひたい。これが私の唯一の條件です」と、一言釘を打つたのである。

井上馨も、

「御尤だと思ふ。それは覺悟にしろして、君にお渡してもよい。」と云ふので、高橋は一切を引請けたのである。此の註文は、後に非常に役に立つたのであつた。

高橋是清は念いで三十七年、二月二十四日に横濱を出発したが、その肩書は「日本政府特派財務委員」であり、秘書としては、英語に堪能な深井英五氏（後の日銀總裁）が選ばれて隨行することになつた。

井上馨は、わざわざ一行を見送りに横濱まで行き、横濱正金銀行の樓上で行はれた此行會では杯をあけて、

「高橋君の使命の成功と否とは、わが國運の分岐點である。」

と云つて、ボク／＼涙をこぼしたのであつた。感涙性の強い井上ばかりか、同席の者は皆眼を赤くしてゐたとは、深井氏の手記に述べられてゐる。

當時、高橋一行に隨せられた外債の額は一億圓だつたのである。

「……世間に發表は出来ぬが、この外債の抵當としては、わが海關稅の收入を以て充てるべく、御裁可を得てゐる……」

さう云つて、沈痛な面持をした阪谷大藏次官の顔が、眼前にちらつく。

「……そして此の戦費は、一ヶ年間の豫定で、朝鮮から露軍を掃蕩するだけの目的で、もし戦争が長

引き、鴨綠江の向ふに軍を進めなければならぬやうなら、更に戦費の追加、外債の追加も覚悟しなければならぬ。」

さう云つた、曾根大藏大臣の悲愴な表情も、眼裡をかすめて過るのであつた。

高橋の機略

一行はまづアメリカに向つたが、直ちに紐育に向ひ、まづ三四の銀行家に向つて、その社を打診した。

當時のアメリカの朝日輿論は、豫想以上に好かつたが、その時の財界は、自國産業發達のためには、寧ろ外國資本を誘致せねばならぬ状態にあつた。それで、米國內で外債を發行するなどと云ふことは困難と見極めたので、一行は直ちに大西洋を渡つて倫敦へ向つた。

高橋は東京に着くと、まづ舊知の人々に久闊を叙すと共に、まづ外債募集の相手を、どういふ方面に選ぶか、といふ點に深く、慮つたのである。これは實に彼の使命の成否が分れるところで、起債

も大敵も、日本が確實に勝つといふ見込みを立て、ある者は一人としてない。併しこの度打倒して置
くならば、ロシアは満洲を領有し、九州へも進んで来ることを火を積るより明かだ。事実に至れば
國を建しても戦ふ一途あるのみ、成功、不成功など眼中にない……」

伊藤は顔面を紅くし、肉も言葉を吐くのであった。

「……斯く言ふ伊藤博文の如きは死に覚悟したる者な。陛下の御機である。今日は國運を賭して
戦ふ時であるから、わが生命財産地位尊厳は悉く、陛下に捧げて御奉公する時であると思ふ。我
輩と雖も、この戦争には成功の自信はない。しかし伊藤は、若しも滿洲の野にあるわが陸軍が悉く
大陸から撤退せられ、わが海軍も對馬海峡で悉く打沈められ、いよいよロシア軍が滿洲から我國に
迫つた時には、伊藤は身を平儀に落して鐵籠をかつぎ、山陰道か九州海岸に於て、博文の生命のあら
ん限り戦ひ、俄に一步たりとも日本の土地は踏まざる決心である。昔、元寇の時、北條時宗は、身
を平儀に落して敵と戦ふ覚悟を示した。その時彼は實に何と云つたか、彼も吾と共に九州に來れ。さ
うして我を伏して兵士を勞へと言つた。今日伊藤も、もしそんな場合にあればわが妻に命じ、時宗の
妻と同様に九州に行つて我を伏して兵士を勞ひ、さうして斯く言ふ博文は、鐵籠を背いでロシアの兵

と戦ふ。斯くまで自分は決心してゐる。成功不成功は問ふところでない。一つアメリカへ出掛けては
くれぬか」

と、滿腔の熱意を以て説くのであった。

伊藤のこの決心と言葉は、金子伯の直話だけに本音で、その忠告に於て、國を捧つものがある。

以て、わが政治家の決意のほどが傳はれるではないか。

金子伯は伊藤の此の熱意に動かれて、アメリカ行きを承諾したが、尙ほも國內各方面の戦局、戰を
打診しておかうと考へて、參謀本部に兒王次長を訪れた。

兒王中將は、金子伯の姿を認めると、

「君がアメリカへ行くと聞いて安心したよ」

とニコクとしてその居室に招きよるのであった。金子伯は、

「僕は一寸も安心しとらんよ。ところで山縣さんに聞けば、君が陸軍のことは全部計畫してゐるとい
ふんだが、一體勝つ見込はどの位あるんだい」

と、單刀直入に尋ねた。兒王は、

「そのために、僕は君のみ君のまゝ、カーキ服を着て、兵隊のわるい態度に赤毛をどかよつて、此の参
謀本部で三十日も作戦計畫に没頭してらんだよ」

「さうか。その三十日の研究の結果はどうだ」

「何とも云へぬが、まあ五分五分かな」

「さうか」

「併し五分五分では戦争のカタはつかん。そこを四分六分にしようと思つて、この兩三日頭を痛めて
あるんだ。大退却つて四退却すれば、その中どこか陣所に立つ國も出て来るだらう。それには陸軍と
いつて、第一番目の戦線が決定だ。これに負けると士氣が潰喪する。だから陸軍で、鴨綠江戰では
軍が一萬持つて來れば、こちらは二萬、向ふが三萬で來れば、日本は六萬といふ倍數で戦ふつもりで
今から兵數を計算し、兵站物資を準備してゐるんだ」

「そんなものかね」

「まあ君が参謀で説いてゐる途中、六度は陣線が行くだらうが、四次は負け戦の電報が行くもの
と覚悟してゐてくれ」

この四分六分の計算が、陸軍としては當時第一杯だったのである。連戦連捷とは、とても計算だけ
では割り出せたものではないのである。

金子伯は、更に海軍省に行つて、山本海軍大臣に會つた。只今、山縣、宗内、兒王將軍に會つて、
陸軍の方の見込みを聞いて來たが、海軍の方はどんな決定でられるか、と訊ねた。

山本海軍大臣は平直に、

「先づ日本の軍艦は半分沈め、その代り残りの半分を以て、ロシアの艦隊を全滅させる。僕は斯う
いふ見當をつけてゐる」

「さうすると海軍の方は陸軍陸軍よりつよいね、兒王君はこれ／＼言つた」

と云つて、金子伯はさきの兒王の話をした。

「さうか、僕の方は半分は軍艦を沈め、又人間も、半分は死んで貰はねばならぬが、君もアメリカ
で、どうかその心事をやつてくれ」

と云つて、互ひに手を固く握り合つたのであった。

これが當時の真相であつた。

ある。だから、どうしても全額集まらばかりでなく、一般の投資家の意向なり氣運といふものも無視出来ないのである。

高橋は清一行が倫敦に着いてから二ヶ月ばかりの形勢は、大體以上のやうなものであつたが、四月の二十日頃になると、さすがに腰の重い銀行團も動き出して来た。

最初は一千萬磅はとも出来ぬから、百萬磅から三百万萬磅位を短期の大蔵省券といふ形で出してみたらどうか、といふ話を申出して来た。

いくら當時の日本の所帯が小さくても、三百万萬磅ぐらゐでは仕方がない。その旨を言つて高橋はハツキリと辭ると、それではといふので大體次のやうな話になつて来た。

即ち、日本政府のため一千萬磅(一億圓)の公債を發行する。但しこれを全額募集するのは買取らから、とりあへず五百萬磅を發行しようといふのである。

折衷によつて、利率は年六分、期限は五ヶ年、抵當は關稅收入といふことに決つた。この關稅收入を擔保にしたのは、今日から考へると健全なやうな氣もするが、當時の日本の國力と

しては、英國の投資家を安心させるには、さうするより仕方がなかつたのである。

高橋はこの擔保の設定は、投資家を安心させるために必要だと形式的に考へてゐたので、實際には名みの擔保とするやうに言慮したのであつた。

だから英國の銀行家たちが、關稅を抵當とする以上、支那やトルコでやつてゐるやうに、英國から人を派して、日本の稅關を管理せねばならぬと強硬に主張するに對して、高橋は堪として應じない。

「一體貴君は、日本と支那とを同一に視ることが間違つてゐる。日本政府は、從來から外債に對して、元金利拂ひとも一厘と雖も怠つたことがあらうか。たゞに外國債ばかりでない、内國債でも利にかつて支拂ひを怠つたことは一度もないのである。それを支那やトルコと一緒にされては、甚だ迷惑である。」

さう云つて、遂に最後まで主張して、彼等をして、

「それでは、名ばかりの抵當ではないか」と不平は言はせても、最後にはそれを承認させてゐるのである。

かうした條件のうちに交渉も段々に進捗し、四五日ならずして、假調印といふことになつた。

そこへ、思ひがけの事運が、轉げこんで来たのであつた。假契約の成立を聞き、高橋の舊友ヒルは悦んで、一夕晚餐會を催したが、この時高橋は同席のシツフと云ふ英國人に紹介された。

この時はシツフといふ名をハツキリと覚え、シツフレイといふ英國に金融家があるが、その一族か何かだらう位に考へ、問はれるがまゝに、日本の經濟事情などを説明した。そして、

「やつと五百萬磅の公債を發行することに假契約が出来、一まづ息をついてゐるが、年内にはもう五百萬磅募集するやうに、政府から命ぜられてゐるので、私の仕事はまだこれからです」といつた内輪話まで、率直に話したのである。

シツフは、丁寧にその話に合點を打つて、親し氣に高橋の態度を見まもつてゐたが、その夜は別に特別の話もなく、二人は別れたのである。

ところが、その翌日、パース銀行のシヤンドが、高橋をその夜合に訪れた。パース銀行は、古くから日本政府の御用銀行で、シヤンドはその取締役で、高橋とは維新當時、横濱での知り合ひなのである。

「高橋さん、素晴らしい話をもつて参りましたよ」

さう云つて、シヤンドは相好をくづした。その語るところはかうである。

昨夜、高橋の隣席にゐた紳士は、パース銀行の取引先である銀行家、ムニーヨークのクレーンローブ商會の會長シツフ氏である。このシツフ氏が、今日、私のところへ来て申すには、「今度の日本公債の總額五百萬磅を自分が引受けて來國で發行したいが、高橋君の意向を伺つてくれ」といふ。

高橋にすれば、夢のやうな話である。五百萬磅であきらめてゐたところへ、もう五百萬磅を引受けるといふのである。合計一千萬磅なら、日本を出發する時準備された額の全額である。彼がこれを「天佑」と云つて喜んだのは當然だつたらう。

それから高橋はシツフのことに就いて訊ねてみると、彼は今や米國財界では日の出の勢のユダヤ銀行家で、その首率するクレーンローブ商會は、世界的な米國財團メルガン商會と肩を並べる位の勢力を占めてゐることが分つた。そして、その恒例であるヨーロッパ旅行の途次、英國に寄り、晚餐會に於て、高橋と偶然に席を同じくしたのである。

やつてもらはなくては困る」といふ返事であつた。

それに此の頃から、出發前に高橋が憂へてゐたやうな情勢が出来てきた。つまり種々の金融ブローカーが直接日本政府に運動してうまい條件を以て要路の者に吹き込むのである。

それで高橋は實際の起債界の現状を電報で知らせるのだが、それでも意欲は充分に傷へられず、毎日々々電報を打つてはクサつてゐたとは、深井氏の記述にある。

それでも政府の方が折れたので、十一月十四日に第二回の六分利附公債を千二百萬磅（一億二千萬圓）發行が決つた。擔保は前の關稅收益の獎金でと高橋は決めてゐるのに、日本方面からはブローカーたちが、鐵道収益をとか、烟草專賣基金を擔保とかしきりにデマを飛ばして、それが英國の新財に出る。銀行團としては、出先きの財務官と本國政府との不一致は起債に際しての不安を助長するのでしきりに文句を云ふ。その間に立つて、第二回分一億二千萬圓の募集をまとめ上げた高橋等の勞は大いに認められてよいと思ふ。

しかし、そんな事で機気がさして、高橋は翌三十八年の一月には無理に歸つて歸國してゐるが、結局總任者は外にないので、口説かれてまた英國に引返してゐる。此の時も井上馨は横濱まで彼を送り

「よよしあしの中にかけてたる高橋を、渡りて聞かんかりがねの聲」といふ歌を寄せて贈別してゐる。

その後、彼の方で成立してゐる公債は、次の如くである。

明治廿八年三月廿八日成立、

第一回四分半利附英貨公債、三千萬磅（三億圓）

同年、七月十一日成立、

第二回四分半利附英貨公債、三千萬磅（三億圓）

同年十一月二十七日成立、

四分利附英貨公債二千五百萬磅（二億五千萬圓）

明治廿九年三月十日成立、

五分利附英貨公債二千三百萬磅（二億三千萬圓）

以上を總算すると、戦時中の募集額が八千二百萬磅（八億二千萬圓）になり、戦後の建設や賠償債支拂のため、戦後になつて募集したのが四千八百萬磅（四億八千萬圓）の巨額に達する。

勿論これだけの莫大なる公債が成立するには、御成金の下わが派遣軍將士の勇戦力闘によつて、常に連戦連捷による國威の興隆にも依るが、高橋是清等一行の心腹を砕いた努力に依るところ大なるものがあると思ふ。

高橋は難局によつかる夜に、

「これが失敗したら腹を切る覚悟だ」

と、側近の深井氏に洩らしてゐるが、これは單なる責任上の退避を意味したのではなく、もつと深遠な意味に解された、と深井氏は語つてゐるが、高橋是清としては、眞に生命を賭しての御奉公だったのである。

いづれにせよ、日露戦争といふものが主として斯うして巨額な外國からの借金で、戦はれたといふ

ことを、われ／＼は銘記してよいと思ふ。

伊藤博文は、歸朝した高橋に、

「君の成功は感謝するが、今後これだけの借金の利拂ひをやつてゆくことを考へると、自分は今日以上の努力をしなければならぬと思ふ」

と語つてゐるが、實に日露戦後の戦債利拂ひといふものは、この伊藤の決意にもあるやうに、大きな負債を戦後の國民の肩の上にかけていたのであつた。しかもわれ／＼の父祖は、歌々として、此の大きな負債に堪へて、今日の日本を築き上げて来たのである。

やつてもらはなくては困る」といふ返事であつた。

それに此の頃から、出發前に高橋が憂へてゐたやうな情勢が出来てきた。つまり種々の金融ブローカーが直接日本政府に運動してうまい條件を以て要路の者に吹き込むのである。

それで高橋は實際の起債界の現状を電報で知らせるのだが、それでも意志は充分に傳へられず、毎日電報を打つてはクサつてゐたとは、深井氏の記述にある。

それでも政府の方が折れたので、十一月十四日に第二回の六分利附公債を千二百萬磅（一億二千萬圓）發行が决つた。擔保は前の關稅收益の現金でと高橋は決めてゐるのに、日本方面からはブローカーたちが、關稅收益をとく、關稅專賣基金を擔保とかしきりにデマを飛ばして、それが英國の新報に出る。銀行團としては、出先きの財務官と本國政府との不一致は起債に際しての不安を助長するものでしきりに文句を云ふ。その間に立つて、第二回分一億二千萬圓の募集をよめ上げた高橋等の勞は大いに認められてよいと思ふ。

しかし、そんな事で機氣がさして、高橋は翌三十八年の一月には無理に願つて歸國してゐるが、結局責任者は外にないので、口説かれてまた英國に引返してゐる。此の時も井上馨は横濱まで彼を送り

「よしあしの中にかけたる高橋を、渡りて聞かんかりがねの聲」といふ歌を寄せて激勵してゐる。

その後、彼の方で成立してゐる公債は、次の如くである。

明治廿八年三月廿八日成立、

第一回四分半利附英貨公債、三千萬磅（三億圓）

同年、七月十一日成立、

第二回四分半利附英貨公債、三千萬磅（三億圓）

同年十一月二十七日成立、

四分利附英貨公債、二千五百萬磅（二億五千萬圓）

明治廿九年三月十日成立、

五分利附英貨公債二千三百萬磅（二億三千萬圓）

以上を總算すると、戦時中の募集額が八千二百萬磅（八億二千萬圓）になり、戦後の建設や戦費後支拂のため、戦後になつて募集したのが四千八百萬磅（四億八千萬圓）の巨額に達する。

勿論これだけの莫大なる公債が成立するには、御成の下わが渡邊軍將兵の勇戦力闘によつて、當に連戦連捷による國威の興隆にも依るが、高橋是清等一行の心膽を伸いた努力に依るところ大なるものがあると思ふ。

高橋は歸國によつかる度に、

「これが失敗したら腹を切る覚悟だ」

と、側近の深井氏に決らしてゐるが、これは單なる責任上の進退を意味したのではなく、もつと深遠な意味に解された、と深井氏は語つてゐるが、高橋是清としては、眞に生命を賭しての御奉公だったのである。

いづれにせよ、日露戦争といふものが主として斯うして巨額な外國からの借金で、戦はれたといふ

ことを、われ／＼は銘記してよいと思ふ。

伊藤博文は、歸朝した高橋に、

「君の成功は感謝するが、今後これだけの借金の利拂ひをやつてゆくことを考へると、自分は今日以上の努力をしなければならぬと思ふ。」

と語つてゐるが、實に日露戦後の戦債利拂ひといふものは、この伊藤の決意にもあるやうに、大きな負擔を戦後の國民の肩の上にかけたのであつた。しかもわれ／＼の父祖は、黙々として、此の大きな負擔に堪へて、今日の日本を築き上げて来たのである。

功月休稀桂立休善宮院老有
 糸信恒垂事秋先活恒弟弟
 露暹我り 恒垂事者 末周 國

兒玉總參謀長



問題の參謀次長

明治三十六年十月一日、對露作戰の權威者として自衛共に許してゐた、參謀次長田村中將世選は、
 長逝した。享年五十歳であつた。
 何しろ日露の風雲はいよいよ險悪化し戰爭近し、といふ時に於て、殆んど對露作戰の獨立に一身を
 賭したといはれる田村中將だけに、その死は國民をひどく落胆させたものであつた。それだけに參謀
 次長の後任には誰が當るかは、國民の等しく注目するところであつた。

此の日陸相寺内正毅が、山縣有朋に出した手紙には、
 「今朝、大山侯より相談これあり、且同侯の意見は、福島、伊地知兩少將の中には如何との言葉に
 てこれ有り……」

とあるから、まづ候補者に擧つたのは、福島少將と伊地知少將である。
 福島安正は長野縣出身、シベリアを騎馬で横断したことは、當時有名で、遊學の天才と云はれた曾
 謀の將である。當時は參謀本部第二部長であつた。

伊地知少將は眞兒島出身、これまた當時に於ける福島科出身の傑材であつた。
 その他、當時、次長候補に擧げられる、少將クラスの候補れでは上原房作、内山小二郎、大迫尚
 更に現東條陸相の父君たる東條英教もあつた。

田村次長の死と共に、大山總參謀長はとつきの中に「福島か伊地知を後任にしたら」と考へたので
 あらうが、當時の參謀次長の實際にやらねばならぬ役割と責任とを考へるならば、作戦だけにひい
 た智謀の將では不足なのである。どうしても大局を大きく握ひことの出来る政治的手腕もある、大
 長が要求されてゐたのである。

だから大山の此の申し出に對し、陸軍の大元帥として、深慮慎重の山縣は、露軍に同意しなかつた
 のであつた。

もう少し大物を、との返事で、大山は今度は「それでは乃木を起用しては……」と更に提案したが
 これに對しては寺内陸相は、「乃木は第五師團長の後任として自分は考へてゐます」といつて、婉曲に
 辭つてゐる。

これに對して、參謀部長の役を辭し、山縣の出馬を促すべく懇望したが

山縣も健康が許さずの理由で、これを受けつけない。さすがに寛大な大山も、これでは餘り愉快で
 ないことは想像されるのであつた。

日露開戦を目前の中に控え、陸軍の上層部の間には、こんな風にして、なんとなくわたかましが懸
 成されて来たのである。

この機嫌を早くも察して、一日、霜風の朝に會したのは、桂首相と兒玉内相であつた。
 「どうも面白い空気のやうだな」

と、脱帽にやゝ剛然となつた兒玉源太郎は、相變らずの開けつ放しな調子で、桂を見るのであつ
 た。

「うん、今日はこゝへ来る前に、三長官（參謀總長大山、陸軍大臣寺内正毅、教育總監野津道貫）
 にも計つたが、また次長の問題で行き悩んでゐるんだ」

さう云つて、桂は、大山と山縣との間の行きさつにも言及した。
 「よく／＼してこれに傾聴してゐた兒玉は、

「ふん、さういふことになつてゐるのか。それぢや我々が飯場入のために、次長になつてもいいわ」

と事もなげに言ひ放つのであつた。

参謀入とは大山元帥の神名で、兒王が大山を尊敬し理解してゐることは、樞も前から知つてゐたのである。

今日の會議でも、樞としては「貴様、参謀次長をやつてくれ」とは云へさうで云へない立場にもあつたのだ。何しろ兒王は樞内閣の内務大臣であつて、云はゞ内閣の大黒柱である。しかも内務大臣は親任官だが、参謀次長は勅任官で、位から云つても格が下ることになるのである。

「参謀入のために使がやるよ」と、兒王はいつもの車直さで、自分から云ひ出したのだから、これでは問題は文句なく解決してしまつた。勿論、兒王参謀次長といふことは、つとに山縣が胸に推してゐたところであり、大山にしても、かねてからウマの合ふ兒王が次長になるなら、参謀總長を辭する必要もないわけだ。

十月十二日の官報は、内相、兒王源太郎中将が参謀次長の職についたことを報じたが、國民はアツと云つて驚いたのである。同時に、功績こそあれ落度もない兒王中将が、格を下げられ、作戰の中樞部に入つたといふことに深い意味をくみとり「これは容易ならぬ時勢になつたぞ」と暗黙の中に國民

兒王源太郎

三三三

大東明治史

三三四

は異状の決心を固めたのであつた。

同十三日、兒王は青島艦を軍服にかへ、久しぶりに艦に船を吊つて、参謀本部に臨み、各部長、課長を招いて挨拶した。

さうして挨拶は大體に親切型で、「諸君の御援助により……」とあるのが、普通だが、兒王は固から「諸君の殊に感謝せんことを望む」と簡單にやつてのけた。少壯参謀連も、船を見合せて、やるぞツといつた笑ひを交すのであつた。

毎日午前十一時から部長會議を開き、それから連日對露作戰が續かれることになつた。作戰の原案は、大體に於て死んだ田村次長が作つてあり、それが案か田中義一少佐の手にあつた。そこで兒王の兼任とともにこれを更に検討し、練り合ふことになつたのである。

そして、その年の十二月末になつて、次の要旨の作戰計畫が出来上つた。

對露作戰計畫の要旨（参謀本部）

韓半島は我が國防上極めて重大なる關係ある地域にして、決して他國をして指圖たも之に觸れしむるを許さず。故に時局の推移不幸にして日露開戦するに至らば、必ずや先づ韓國の占領を全くし以て

我立脚地を固くせざるべからず。海軍軍令部の判斷によれば、露國艦隊は旅順に集合し決戦を避くべ

く、海軍の決を見るは長日月の後に在りと。然れども、従らに海軍の結果を待つて時日を延延する時は、彼はこの間に乘じ地勢の便を利用し、北方より韓國に侵入して使略を逞くし、これが我が形勢は時と共に窮迫するに至るべし。故に豫め諸種の手段を講じ、海軍の結果に依頼せず、一部の陸兵を京城に派遣し、以て韓國内に先制の形勢を領有することを力めざるべからず。而してこれ悉く露の慮にあらす。蓋し海軍未だ決せずとするも、我が海軍は朝鮮海峽を確實に扼し得ればなり。

露國に對する作戰は之を二期に區分す。

第一期、鴨綠江以南の作戰にして、韓國の軍事的占領を全くするを以て國度とす。

第二期、鴨綠江以北、滿洲の作戰。

第一期作戰を略記すること左の如し。

一、先發隊發隊を韓國京釜南路上に派遣し、兵隊設置の準備をなさしむ。

二、臨時派遣隊（歩兵五大隊、山砲一中隊）を派遣し、京城及び元山の駐紮部隊を増加し、敵の小企圖に對し京城の占領を保持し、後援部隊の到着を待たしむ。

兒王源太郎

三三五

大東明治史

三三六

三、第十二師團を動員して韓國に送り。
四、海軍の状況之を許すに至らば、近衛、第二師團を韓國に送り。

兒王源太郎

日本陸軍の建設期に、わが國に渡來して、これを指導した人に、有名なメツケル少佐がある。

彼は普魯士軍には中尉として従軍し、その後「戰術學」の名著を出し、プロシヤ参謀部の傑材として聞えてゐたが、招かれて日本に渡來したのは明治十八年であつた。陸軍が近代戰の體容を變へたのはこの頃で、メツケル少佐は當時に於てはわが軍に於て不完全であつた、参謀將校の養成に渾身の力を傾けたのである。従つて、當時に於ける有爲な中堅將校は、殆んど彼の陸軍大學に於ける教へ見だつたのだ。

或る人が、メツケルに向つて、

「わが陸軍に於ける英才は誰だとお考へです」

六月五日、一行は無事に大澳に着き、それから約一ヶ月餘り、第三軍の主力は没かす飛ばすの防陣地を築いて、旅順の敵と對峙したのである。

本營を云ふと、第三軍が東京を發つた時には、旅順の防備もまた本營に完成してないと見てとり、一ヶ部隊位犧牲にしても、強襲によつてこれを陥れようといふ方針が、大體構つてゐたのである。しかしいよいよ敵地に乗り込んでみると、なか／＼さう簡單にはゆかぬといふことが、いろいろの點から判つて来た。

第一、旅順の砲臺地とも云ふべき金州南山を攻めたところが、その防備や築城が豫想外によく出来てゐることが分つた。砲臺はさされたが、わが死傷四千五百といふ大きな犠牲が總計にこれを物語つてゐる。この分では旅順はクロボトキンが「これを陥すには、歐洲最強の陸軍でも三ヶ年はかかる」と豪語してゐるやうに、想像以上に堅固に出来てゐることが測定された。これまで參謀本部で描いてゐた攻撃計畫が、重大な變更を加へる必要に迫られたのである。

第二には、砲臺の不足であつた。第二軍は金州南山で豫想に數倍する砲臺を費消してしまつたので第三軍としてはこれに莫大なる砲臺を貸してやつてゐるのである。勿論、内地の砲兵工廠は余力を

「この戦争を通じて、支那人の同情は減ひなく日本の側にあつた。日本軍は十年前に善き評判を残して行つた。旅順の熟知されてゐるロシア軍の占領よりも、日本軍の占領の方が望ましいことのやうに思はれた。そして、最後に、彼等は同種の人種であり、東洋はこれにより初めて西洋を征服する見込みを得たやうに考へた。」

と、支那人の間に起きた、不思議な感激の情を傳へてゐる。

東洋の地で、はじめて完全に武装された東洋人が、白人人種を完膚なきまでに叩きのめした、それは白人の歴史にも記載されてない程の未曾有の大規模で行はれたものだが、東洋人が大勝した……かうしたことは、今日になつて回想すればする程、意味の深いことだと思ふ。

凄絶なる總攻撃と二十八砲臺

明治三十七年八月十八日、第三軍の砲火は東洋一の聖城に向つて集中されることになつたが、その前日に、乃木將軍は山岡少佐（無治）を軍使として、臨時國際法に従つて「旅順要塞よりの非戦闘員の退去」と共に、降伏を勧告してゐる。

スツツセルは勿論、これを一顧してゐる。そこで、豫定のやうに、十八日に第一回總攻撃を開始する筈であつたが、その日は豪雨のため、中止して、翌十九日、一齊に砲門を開いたのである。

第一回總攻撃、参加兵力は五萬七千餘、わが死傷、將校以下一萬五千八百。

第二回總攻撃、これには兒王總參謀長も参加して指揮したが、わが参加兵力四萬四千、その死傷三千八百。實に榴彈三萬二千餘發、榴彈一萬餘發、小銃彈百九十餘萬發を費したが、戦局は少しも進捗しないのである。クロボトキン砲臺、龍山砲臺、海嵐山、その他二百三高地の前面は、文字通り彼我の屍を以て埋められ、山嶽は砲撃のために改まつたが、殆んど成果の見るべきものはなかつたの

であつた。

たゞ第二回の總攻撃に於て、はじめてその姿を現した廿八砲臺の巨砲は、その猛烈なる爆撃力で敵を恐怖せしめ旅順陥落の一要因となつたことは見逃し得ない事實である。在來の野戰重砲ではどうしても筒の立たなかつた、旅順のベトンも、この砲臺が一度命中すると、まるでカルメ焼がくづれるやうに、瓦解するのであるから、敵の士氣を挫くこと、莫大なものがあつた。

後日、水師營の會見で「龍城の貴軍を最も懼ませたものは何でしたか？」

「それは二十八砲臺の巨砲でありました。一度あの怪物の出現に出會ふと、わが防禦計畫は全く空に歸するのです。」

と答へてゐる。

旅順防禦の眞の指導者とも云ふべき、コンドラテンコ少將も、實にこの二十八砲臺のために戦死を乞はるのである。彼が東嶺、冠山北嶺の内の堅固な一室で作戰會議を開いてゐた時、わが二十八砲臺の一弾がその屋根に命中し、厚さ二尺のベトンはその鋭のやうに潰れて、その下敷となつて、居合

せた軍使たちもろとも、惨死してゐるのである。
 コンドラテンコ少将の戦死は、文字通り旅順の陥落を意味し、意氣沮丧したステツセルが開城を決
 心した大きな動機をなしてゐるのである。

不撓不屈の攻撃精神に燃えるわが將兵の肉弾も尊いと云へるが、二十八期砲の威力も、また偉とすべ
 きだと思ふ。

元來、二十八期といふのは、當時のわが海岸要塞に備へつけられた大砲で、砲身三千貫、砲室
 六千貫、それで備へつけるのに、水平面から一分でも傾いてゐたら、絶対に命中しないといふ厄介な
 代物だったのだ。しかも備へつけるのに、半年は掛るといふのだ。

當時わが士官学校では、原則として二十八期は移動不可能なものとして、教へてゐたので、初めは
 まさかこれが攻城砲として役に立つなどとは夢にも思ふ者はなかつた。

しかし、旅順の要塞内の構造が漸く明かになり、わが野戦重砲では到底これを掃除することが出来
 ぬといふことが分つてくるにつれ窮餘の策として、この二十八期を内地の海岸要塞から運んできて、
 攻城用に使つたらどうかといふことが唱へられてきた。

はじめ、この着想をしたのは誰であるか、それは僕の考案だといふ者は、十指を屈するほどであ
 る。しかし、當時の参謀次長、長岡外史少将の秘稿には、それは陸軍技術審査部長、有坂成章少将だ
 と云つてゐる。

「私は一日陸軍省に到り、砲兵課長の山口大佐をその狭苦しい一室に訪ふた。丁度有坂成章少将が居
 合せられ、談話は直ちに旅順問題に及んだ。有坂君曰く、

『おい、長岡君、今の砲類ではとても旅順は落ちない。二十八期砲を使はうではないか』

とて、同君は例の早口にて、而も成算確實なる語調で、しきりに勧められた。私の直覺では、とて
 もあんな固執の大きいものが、おいそれと間に合ふまい、殊に海岸の砲臺を陸上の城攻めに轉用する
 といふのは變なので私は種々と論議したが、有坂君の所信は頗る固い。學理と實際とに出た一々の證
 明に對して、私は全く感服した。

それから長岡少将は参謀總長に會つて、その要を力説し、遂にその許可を得て、とりあへず由良と
 觀音崎の要塞から六門だけ外して、これを第三軍に送ると決めてゐる。

此の二十八期砲の到着について、第三軍の幕僚は必ずしも喜ばず、殊に攻城砲兵司令官である豊島

少将(陽謀)などは「砲床のベトンが乾く期間だけでも、一、二ヶ月はかかるだらう。そんなものが
 階尺に合ふものか」と相手にしてゐない。割付けが済まぬうちに、旅順は陥してみせるといふ意氣込
 みなのである。

しかし、この六門は砲床構築部長、横田大尉(後)の超人的努力で、僅々九日にして發射の準備備
 を完了したのである。

九月三十日午前十時、二ヶ所に割付けられた此の巨砲が椅子山、松樹山、二龍山、東鷲冠山の諸
 砲臺に、悪々たる砲りを發して射込まれた時、その力強さにわが將士は泣いて勇躍したのであつた。
 第三軍、總攻隊は多大の希望をもつて十月二十六日に開始されたが、二龍山、松樹山、東鷲冠山
 北砲臺を奪取したわけで、決定的な戦果は挙げられなかつた。

十一月三日の天長節を、旅順の町で祝ふといふのがわが將兵の合言葉であつたが、それも遂に裏切
 りに歸した。

しかもバルチック艦隊は十月十五日、リパウ軍港を發して、東航の途に就いたといふ確報は至り、
 第二軍は勿論、滿洲軍總司令部、更に大本營に於ける憂色は一入過ぎものがあつたのである。

二〇三高地論争

當時わが攻撃の主目標は「望遠一帯の高地を奪取す」といふのであつたが、前後三回に亘る砲撃
 の失敗は、やうやく此の正面攻撃に對する反省が行はれてきた。

「旅順を陸正面から如何に強襲すると、斷じて攻め出せん。それより、比較的防備の薄い二〇三高
 地を奪ひ、こゝから旅順港内を掃蕩して、二十八期の巨砲をば射すべきだ」

といった意見は、第三軍の中にも擡頭したが、大本營の長岡少将、滿洲軍の井口少将(後)の間
 に熱心に唱へられるやうになつた。

しかし、第三軍の幕僚長、伊地知少将と大本營とは、此の二〇三高地問題で意見はまよとらず、滿
 洲軍の参謀の間でも一致したものはなかつたのである。

大山總司令官は、十一月九日に参謀總長に打電して、その意見を述べてゐるが、その中では「二十
 八期砲の如き大威力を加へ得た今日、たとへ二〇三高地を奪つても、それは港内の軍艦を射撃するた

めの一戦、河原に過ぎぬ。これで旅順の敵の死命を制したとはいへぬ。それ故、軍としては、既定方針たる第三項の攻撃を行ふ豫定だが、助攻隊を二〇三高地にも加へるつもりである」と云つて、折衷論を具申してゐる。第三項の攻撃とは、二股山、松樹山の攻撃で、この時にはわが軍は累次の失敗に鑑みて、砲を据つて學前に攻撃據點をつくり、第四次總攻撃を待つて、一舉に望臺一帯高地を占領しようとしてゐるのである。

山田元帥は「旅順を陥るゝを夢み、賦して乃木將軍に示す」と題する詩をつくり、乃木を激励するところがあつた。

百雷激雷天また驚く

包圍半歳、萬屍横はる

極陣理る處、鐵より堅し

一舉遂に陥る、旅順城

十一月二十六日、遂に待ちに待つた第四回總攻撃が實施された。北海道の精兵、新銳の第七師團が新たに加はり、全軍の意気は天を衝くの程があつた。

二十二日には、砲轟が下懸され、その中には幾多くも、

「成功を望む情、甚だ切なり」と仰せられてゐるのである。

二十八日朝は、前日の二十五日から射撃を開始したが、その他の攻城重砲も翌二十六日から一齊に砲門を開き、地軸を撼がす砲撃は壯絶の限りをつくした。

「今度こそは……」と決死の歩兵部隊は所定の位置につき、計畫通り砲撃となつて前進したが、敵の反撃の砲火は猛烈を極め、松樹山砲臺に向つた第一師團は三回の突撃も失敗して後退し、望臺正面に向つた第九師團も退き、第十一師團のみは東冠山山腹の散兵壕を奪つたが、敵の逆襲によつて奪還され、師團長の土屋中將（光春）も重傷を負ふに至つた。

更に、旅順要塞を中斷するといふ重大任務を帯びて躍進した「白蟻隊」も、夥しき損害と共に、指揮官中村少將も負傷して、遂に命令によつて後退した。

かくて、望臺一帯高地占領といふ熱望が挫折されると共に、全軍は水の飢きに就くが如くに、砲線

を北に移動して行つた。

はハツキリと二〇三高地に轉移されたのであつた。今や全軍の運命は、一にならなかなるこの二高山にかゝつてきたのである。

必死の攻防戦

二十九日、望臺にあつた海軍軍艦司令部を出た兒玉總參謀長は、參謀の田中重少佐一人をつれて旅順へ向ふべく金州縣へ着いた。

深夜の金州縣は、軍々たる粉雪に降りこめられてゐる。機關車のピストンが凍結したので、列車は運轉を止め、兒玉大將は機關車のすぐ後についてゐる有蓋貨車の中で、外套にくるまつて寝てゐるところへ、暗號電報がとゞいた。翻譯すれば、

「第三軍は二〇三高地を確實に占領す」とある。

「よし、取れたか。それは吉報ぢや」

と、兒玉は暗れやかに笑つて、機嫌の悪毒酒で眼を傾けるのであつた。

第四回總攻撃には、全滿洲軍は清軍の期待を持ち、總參謀長たる田島少將（安正）を派して、第三軍の作戦獨立に參謀させてゐるが、戦況の進展の遅々たるのを見ては、兒玉はチツと司令部に止つてゐることは出来なかつた。

「乃木をまた激励せにや……」

さう云つて兒玉は出かけてきたが、二〇三高地占領の報は、肩の重荷を一つ下したやうなものである。それだけに、列車がダルトーについた時、またも飛電あり、

「二〇三高地は敵の逆襲により奪還されたり」と聞いた時、兒玉は顔色を變へて、焦慮の様を示したのである。平素の朗かさは、全くなくなつてゐるのである。

汽車は、乃木軍の司令部のある柳樹房の一つ手前の驛に着いた時、大庭中佐（二郎）が一行を導へて来た。兒玉は大庭の顔を見るや、

「大庭、貴様たちは何故二〇三を奪還されたのぢや。そんなグラシのないことではどうするか」と怒聲した。

第三軍参謀部長として、全身全霊をこの攻圍戦にうち込み、全軍の信頼厚い大庭中佐は、兒玉の痛烈骨を刺す怒りにも慣伏することなく、眉宇の間に軒昂の意氣をホして、

「戦でございませうから、閣下、……一進一退はございませう。しかし第三軍の意氣はまことに旺盛でありますから、必ず目的は達成します」と應酬するのであつた。

勝つために、また二〇三高地を奪取するため、全軍の士氣はこの頃から火の玉となつて、燃え上つてきたのである。

尾山由河といふ精悍な、二〇三高地争奪戦のためにつくられたと思ふほど、二十七日から九晝夜にわたる争奪戦は凄絶を極めた。わが軍は三度その頂上を奪ひ、三度これを敵に奪還されてゐるのである。

當時、第三軍司令部に従軍してゐた志賀重昂は、その著「旅順攻圍軍」の中に、この壯絶なる光景を叙して、

「二〇三高地を眺めると、山頂には敵兵散強に陣張りて我を瞰射し、われまた山下より二十八砲臺を間隙なく射撃し、命中正確にして彈の地に落つる毎に、敵兵は空中に飛びて粉砕さる。かくて二〇三

高地は元來若直なる二子山なりしに、二子の上は數百の極小なる山が出来て凸凹の多い醜い山となりその形を一變した。尤も初め七日間は此の凸凹も愕然と見えたが、我方の砲の上に敵の砲が重なり、敵味方の砲が互重になつて赤毛布を敷き詰めた様になりしにより、七日目以後は再び従前の素直なる形に返つたやうに見えた」と書いてゐる。

連日の苦闘で、司令部員はみな骨ばつた顔に、たまにだけ光をやらせてをり、乃木將軍の眼など、すつかり赤く腫れて、丁度梅干を貼つたやうに、見るも痛ましい限りであつた。

司令部は高崎山の中腹の土窟の中にあり、この中で着のみ着のまま乃木大將に伊地知参謀長、それに司令部の兒玉大將と船島少將が車座になつて、作戰指導にあたつたのである。兒玉が、大山樫司令官の名によつて、乃木軍の指揮をとつてからも、二〇三高地は二度占領しては、二度奪ひ返されてゐる。

「今度こそは取れるぞツ」と、兒玉はその自信が少し出来て来ると、またいつものユーモアが飛び出してゐるのであつた。

白旗降参謀で有名な、第三軍参謀山岡少佐がこの土窟をのぞいたが、會議中なので速應して歸らうとする。

「おいおい」と、後から兒玉が呼びとめる。

「山岡、参謀のために、よく見とけよ。元老會議といふもんは、いつもこんなもんぢや。また時に、機嫌がよいと、若い田中参謀などを相手によく冗談を云ふのであつた。

「この乃木といふ親爺は、貴様等やかまじやと思ふとるぢやらうが、これで若い少佐、中佐の頃はなかなか洒落者で、金モールの勲章に幹な細身のサーベルを拵つたものぢや。それが西洋へ行つてから、何を考へたのか、こんなやかましい差になりよつた」

從軍の記者團が、この司令部を訪れて、感想を叩くと、兒玉は「アハハハハ、……乃木の此は特別に臭いものぢやよ。我輩は實に苦境に陥つたねえ」と噴笑するのであつた。苦境に陥つたといふのは、前線から来るその頃の戦況の常用語だつたのである。

しかし元寇ばかり飛ばしてゐたのではない。滿洲軍司令部代理として、自ら砲臺内を往復し、二〇三高地の下に匍伏して、戦況を観察するといふ熱心さである。

その中に、十一月三十日の攻撃に、旭川師團の生徒りの兵が約百名ばかり取つて陣張つてゐる山頂の西南角から、樺皮の旗幟港内が見えるといふ報が入つた。

「何、旗幟が見えるツ」

それつと云ふので第七師團の白水参謀、司令部の岡司令参謀、海軍の岩村参謀（俊武）が觀測筒として、決死の陣持で飛び出して行つた。

雨と降る砲丸を併してその突角部にたどりつき、遙か見れば、旗幟の町は一層の下にあり、港内には日の上の砲とも云ふべき、旗幟艦隊が七隻、その他船隻が数々と手にとるやうに見えるのである。轉げるやうにして山を降りるや山麓の重砲臺地にかけこみ、それから十分後には、二十八砲臺はじめ殆んど此處に集中したと思はれる重砲が、今迄にない正確さを以て、旗幟の市の中樞部と敵艦に向つて雨と注がれた。

その日の夕方、

「ボベータ艦上に白煙湧く。四十五度傾斜、ボルタツは沈没、海底に墜着す」といつた、快報が續々と運じた。

この砲火に居た、まれなくなつて港外へ逃げ出したセバストポリリ號を除き残りの六艦は撃沈或ひは擱坐して全く破壊されたのである。

旅順最後の日は近い。十二月五日、わが旭川師團を主力として、第一師團を援助として、念ビツチの砲撃の下に、二〇三高地は、その全部にわたつて、わが軍の兵士を以て奪はれ、至るところに日の丸の旗が翻つたのであつた。

此の高地の攻防戦に敵の死者五千四百、わがそれは三千二百、負傷八千名を出した。二十八砲臺の撃射した弾丸は實に二千三百發といふから、その激戦の様も想像される。

二〇三高地の占據は敵の咽喉を締め上げたものであり、つゞいて行はれた第一、第九兩師團の二龍山砲臺占領、第十一師團の東嶺、山砲臺の占據は、こゝに完全に旅順の四肢を断つたのである。

明くれば、明治三十八年一月一日、敵の軍使水師營南方に來り、守將ステツセルの手紙を呈し、陣城を乞ふたのである。

北進する乃木軍

一月十四日、旅順に入城した第三軍は陣中將士の慰勞祭を行つた。式場には四ヶ師團の生き残りの兵が溢れ、銃聲を振る手はしびれ、眉は寒さに白く凍つてゐる。

軍樂隊の莊重な「國の鎮め」が終ると、乃木軍司令官は應々と祭壇の前に進み、低聲に祭文を読みはじめた。

「……吾等諸士ト生死ヲ共ニシ、而モ、大元帥陛下ヨリ優渥ナル給語ヲ下賜セラルルニ會フ。願キテ諸士ガ遺體ヲ思ヘバ、皆爾リ此ノ光榮ヲ享クルニ思ヒンヤ。嗚呼、諸士ト此光榮ヲ領ントシテ爾明相隔ツ、悲イ哉……」

將軍の聲はこゝで途切れると共に、林のやうに立つ銃聲はかすかに響へてゐるのである。全軍聲を飲んで泣いてゐるのだ。

「……乃木全軍ノ旅順ニ入ルヤ、諸士ガ忠血ヲ以テ榮ミタル山川ト要塞トヲ下掃スル所ヲ相シ、先ヅ

地ヲ清メ、地ヲ攻ケテ諸士ガ英魂ヲ招ク、希クハ魂ヲ暫樂トシテ來リ翼ケヨ」

そして、今迄祭壇の席にゐた乃木將軍は、いつの間にか遺族席に悄然として腰を下してゐた。そして、いよいよ地香となるや、官等の順で、將軍は第一に立つて、應々、保典の父として合掌するのであつた。

午後からは雲も切れ、冬の日ざしが和やかにさしてきた。戒厳令にうつつた賑やかな歡樂を後に、柳樹房の軍司令部に歸つた乃木將軍は、机の上に置かれてある大山總司令官からの電報を讀むのであつた。

「第三軍は、直ちに沙河附近に集中を要するべし」
（乃木軍よ、奉天戰に参加すべく、早く北上せよ）さういつた電命に應じて、第三軍の主力は再び龍柱をくだいて、龍々と北上を開始したのであつた。全隊に次ぐ全滅を以て、やうやく目的を果した第三軍の生き残りの兵は、再び曠古の大合戦ともいふべき奉天戰の相きに匹じて、敢々として軍靴をどろかせて遼東の地を北進して行つた。

一月二十四日、先鋒隊につゞいて、軍司令部は龍騎、想出深い旅順の地を去つた。

車窓から見る凍りつくした遼東の曠野は、たゞ軍調に、によく光つてゐるだけだ。所々に見る寒の落ち盡したドリの樹の梢には、眞黒い霧が悲しい聲で鳴いてゐた。

列車が金州城驛に入ると、誰か投げ込んだのか、内地の新聞が東になつて窓からとび込んできた。詩人とも云へる乃木將軍は御船越の「新年山」の記事がまづ目について、御紙を拝讀すると共に、遙か下の方の欄に小さな活字で組まれた歌が一首、將軍の眼を強く射た。

山梨國の陸軍一等兵某妻として、
つは者に召し出されてわが背子は
いづこの山に年遊よらん

（乃木軍よ、奉天戰へ）もう此の頃、倫敦タイムズやアメリカの新報記者たちは（旅順攻圍戦で意氣上る乃木軍は、來るべき奉天の大野戰で如何なる戰列を以て現れるであらうか）といつた旅順記事で心ある讀者の關心を集めてゐたのであつた。



奉天會戰

二六九

二月二十七日、これこそ近づきつゝある日本軍の總攻撃を物語る、準備が整つたのである。その規模の巨大、戦果の歴史的な點で、正に當時としては未曾有の大会戰である奉天戰は、かうしてはじまつたのである。

兩軍の戦闘員は、日本軍が二十四萬九千、ロシア軍は三十六萬七千、まづこれだけの兵力を動かした戦闘は、當時、世界の何處でも見當らない。しかも、ロシア軍の砲千二百九十九門、日本軍の砲九百九十二門と云はれるが、火力の猛烈な點でも當時の世界戦史でも比類がなかつたのである。

然もこれだけの劣勢にありながら、日本軍が採つた作戦は、包圍殲滅戰だつたのだ。孫子の謂ふ、「十なれば即ち圍む」とあるが如く敵の十倍の兵力を以て、初めて包圍戰は成功するのである。それを遙かに劣勢の兵力を以て奉天を圍んだのであるから、その計畫は、放膽とも巨大とも、形容のしやうもない不敵なものだつたのである。

だから、圍まれる側のロシア軍にしても、はじめはなかなかこの事實を認めなかつた。日本軍が迂回（即ち乃木第三軍の繞回運動）してゐるなど、とても信することが出来ないので。

當時ロシア軍の軍醫として従軍したヴェレナーエフが書いた有名な「日露戰爭記」には「砲撃は、

奉天會戰

二七一

二七〇

放膽なる包圍戰

北滿の地は、五十年以来の戦氣とかで、凍りつくした大地から、そろそろ春の息吹も聞えるほどだつた。凍雪はところ／＼融け、鶴や雀が忙しうに飛び廻つてゐた。

朝から、靄漫な砲聲が全線にわたつて轟きわたるのであつた。沙河戰以來久しよりの砲聲である。日本軍の十一時砲撃砲は相變らずの猛威を示してゐた。物凄い音をたてながら、見えぬ、遠い所からとんで来て、塹壕や鐵條網や砲臺をバラバラに炸いて行つた。

奉天（奉天）の南方、深河に沿つて構築されたロシア軍の守備陣地では、兵隊も將校も顔を見合せながら、

「始まつたぞ」

と顔を見合はした。

深い、底力のある砲聲の音は、その日一日、砲臺十里に渡る戦場に絶えなかつた。

二七一

目標に激しくなつて来た。わが軍の中に、まるで、自分でもそれを信じてゐないものやうに腹をすくうに、そして、注意深く、日本軍が我々の右翼を迂回した、といふ噂が傳まつて来た。

「何を下らんことを」士官達は笑つて居た。

しかし、噂は流るところに流がり、ますます強まつて行つた。擔み所のない不安が大きくなつて行つた。或る夜、われ／＼は野戰病院で茶を飲んでゐた。右腕を吊つたシエスタフ中尉が入つて来た。

私の質問に、彼は遠慮なくに笑つた。

「ドクトル、貴方にはそんなことが信ぜられるのですか。不可能なことですよ」。

わが軍の司令官といふ司令官は、迂回が不可能なことに對して、全く不動の信念を持つてゐた。戦闘のはじめに、或る士官は、北方へ移動しつゝある敵の大砲隊を見た、と司令官に報告した。兵隊長は、その報告書の上に「馬鹿」と書いた。師團長は「根もない噂を云ひよらした罪により、この士官は、歸國するべきである」と云つた。

しかし、その翌日の午後五時頃、日本軍の砲撃は、奉天のすぐ背後に轟きわたつたのである」とある。

ロシア側にとつて、全く此の迂回が豫想外であつたやうに、日本軍にとつても、少い兵力でこれを
圍むといふのは、非常に困難なものだつた。困難といふより、危険と云つた方がよい。

これに對して第三者とも云ふべき人の批評に、野津大將の第四軍に從軍したドイツのカーン親王の
從軍記がある。

「日本の左翼軍の迂回前進に伴ひ、第四軍も自然、左翼を張り出さねばならなくなつた。然るに右翼
にゐる第一軍もますます右翼に延長して行くので、第一軍の左翼と、第四軍の右翼との間には小くと
も七軒(二里弱)の隙間が出来た。而も第四軍はその手許には偵察步兵一聯隊、徒歩せる騎兵二聯隊
砲兵一大隊しか持つてゐないのだ。もし露軍が此の隙間を狙つて突破して來たら、日本軍はどうなる
だらうと、思はず慄然とした」

と書いてゐる。

要するに、わが包圍陣は全般的に兵力が少く、しかも所々に綻びが出来てゐたのである。露軍に猛
烈な戦意があつて、隨所に突破戦線に出られたら、日本軍は四分五裂の惨状を呈したかも知れない
のである。

滿洲軍首腦部の意圖

滿洲軍が、來るべき奉天大會戰を、日露戰役の關ヶ原と目して、その速大なる作戰計畫を樹てたの
は、早くも沙河對陣中のことであつたが、これを各軍司令官に示したのは、二月二十日であつた。

攻撃計畫書と共に手渡された大山總司令官の訓示は、正に日本の運命、長紀の動向を決せんとする
一戰に備へる、わが軍首腦部の決意を表明したものである。少し長いが引用する。同時に、
從來の各軍の戰術に對する總司令部の批評ともみられる部分も、われわれの興味を覺えしむるもの
がある。

訓示

一、近く目前に候はる會戰に於ては、我は殆んど日本帝國軍の全力を擧げ、敵は滿洲に用ひ得べき
最大の兵力と思はる、軍隊を擧げて、以て勝負を賭せんとす。これ重要中の重要な會戰にして、此
會戰に於て勝を制したるものは、此戰役の主人となるべく、實に日露戰爭の關ヶ原と云ふも不可な

らん。故に吾人は、此會戰の結果をして全戰役の決勝となす如く勉めざるべからず。

二、此度の大會戰に對する希望、既に第一項に述べたるが如し。故に我作戰のため取るべき方針も
亦之に伴はざるべからず。乃ち土地を略し學堂を陥るは、此大戦方針の主眼に非ず。固く可成
多大の損害を敵に與へ、敵をして復た起つ能はざらしむる如くせざるべからず。

三、諜報の傳ふる所に依れば、クロボトキン大將は此度の會戰には決して退却を許さず、退走する
者は日本兵の武器に斃れずして、退走を制する友軍の鎗と爲すべしと令したる由なり。之をして果し
て真ならば、彼も亦此の會戰を以て最後の決戦と爲すや知るべし。又敵の將卒にしてクロボトキン大
將の精神を以て精神となす時は、其交戰の頑強なる亦推して知るべし。吾、吾人は此頑強なる敵
に通過するの覚悟を以て戦はざるべからず。

四、頑強に戦ひたる敵をして退却に陥らしむる時は、之に損害を與ふるの激甚なること戦理の自
然なり。從來の戦術に依れば、學を守り地に據り、頑強に守るは彼の長所にして、
之が方策は他なし、即ち敵軍地に據るに遇はば、兵力を以て之を攻撃することを避けて、その背側よ
り之を攻撃し、敵の動搖に乘じて一舉に之を殲滅するにあり。敵の陣地の側背に出で、之をして退却

を餘儀なくせしめたるは、今日迄の戦歴明瞭に之を示せり。さて、敵の陣地に通過し、直に之を攻撃
し、その頑強なる抵抗を受け、我損害の大なるに及び初めて陣地の背側に力を用ふるは、交戰者
の常勢とは云ひながら、其施設既に遅しと云ふべし。今日迄の戦歴に依るに、此點に於て遺憾なく
如たる所なしとする難はず。而して此の情勢に際する所以は、要するに偵察の十分ならざるに起因せ
んばあらず。各司令官及び軍隊指揮官は、深く偵察に注意し、速に其効果を利用し、攻撃方面を決
定し之を實施せざるべからず。諸君、乞ふ之を三省せよ。

五、仄かに聞くところによれば敵の捕虜の創傷を検するに、我砲彈に依りて負傷したる者極めて稀
に、極端に云へば皆無なりと云ふ。若し之をして信ならしめば、是れ吾人の深く注意を要する所なり
又砲彈の製造力上、此度の會戰に於ても豊富なる豫備弾を有する能はず、全軍のため僅に十二三萬發
を備ふるのみ。故に砲撃は最大の注意を以て實行せられ、重要な目標に向つては砲丸を集中し、又
好機に際しては猛烈なる發射を躊躇せざると同時に、一發たりとも無効の砲丸を發射せざるよう留意
を切望す。若し沙河會戰の結局の如く、彈藥に缺乏を訴へる爲に、果敢なる戦局を結ぶ能はざる如き
ことあらば、吾人は無益の戦闘を交へたるの責を負ふる能はず。

以上を以て觀れば、滿洲軍總司令部は、この大會戰を以て、敵に徹底的な猛攻を加へ、これを粉砕して、戰役の全局圖を結ぶといふ悲壯なる決意に發するものであることが分る。乾坤一擲とも云ふべき勇略を以てする包圍戰を企てたことも、これでわかると思ふ。

とにかく、この大會戰には、參謀を始め、首領部は文字通り肝膽を砕いたのであつた。作戰會議で、召集した乃木將軍がかう云つて發言したといふ話がある。

「自分の率ゐる第三軍は、どうせ旅順で傷めつくされた生き残りばかりだ。自分は彼等を率ゐて奉天城の中に飛びこんで、斬つて斬つて斬りまくる。他の諸軍は、その混亂に乗じて、敵味方の區別はらんから、三方からどしどし砲火を浴びせかけてもらひたい。さうすれば奉天の敵は、たしかに早く參らだらう」

この申し出では、さすがの兒玉總參謀長も蒼くなり、乃木をなだめて會議場から連れ出した、といふのである。恐らくこの話はウツだらうが、それほど眞實になつて、みんなが作戰を續つたのである。

その中でも兒玉は、旅順のすべてを捧つた。當時、東郷海軍にあつた總司令部を、兒玉は早朝に起き

て、東天を祈るのを言とした。或る人がその理由を尋ねると、

「人事を盡して遺憾はないが、更に太陽に向つて加護を乞うてをものぢや」と卒直に答へたといふ。

總參謀長の重任にあるだけに、その心事は正に悲壯なものである。わが軍の配置は、北に向つて、最右翼が新編成の鴨綠江軍、それから第一軍、第四軍、第二軍の順で並び、敵の中央に當り、更にわが左翼には、旅順からかけつけた第三軍が急轉回して、敵の尾端を

押へることになつた。これに對して、ロシア軍は右翼に第二軍（カウリバールス大將）、中央に第三軍（ヒルディング大將）、左翼に第一軍（リネウイツ大將）を配し、前哨戰などでは寧ろ積極的で、仲々容易ならぬ形勢であつた。

わが作戰は、最右翼の鴨綠江軍（川村大將）を餌兵として動かすと、敵はその方から攻撃されると思つて、兵を移動する。その處をついて、左翼第三軍を急進させて、大きく奉天城を西に包圍せ、奉天城内の動搖しかけたところを、中央の各兵團を突出させるといふのである。

然も、これは全く圖に中つた。

蓋しクロボトキン大將が最も頭痛に病んだのは、旅順を陥した乃木軍がどの方面から現れるかといふ、第三軍の動向だつた。第三軍は旅順の側面を突くべき、必ずしも後者を張つてゐたわけではなく、總司令部の松川少將など「總司令部としては第三軍には必ずしも大きな期待は持つてゐないよ」などと發言して、乃木軍の津野田參謀を口惜がらせたこともあるくらいだ。

しかし、これがロシア軍にしてみれば、あの難攻不落の旅順を陥した兵團だと知れば、大いに警戒を要する相手なのである。

「天命よ。願くは、乃木軍との對戦だけは許して下さい」

さう云つて、無智なロシア兵が神に祈つてゐるのを見た、外國從軍記者は書いてゐる。

とにかくクロボトキンは乃木軍に就ては、神聖靈のやうになつて、氣にしてゐたのである。そこへ諜報が入つた。即ち乃木軍に屬する第十一師團の兵隊が右翼（敵の左翼）に現れたといふのである。

この斥候の報告は正しかつた。たしかに、彼が認めた日本兵の標の部隊番號は、第三軍の第十一師

團に屬する部隊だつたからである。

これを知つたクロボトキンは、これこそ正に第三軍の主力だと思つて、自己の指揮下にあつた豫備隊を全部そつちへ移動してしまつた。

然るに、第十一師團は十一師團でも、それは第三軍に屬するものではなく、新編成の鴨綠江軍だつたのである。つまり鴨綠江軍は奉天戰のために新に編成されたもので、第三軍から第十一師團を分離させ、これに後援第一師團を加へた二ヶ師團から成る兵團だつた。

いづくぞ知らん、第三軍は大切な持駒として、小北河に深く隠しておいて、敵の謀者などには覺られぬやうにしてあつたのである。

大體に、ロシア軍は自分の左翼をいつも警戒するのを常とした。それは日本軍がいつもその方面から壓倒して來るので、殆んど習慣的に左翼には神經過敏だつたのだ。今度も同じ手かと持ち續へてゐる時に、果して日本軍はその方面の鴨綠江軍をまづ動かした。その中には第十一師團がある。これぞ乃木軍の主力、と云ふので總參謀長をそつちへ移動した際に、わが乃木軍は急進また急進、敵の右翼を大きく迂回し、氷雪の野を、戰史に有名な大迂回運動を敢行し、奉天城を大きく後方からつ

ひといふ態勢を採つたのである。

大規模回運動

二月二十八日、第三軍は三蔵隊をなして、小北河を出発した。

「野戦は例によめが出来るのは困るが、氣持がさつぱりして、いゝなあ」

「戦況がどんどん展開するから氣持がいい」

「要緊戦とは比較にならない壯快さだ」

將士たちは口々に言ひ合つた。

第九師團を奥大將の第二軍との連絡をとるために授け、第一、第七兩師團の兵は官費も宿費地にも授け、全くの輕装で出發した。

急行軍である。雪を取り、氷を削つて、連日の急行軍であつた。

咽歌が乾くと、隊伍の兵士たちは、制止も聞かず、列外へ出て、路傍の雪を口にくむのである。

奉天會戰

二八一

と答へた。

尙も嚴重に訊問をつまげると、彼は一度、鴨綠江軍の方へ廻された後備軍に屬して居り、本當の乃木が奉天の西北へ追つてゐると聞き、急遽、再びこの方面に廻されたものであることが分つた。

「戦線を左翼から右翼の端まで歩きまはされて、兵隊たちは疲勞し切つてゐます」

と答へるのを聞いてクロバトキンが大誤算をやつたことが、第三軍の幕僚たちにも分つた。事實、思ひの外にこの方面の敵の兵力が少く、抵抗の弱いことも、この捕虜の自白が必ずしもデタラメでないことを語つてゐる。

有色に塗れた第三軍の首領部は、故に更に一段と急行軍に拍車をかけたのであつた。

六日には、第三軍の先鋒は奉天の西北方に出て、最早その背後に迫るばかりになつてゐた。

明ければ三月七日、奉天會戰のクライマックスとも云ふべき日であつた。

この日一日、ロシア軍は流石に歐洲に於て慣にしてゐた名將にたがはず、獨特のねばり強さを發揮した。さしもの日本軍も、各所に於て手酷しい反撃を受けたものである。

殊に苦戦に陥つたのは、奥大將の第二軍であつた。午後五時二十分、麾下の第三師團參謀は、自ら

奉天會戰

二八三

大東明治史

二八二

雪の上には、蒙古風の寒風が吹き、これを飲むとは不潔も甚だしい。

乃木はその様子を見ると、直ちにこれを飲ませ止した。すこ／＼と隊列へ歸つて行く兵隊を見るとみな軍服も帽子も新しい。内地で三ヶ月の教育を受けて、直ちに前線へ送られて来た、午飯の補充兵ばかりであつた。

當時の動員法は、現役、豫備、後備と順に召集するのだから、後から来る兵隊は、どうしても午飯も多く、従つて戰鬥力も格段に落ちた。しかし奉天戰の頃になると、この補充兵でも、なかなか思ふやうに多く集め、教育することは出来なくなつてゐたのである。

三月三日、第一師團で一人の敵兵を捕虜にした。訊問にうつると彼はトムスタ步兵聯隊の軍醫手であると言つた。

「クロバトキン將軍はどうしてゐる」

と訊ねると、

「この一日に前線から奉天へ戻つて、今は奉天停車場に起居してゐます。神經衰弱だといふ評判で、みんなが心配してゐます」

その先鋒部隊は早くも北陵を通過する、奉天の真裏まで進出して行つたのである。

夜、十時だ。第三軍司令部の一室のベルが鳴つた。作戰主任參謀の白井中佐が受話機をとり上げる

「おーい。價だよ。兒玉だ。今日の第三軍の攻撃は鈍かつたぞ。軍司令部はもつと前方に出なけりやダメだ」

あれ程迅速に迂回をやつてゐるといふのに、一體どこが攻撃が鈍いといふんだらう。白井參謀もさすがに顔色を變へて聞き返さうとしたが、電話はふつつりと切れて繋がるがない。

しかも、それと前後して、電信兵が司令部の命令を受信して持つて来た。

「本日の第三軍の攻撃は遅延たるを免れず、更に奮勵健闘せよ」

この時の乃木軍の首領部の心中は、筆舌に盡せるものでなかつた。總司令部としては、一期も早く迂回部隊を完了させて、第二軍、第四軍當面の敵を動搖させるより、戦線の轉換は望めなかつた。勢ひ第三軍に對し、痛烈な言葉を發せずには居れなかつたであらう。

奉天會戰

二八五

奉天入城

東軍がその半分を潰滅されながら、なほ頑張り続けてゐる中に、第一軍、第四軍正面の敵は早くも敗走しはじめた。

クロバトキンは、この日の記録に、

「奉天会戦は全然我が軍に不利に終り、わが軍の努力發揮せられず、七、八、九の三日間に軍の情況は益々危急に陥り、乃木軍はわが第二軍の大部を包圍せり。三月七、八兩日に於ける兩軍の戦況及び位置を對比し、主として敵の精神に我に勝れるを見、以て予は七八兩日間に我が軍の戦況を豫知し、臨時撤退に向ひ退却するに決心せり。之により、恐らく將來の歴史家は奉天会戦を叙するに當り、予の持久力なきを遺憾すべし」

と書いてゐるが、まことに持久力のないことは、だらしが無い。クロバトキンの「豫定の退却」とは有名であるが、彼もさすがに後世の歴史家を氣にはしてゐたのだ。

しかし、露軍の奉天よりの退却は、潰滅のうちにも、素早いものであつた。

第三軍の殺到した北陵のあたりからは、遙かに黒煙を噴いて、退却する列車が、いくつも見えたのである。

こゝまで追ひ詰めて、敵を逃がすやうなことがあつてはならない。騎士たちは齒を鳴らしていきり立つたが、二週間にわたる戦闘で弾丸は殆んど盡してゐる。しかも、あまりの急行軍なので、弾薬の補給が全くない。敵の列車は、乃木軍の無念と齒ざしりを冷笑するかのやうに、後から後からと無敵に仕立てられて、鐵嶺へ、ハルビンへと北上して行くのであつた。

九日はわが全線にわたる追撃戦であつたが、朝来、生暖かい南風が吹き起つた。それが九時頃から次第に強風になり、更に烈風となつて、一望千里の野は黄塵捲き起り、咫尺も辨ぜずといつた慘状たる光景となつた。

黄塵は顔を蔽ひ、汗とまじつて、將兵らは、まるで黄粉餅のやうになる。逃げる敵を追ふにしてもまるで眼が開かない。敵も味方も、銃砲の狙ひは利かず、たゞ夢中で黄塵の中を、追ひ、逃げるといふ有様であつた。

三月十日は、昨日の狂風に引きかへて、曇かな日だつた。三寒四温といふが、暖かい日と云ふものは、われわれの想像以上らしい。一望千里、眺しなき平野には陽光が熱えて、さすがに春は學ばれない。

しかし、戦闘はまだ奉天市内でも郊外でも各所で行はれてゐた。殊に第三軍は、敗走する大部隊の敵を真正面にうけて、苦戦の限りを盡してゐた。北陵の卒々たる森林中で、殆んど全滅に瀕した部隊さへあつた。十日の日に奉天が占領されたのも知らずに、敵等はその乏しい弾丸を撃つて撃つて、撃ちまくつてゐたのである。

然し奉天城は、この十日のうちに、完全に日本軍の手に陥つたのである。關ヶ原は、日本軍が撃つたのである。

この會戦に於けるロシア側の死傷は、將校以下九萬六千。わが軍のそれは七萬。敵の捕虜二萬一千で、その中にはナイヒモフ將軍もゐた。南滿品の主なるものでは、軍旅三、砲四十八門。軍兵を以てしたわが包圍隊は、處々網の目を破られ、殊に最後の五分間で締め上げるのに失敗し、相當多くの敵兵を逃してはゐるがこれだけの戦勝と戦果を挙げたのは、大いに誇つてよいと思ふ。

もし、この會戦で、包圍戦が完全に行はれたら、一撃にして日露戦役も終了したかもしれないが、あの寡兵、また犠牲的とも云つてよい彈薬の不足では、さう圖で描いたやうな完全な殲滅戦は出来るものではない。同時に、これだけの大きな戦果を挙げ得たのは、精強なる日本軍であつたればこそ、と云へると思ふ。

三月二十五日、日本軍は堂々と奉天入城式を行つた。城外で分列式を終へた日本軍は、午後二時半、南門から入城した。

騎兵の捧げる「一日四里」の司令部旗の下、大山總司令官、兒玉總參謀長等は、廟々と馬を進めたかねて攻めてあつた奉天將軍城の鐵門に到着すると、

その門には、

五天の雨霖、鴻業に似

百萬の比喩、風城を驚

と大書してあつた。

「奉天三十年」の著者クリスチーは、この期間を奉天城内に在つて靜かに觀察してゐたが、

「この戦争を通じて、支那人の同情は疑ひなく日本の側にあつた。日本軍は十年前に善き評判を博して行つた。缺點の熟知されてゐるロシア軍の占領よりも、日本軍の占領の方が望ましいことのやうに思はれた。そして、最後に、彼等は同盟の人種であり、東洋はこれにより初めて西洋を征服する見込みを得たやうに考へた。」

と、支那人の間に起きた、不思議な感激の情を傳へてゐる。

東洋の地で、はじめて完全に武装された東洋人が、白人人種を完膚なきまでに叩きのめした、それは白人の歴史にも記載されてない程の未曾有の大規模で行はれたものだが、東洋人が大勝した……かうしたことは、今日になつて回想すればする程、意味の深いことだと思ふ。

兒玉の上京

蒙古の大勝と云はれる奉天大台戦が終り、その入城式が済んでから十日餘り、三月二十八日極東のうちに、兒玉滿洲軍總參謀長は新橋驛頭にその大陣巻けのした程細を現した。附添としては、田中義一參謀と、東大尉の二人きりである。

出迎への終尾の中に、長岡外史少將（參謀次長）の特徵ある側面を認めると、兒玉はつかくつかみより、軽く相手の腕を交はすと、その肩に手を置いて、

「長岡、火をつけた者は、火を消さんけりやいかんよ。これが野郎ぢや」

さう云つて、意味あり氣に笑ふのであつた。

側面ではあつたが、この一言は、そのまゝに、兒玉の上京の理由を暗示するものであり、奉天戦以後に於けるわが野戦軍の希望が、どこに在るかを感じ物語るものだったのである。

兒玉の歸京を迎へて、直ちに大本營に於て會議が開かれた。出席者は、特に元老として伊藤博文、



政戦兩略の一致

陸 軍 部

そのほかに參謀總長山縣有朋、海軍總長東郷平八郎、外相小村壽太郎、海相山本權次郎、陸相寺內正毅、農相曾根幸雄などが出席した。

「實は大急急に、講和の手續を決めていたゞきたい」

野田、兒玉はかう云つて、一座の度體を抜いたのであつた。

「軍人だけが戦争してゐる時機は、奉天會戦を最後に、もう過ぎたものと思ふ。これからは、戦術と政治が一致せねば、今までの勝利はふきとんで仕舞ふと考へる。講和をするからには、固く軍人と政治家が一身同體になつて、やらねばならん」

さう云つて置いて、兒玉は種々として現在のわが國力、また滿洲軍の占めてゐる戰略的地位を説明して、更に勵進して、

「ここにお出での諸先輩は、現地の事情を御存じないから安閑としてをられるが、今迄、ロシアは連戦連敗して居ると云つても、いはば日本を相手に背合せの戦争をしてゐたのである。背合せと云ふわけは、ロシアにとっては歐洲が敵で、極東が背中である。すでに背合せなのだから、また本當の力を出し切つてはゐないのだ。今までに動員した兵隊も、シベリヤやポーランドの第二波、第三波

の軍隊であつた。ところが奉天の大敗に鑑みて、タロバトキンに代つた總司令官ニコラエフが氣を結しつゝある大軍は、今度こそロシアにとつて置き置きの精兵ばかりである。われわれとして、深刻なる決意を固めなくてはならぬ時機が到来したものと考へる次第です」

一應はシーンと静まりかへつた。

「吾輩、ひそかに計算をたてゝみるのに、日本軍が現在の編から進出して、長春、ハルビンまで占領するには、この上更に九億の軍費と、十三萬の兵と、六ヶ月の日子とを必要とする。即ちハルビンまで行くのには、五十六歳までの國民軍を全部動員せねばならぬし、ウラヂボストクを取るには、五十二歳までの國民軍を召集しなければならぬ。人員の補充は、これでつくとしても、一日の戦費百萬圓の遣り繰りは一體どうして行くつもりであるか」

「戦争の運命は、戦勝の瞬間に於て、轉換の機を握らねばならぬ。帝國百年の安危存亡の分岐點は實に奉天大捷の後に、伏在してゐるのではないかと思ふ。どうか講和のために、出来るだけ早いチャンスを開んでいたゞきたい。そのためには、政戦兩略の一致こそ、現在ほど必要とされてゐる時機は無いと信ずる」



政戦兩略の一致

徳 太郎

兒玉の上京

蒙古の大勝と云はれる奉天大合戦が終り、その入城式が済んでから十日餘り、三月二十八日極東のうちに、兒玉源次郎少将は新橋驛にその大陣巻のした襷巻を現した。附添としては、田中義一少将と、東大尉の二人さきである。

出迎への將星の中に、長岡外史少将(參謀次長)の特徵ある側面を認めると、兒玉はつかくつと歩みより、軽く相手の腕を交はすと、その肩に手を置いて、

「長岡、火をつけた者は、火を消さんけりやいかんよ。これが肝腎ぢや」

さう云つて、意味あり氣に笑ふのであつた。

側面ではあつたが、この一言は、そのまゝに、兒玉の上京の理由を暗示するものであり、奉天大戦以後に於けるわが野戦軍の希望が、どこに在るかを痛然に物語るものだったのである。

兒玉の歸還を迎へて、直ちに大本營に於て會議が開かれた。出席者は、特に元老として伊藤博文、

そのほかに參謀總長山縣有朋、首相桂太郎、外相小村壽太郎、海軍大臣東郷平八郎、陸軍大臣桂太郎、農相曾根俊虎などが出席した。

「實は大至急に、講和の手筈を決めていたゞきたい」

男頭、兒玉はかう云つて、一應の度體を抜いたのであつた。

「軍人だけが戦争してゐる時機は、奉天會戦を最後に、もう過ぎたものと思ふ。これからは、戦術と政治が一致せねば、今までの勝利はふもとんで仕舞ふと考へる。講和をするからには、固く軍人と政治家が一身同體になつて、やらねばならぬ」

さう云つて置いて、兒玉は種々として現在のわが國力、また滿洲軍の占めてゐる戰略的地位を説明して、更に感服して、

「ここにお出での諸先輩は、現地の事情を御存じないから安閑としてをられるが、今迄、ロシアは連戦連敗して居ると云つても、いはば日本を相手に背合せの戦争をしてゐたのである。背合せと云ふわけは、ロシアにとつては歐洲が陣で、極東が背合せである。すでに背合せなのだから、また本當の力を出し切つてはゐないのだ。今までに動員した兵隊も、シベリヤやポーランドの第二流、第三流

の軍隊であつた。ところが奉天の大敗に鑑みて、クロバトキヤに代つた總司令官ラニエウキツチが集結しつゝある大軍は、今度こそロシアにとつて置き難い結核ばかりである。われわれとして、深刻なる決意を固めなくてはならぬ時機が到来したものと考へる次第です」

一軍はシオンと歸りかへつた。

「吾輩、ひそかに計算をたて、みるのに、日本軍が現在の線から進出して、長春、ハルビンまで占領するには、この上更に九億の軍費と、十三萬の兵と、六ヶ月の日子とを必要とする。即ちハルビンまで行くには、五十六歳までの國民軍を全部動員せねばならぬし、ウラヂボストクを取るには、五十二歳までの國民軍を召集しなければならぬ。人員の補充は、これでつくとしても、一日の戦費百萬圓の遣り繰りは一體どうして行つてもいゝか」

「戦争の運命は、戦勝の瞬間に於て、轉換の機を握らねばならない。帝國百年の安危存亡の分岐點は實に奉天大捷の後に、伏在してゐるのではないかと思ふ。どうか講和のために、出来るだけ早いチャンスを開いていただきたい。そのためには、政略略の一致こそ、現在ほど必要とされてゐる時機は無いと信ずる」

兒玉のこの提言は、言辭こそ痛烈ではあつたが、特別に珍らしいものではなかつた。戦争も奉天會戰だけで終らず、これから長期戦になるかも知れぬといふ時だから、政略略の一致が如何に必要であるかは、内地に在つた軍人も、政治家も等しく考へてはゐるのであつた。

勿論、講和の時期を、どんな時に選ぶかは、既戦以來、わが首領者たちの直視した眞切な問題とも云ふべきもので、俄敏な外相、小村海軍大臣の風に畫策するところのものである。

既戦と同時に金子堅太郎を米國に派し、また末松謙澄を英國に特派したものの、わが戦争目的の宣傳といふ仕事もあつたが、主なるものは、他日講和の講が起つた際に、第三國の好意ある斡旋を期待する爲であつたのである。

しかし、講和問題を中心とする、政略略の一致の必要は、戦線が進むにつれて、焦眉の念となり、此の際どうしても兩者の具體的の一致といふことが、要路の間に論じられてきたのであつた。

兒玉の上京に先立つて、三月十三日、滿洲軍總司令官元帥大山巖は、滿洲軍の次期作戦の概略として、次のやうな意見書を、大本營の山縣參謀總長に呈した。その中で、彼は極力、政略略の一致といふことを強調してゐるが、これは勿論、兒玉大將や、その他滿洲軍の若い參謀將校たちの意圖

を反映したものであつた。

「奉天戰勝後に於ける戰略は、特にわが政策と一致するを要す。即ち益々進んで敵を急進すべきか、將た又持久作戦の方針をとるべきかは、一は政策と一致するに非ざれば、幾萬の生命を賭して進行せらるべき戦闘も、無意味、無結果に終るべし。わが滿洲軍の任務は敵を遠く滿洲より驅逐するにあり故に、この大任務を達成するためには、鐵血を流し長春を略し遂にハルビンを陥れ、なほ敵を急進せざるべからず。然れども我が政策にしてこれと作はざる時は、この懸軍長驅も畢竟無用の運動たるに過ぎず。若し政策にしてこれに伴ふときは、黑龍江岸まで前進するも、敢て許せざるところなり。要するになほ進んで敵を急進するも、持久作戦方針をとるも、豫め備ふる所なかるべからず。殊に奉天附近より鐵嶺以東に亘る山地を越えて大軍を進めるためには、長結の施設上大なる準備を要す」

當時日本軍は、奉天以北の北滿洲に對する積極な地固を持つてゐなかつた。謀者などによつて出来た簡便な地固はあつたが、これから五十萬の大軍をもつて作戦をするといふには、そんな粗末な地固では役に立たぬ。

また北滿洲一般の認識に就いても、日本軍がどれだけ正確な知識を持つてゐたか疑はしいものがある。

田中少將の「日露陸戰新史」によれば、

「當時日本軍は北滿地方を以て、人類稀有の空漠たる平野なりと判識しありたり。戰役の初期、黑龍江軍管參謀部の著「北滿洲」を入手するに及び、その百萬の兵力を給與し得る補給力ありとの論斷を見所論の眞偽は別とし、とにかく初めて北滿の眞實な味ふに至れり」

とあるが、奉天以北に對する進攻作戦が如何に困難なものであつたか、これでも分ると思ふ。

ロシア敗戦の原因

日本軍が連戦連捷、その地歩を確實に大陸に築上げ、同時に政略と軍略の一致を目ざして、一糸漏れざる統制の下に、戦争目的達成をあくまで期さんとしてゐるに對して、ロシア側は果してどうであつたか。

その司令部は一致してゐたが、また政略と軍略が歩調を揃へてゐたであらうか。それは兩方とも、断然ダメであつた。即ち皇帝の下に總司令官と軍司令官とがあり、その権限は曖昧で、軍令は常に二途に出て統一がなく、しかも皇帝の裁断は全く極東の實情に適合するものであつた。

開戦當時のロシア側の總司令官はアレクシエフで、彼は純粋の海軍人であり、陸軍は一度も指揮したことがなかつた。しかも彼は、本職の海軍でも、主として軍令系統で出世をした男で、全然官職向きには出来てゐなかつた。それで總司令官でありながら、彼は一度も陸軍と共に戦場で砲撃を聞いたこともなく、極東にあつた本營内で、書を讀んだ書齋の中にをさまつてゐたのだ。彼を信用するのは、ニコスラ二世の外には居なかつたのである。

アレクシエフが如何に軍隊指揮官として不適任であつたか、ワイツァ伯回憶記の中に、興味ある話がある。

「一九〇三年（明治卅六年）私が極東視察に赴いた時、丁度旅順でアレクシエフが開兵式を行ふところへ行きあはせた。私も國境守備隊の各隊長の資格で軍隊を運用する身分であるから、この式へ列席することになつた。それにはアレクシエフが騎馬で開兵するであらうから、自分も騎馬で出席する

用意をした。すると意外にもアレクシエフは馬に乗つて来なかつた。後で聞くと、彼は馬に乗るどころか、非常に馬を怖がるといふことであつた。それから彼の軍隊に対する態度に就ても、いろいろの笑話を聞かされた。このアレクシエフが、後には百萬にも増大した大軍の總司令官になるとは、どう考へても正氣の沙汰とは考へられなかつた。

國民は當然、このアレクシエフの總司令官に極度の不安を感じたのである。そこで、皇帝も止むなく任官後一月も経たぬのに、陸軍大臣のクロボトキンと新たに軍司令官に任じた。しかしアレクシエフは故の如く、總司令官なのである。總司令官と軍司令官といふ、権限の曖昧な二つの重要なポストが對立することによつて、ロシア出征軍の不統一と無秩序は當然の結果として發生したのであつた。

クロボトキンは立派な司令官で、その作戦も相當なものであつた。

彼の出發の前夜、ワイツァがその作戦の一般計畫を訊ねた時、彼は次のやうに説明してゐる。「我々はこの戦争に何等の準備もしてゐなかつた。従つて充分に準備をした敵と戦ふに足る兵力を築めるには、今後數ヶ月を要する。されば私の計畫は、わが兵力が必要なる程度に増加するまで、ヘルピンを目標に後退する。勿論、日本軍の進出を手頭とらせるために、遠く數回の交戦をしよう。旅順

は暫く獨自の防禦にまかせよう。それでも旅順は今後數ヶ月を維持し得ることを私は確信してゐる。そして旅順その他から運搬される兵は、ヘルピンに近い一定の地に集結して、これを訓練する。そして後退軍がその地點に達した時、兩者を合して大軍を編成し、同時に攻勢に移つて日本軍を粉砕する。これ以外に、勝利の公算は立たないと思つてゐる」

この作戦は、一見消極的であり、またグラフがないやうであるが日本軍にとつては、最も怖るべき作戦なのである。日本軍は、その時には相當に疲勞してゐるし、兵站線は輻輳數百裡にわたり、しかも補給は僅道一本である。これに對し、ロシア軍は新設の軍團を充分に訓練して置いて、豐富な物資の下に、一舉にして攻勢に移るといふのであるから、これがクロボトキンの計畫通りに執行されたのであつたら、由々しき一大事であつたらう。

しかし、いくらクロボトキンが意氣込んでゐても、この作戦は二人の司令官がなくては出来ないものであつた。

クロボトキンが「豫定の退却」と稱して、損害の少いうちに後退をはじめると、最先きになつて反撃したのはアレクシエフであつた。

開戦當時、ロシア一般にわたつて、想像以上の日本軍進軍の風潮が行はれてゐた。特にその中心とも云ふべきはベゾブラゾフ一派の主戦派であつた。セラフイム僧正の如きは「講和談判は東京で開かれる」と豫言したりした。そして、これらの樂觀説を皇帝ニコラス二世は、そのまゝに信じてゐた。しかも斯うした樂觀説は皇帝ばかりが信じたのではなく、當のクロボトキンすら、日本兵の素質については、全くこれを輕視してゐたのであつた。

開戦當時、彼は前陸相ワソフスキイと會談した時、日本兵一人半に對して、ロシア兵一人を配すれば充分だと公言してゐる。これに對して、ワソフスキイは、日本兵二人に露兵一人で澤山だと云つてゐるのである。彼等の軍事状態に最も精通してゐるべき筈の軍事當局者ですらこの程度の認識だつたのだから、皇帝がこんな空論を眞にうけたのは無理もなかつたのである。

そこで、皇帝の意を避へるのに彼等たるアレクシエフは、クロボトキンの退却作戦に眞向から反對し、あくまでも積極的に出て、旅順を援助することを強く主張するのであつた。

この二人は意見が疎隔したばかりでなく、その後はますます感情的になるばかりで、互ひに憎悪と輕蔑のうちに、對立するのであつた。

タロバトキンは、ワイツアに請つたやうに、あく迄も「豫定の退却」をつゞけるつもりで、とかく意氣沮喪する將兵に向つても「忍耐あるのみ」と説いてゐる中にも、アレクシエフは「叛軍教授すべし、日本兵驅逐すべし」と唱へてゐた。

かうして、ロシア軍の作戦は、相矛盾する二つの命令によつて混亂し、どちらも中途半端に終つたことは言ふまでもない。

そこで、二人とも仕方がないので、最後の決は、いつもベテルスブルグに訓令を仰いだ。戰場に於ける行動は、全く自主性を失つて、全くベテルスブルグの指揮の下にあつたのである。

日本軍が、大本營の外に滿洲軍總司令部を置き、大陸に於ける野戰軍の行動に、便宜に適した自由裁量を許したのは、全く正反對であつた。殊に、大山總司令官と兒玉總參謀長の人格的に結びついた好箇のコンビから生れる、終始一貫して前線の通つた命令系統を考へる時、ロシア軍のそれは、全くナツてゐなかつたと評してもよいと思ふ。

タロバトキンは、後日、

「戦争の前半期に於ける失敗は、主としてベテルスブルグからの電命の結果である。これを説明する

多くの文書は、自分の手許に整理保存してある」

と書いて口惜しがつてゐるが、要するに、ベテルスブルグに於ける皇帝の裁量も、二人の指揮官から發する情報報告が全く違ふのでは、どうしても意味とならざるを得なかつたと思ふ。

殊に皇帝の冒險心をそゝのかすベゾフ・ラソフ一派の主張派と、これに反對するウキツアなどの溫和派の政治上の闘争が激しくなればなるほど、皇帝の判断はいよいよぐらつくのであつた。こうに於て勝利のためには絶対に必要と云はれる、戦時と平時の一致は不可能となり、政治家と軍人の行動は、ベラベラになつてしまつた。ロシアの敗因の、最も重大なる鍵は、茲にあつたと斷じてよい。

わが媾和條件

さて、戦時平時の一致の必要と、媾和のチャンスを一日も早く開くことの急務であることを説くために、突如内地に歸つてきた兒玉は、その目的のために、東夷西走、新舊並らざるなしといふ活動振

りであつた。

勿論、これに對して誰も異議のある者はなかつた。殊に山縣は、兒玉が説きにやつて来る前に、桂首相に書を書いて、

「第三期作戦の計畫に就ては、吾等自ら信するところあり、望むところは政治家がよく國家の大政を確立して、今後数年の戰爭を繼續して、戰國に従ふ者をして、後顧の憂なからしむるにあり……」と云つて、陸軍の最高責任者として戰略の確立を強く要望してゐるが、彼右にである。

軍軍當局から、このやうに言はれてみれば、政府としても媾和の外に策はなかつた。かくて小村外相は、時局の前途に對する極底的意見書を出した。四月八日、桂首相は閣議を開いて、この意見書を中心として論議を求め、その結果「戰爭はなほ容易に終局するものにあらず」として、政府の秘密なる協同を約した。

そして、更に四月二十一日には、媾和條件をとりあへず決め、この目標を明かにして、軍事行動との連絡方法を決めたのである。

媾和條件の概要は、

- 一、滿洲からはあくまで敵兵を撤退せしめること。
- 一、遼東半島和信橋と支那鐵道（滿鐵）をわが手中に執めること。
- 一、軍費を賠償させる。
- 一、神太島その附近島嶼を割讓させる。
- 一、沿海州沿岸の漁業權を得ること。

等々であつた。

この媾和條件は、わが和平條件の模範となるもので、後にポーツマス會議に於て、小村全權が全力をつくして主張した條件も、これを基礎にしたもので大差はない。

しかし、當時ロシアは、いまだ本天賦で大敗を喫しながらも、歐羅巴の精兵を北滿に集中して最後の決戦をねらつてゐるし、ベルチツク艦隊は、全國民の希望の下に、リベウ軍港を發して、東航の途中に在つた。戦局の終りはなかなか豫想出来るものではない。それ故、以上の媾和條件を決定しながらも、閣議決定文書はその文末に「尤も我邦に於ては速戰速決の功を奏したるも、未だ露國の死命を制すること能はざるが故に、右等の要求すら、之を容れしむるが爲には、露國の困難あるを豫期せざる

べからず」と書いて、前途の樂觀すべからざることを、繰りかへし強調してゐるのである。そして、これと同時に、米國を介して講和問題を進めるために、政府は駐米公使に訓令して、平和談判についての、ルーズベルト大統領の意見を求めることにしたのである。

然し、いよいよ第三期戦に對する、最後の政略が確立したとすれば、これに準じた戦略が樹立されなければならぬ。

當時第三期戦に對して、わが大本營が立てた作戦は、大略左の通りで、これを上述の講和條件と對比してみると、その一致は大いに興味がある。

- 一、滿洲軍は従前の任務を繼續し、ハルビンに向ひ前進す。
- 一、韓國防衛の目的の下に、新たに一、二師團を國門江附近に派遣す。
- 一、なるべく速かに樺太島を占領するを要す。なほ状況若し爲し得ることあらば、樺太占領軍の一部を以て、カムチャツカ半島を攻略す。(理由)本島はわが帝國と歴史的關係を有する所にしてその占領は國富を進め、且つ日本海の死命を掌握するに於て必要なり。またカムチャツカは漁業の利至大なり。

これと共に、滿洲軍司令官は「滿洲軍今後の行動は外交の情況に應ずべきなり」との旨を訓令し、政略と一絲不紊る連繫を計つたのである。

そして、奉天戦後の軍容を整理し、砲彈などは四月末には四十三萬發を蓄積し、各軍は奉天より進んで、北方に向つて布陣を完了した。また支那戦とも云ふべき北朝鮮方面には、二ヶ師團を増強し、また樺太占領軍として、新設の第十三師團の動員を行つて、青森に集結を終るなど、着々としてこの作戦方針に基く措置を進めてゐたのである。

この水も漏らさぬ政略時、略の一致の態勢の下に、五月二十七日わが海軍はバルチツク艦隊を日本海に於て突圍なきまでに撃滅するに及んで、遂に露國の戦意は完全に破綻され、こゝに日本としては好條件の、講和の成立といふことが、期せずして出来上つたのである。

日本海海戦の意義が、どんなに大きなものであるかこれで分るが、同時に、政略時略の一致といふことが、戦争に於て、どんなに大切なものかも、これで分ると思ふ。



日本海海戦

バルチツク艦隊東航

日露戦争勃發當初に於けるロシア海軍の極東にある全兵力は、戦艦が七隻、装甲巡洋艦十隻、その他的小艦艇を加へると、その合計は十九萬九千噸に達してゐる。

それが開戦と同時に太平洋を二隻仁川港でやられて、まづ彼我勢力の均衡は失はれ、それから北進一踏で、旅順口は閉塞される、名提督といはれたマカロフは戦死する、黄海海戦で敗れるといつたわけで、その敗色は如何ともすることが出来ない。陸上に於ける敗走つゞきと共に、これでは士氣の振興など、とても不可能であつた。

こゝに於て、ロシアとして、最後の決断が必要となり、新にバルチツク海軍にある、とつて置ききの精銳艦隊を極東に派遣して、残存の旅順艦隊と合して、日本海軍に一泡よかして、戦局をこゝに一大轉換せしめようといふことになつたのである。

明治三十七年五月、露國皇帝は海軍軍令部長心得、兼侍從武官、ロジエストロウエンスキー中將を、

新に編成された、この太平洋第二艦隊司令長官に任命した。

ロジェストウエンスキーはツァーの寵臣であつて、同時に東洋の事柄、果敢なる提督として知られ、ロシア海軍の要人を挽回すべき最後の切れとも云はれてゐた。

八月になると、軍艦クローンスタツトにある艦隊スウォーローフに、司令長官旗は掲げられ、新に修理増強された艦隊は、遂かに極東の空を旋みながら、艦隊の戦術演習を試みてゐる。

そして一方、ハンブルグ・アメリカ汽船会社より数十隻の汽船を雇入れ、これに石炭を満載して東航する各港に配置し、以て石炭を供給するの用に充てるなど、準備をきく怠りなかつた。

十月十二日、遠征に上るため全艦隊はリベウ軍港に集結された。ロシアの希望と自負がこゝにあつた。新編は、艦隊の壮観さに有頂天になり、日本人を愕かすに足りる漆黒な艦隊、黄色の煙突、堂々たる装甲砲塔、兵員の溢れるばかりの士気等々について、連日絶讃してやまなかつた。

十月十四日、皇帝は親しく軍港に臨まれ、二萬強といふ有史以来の長距離を、戦場に向つて馳らうとする、この大艦隊の前途を祝賀され、「露國艦隊の名譽を發揚せよ」との祝言を下した。

ロシア全土の寺院から鐘々と響きわたる鐘の音と同時に、艦隊は抜錨し、一艦また一艦と波高きメ

ルチツク海にのり出して行つた。

出航して間もなく、バルチツク艦隊は、英國漁船衝突問題を起して、全世界の嘲笑を買つた。それは、日本の水雷艦がスカグラツク海峡から英國海峡附近に潜伏してゐて、露艦隊を奇襲せんとしてゐる、との種々たる情報に、すつかり神経過敏になつてゐた露艦は、英國海峡沖で、イギリスの漁船を日本の水雷艦と誤認して、猛烈な砲火を浴びせてその一隻を撃沈してしまつた。夜間ではあり、折から海峽名物の濃霧中であつたので、全く度をつてゐたがためであつたが、このためにバルチツク艦隊は、すつかり艦の軽重を問はれる結果となり、乗組員もクナリ切るといふ始末である。

ひどい目に逢つたのは、英國の漁船ばかりでなく、敵艦機米とばかり、探海燈を照した防護巡洋艦パウローフは、日本水雷艦の探海燈と間違へられて、敵艦の砲撃を浴びせられ、水線上に四面の砲撃を受け、数名の死者さへ出した。しかも、横死者の一人は、従軍僧侶であつたから、迷信深い露兵にとつて、精神的打撃は相當なものだつた。

當時イギリスは日本と同盟國だつたので、新聞はこの事件では筆を揃へて、露艦隊を攻撃嘲笑し、殊にスタンダード紙の如きは、

「今や露國艦隊乗組員は甚しき神経過敏の状態にあるを以て、同艦隊の航海は世界各國民に對して、危険を興へるものなりとの理由で、その航海の續行を禁する必要あり」とまで標言するにいたつた。

この問題は後にパリに於て、列強よりそれぞれ委員を出した國際調査委員會で、結局ロシアは賠償金として六萬五千磅を英國政府に支拂ふ、といふことでケリがついた。

しかし、英國は、とにかくバルチツク艦隊は危険だといふ口實で、露艦隊十隻を滅して、艦隊の後を追つて、監視の眼を光らせて、スペイン沿岸まで伴航した。勿論、同艦隊の編成と行動は、詳細に英國政府と、同盟國日本政府に打聞されてゐるのである。

モツワロのタンジール港で、はじめて英艦の監視を免れた露國艦隊は、こゝで二手に分れ、マダガスカル島で再び合することになつた。それは吃水の深い艦隊は、當時のスエズ運河を通ることが出来なかつたからだ。

四月十四日、太平洋第二艦隊は、佛印のカムラン灣に投錨して、石炭の補給をすませ、同盟國フランスの好意の下に、しばらく休養すると共に、遅れてリベウ軍港を出発したネボガトフ少將の率ゐる

太平洋第三艦隊を待つことになり、五月九日に至つて、兩艦隊は合同した。こゝで久しぶりに士氣を回復し、ツァーの聲も聞くことが出来たのである。しかし、こゝまで来れば、いよいよ日本聯合艦隊と接觸の危険は近づいたわけである。

そこで、ロジェストウエンスキーは、全艦隊に訓辭を興へて、一意艦隊の決意を固めることになつた。

「今やネボガトフ少將の率ゐる艦隊の合同を得て、本艦隊の勢力は陸と匹敵するに至れるのみならず、なほ戦艦數に於ては、我は優勢を得ることとなり、しかれども、日本艦隊は我よりも戰術の經驗あり、戰術射撃の術に長じたり、諸君しばらくもこれを忘れず、急射撃を以て我に加ふることもあるも、我これに倣うて空しく砲火を費すことなく、その照準の正確を期すべし。抑も日本人は、皇室と國家とに對して忠誠無比にして、また不名譽を恐み死を恐れざる國民なり。然れども吾人も亦上帝に誓を捧げれば、上帝は慈愛の御手を垂れ給ひ、今日までの航海を完うせしめられたり、更に深くは吾人の鮮血を以て國の被れる無限の恥辱を雪がしめたまへ」

かうして五十隻に餘る大艦隊は、いよいよ朝鮮海峡にさしかかり、ウラジボスタツクの軍港に向つ

て、一掃決定をはじめたのである。

勿論、彼等は朝鮮海峡突破に於いて、日本艦隊と衝突を避けられるとは、思つてゐなかつたであらう。戦後、本國の査問會に於てロジェストウエンスキー提督は、

「日本艦隊の優勢であること、私は知つてゐたので、なるべく戦闘を避けながらウラジボに入りたいと希望してゐたが、彼等との遭遇は免るべからず覚悟はしてゐた」と云つてゐる點からみて想像はされる。

しかし、ロシア側では日本艦隊の分散をわらつて、誘致策を講じてゐたので、日本艦隊が宗谷、津軽の二海峡をあれだけ思ひ切つて放棄し、全力を挙げて朝鮮海峡に集中してゐたとは思つてゐなかつたであらう。

こゝに日本海海戦の勝利の第一歩があるわけである。

ロシア艦隊も、一戦を覚悟で二十六日の日没頃より、嚴重に警戒しながら、對島海峡東水道を通過しはじめた。翌五月二十七日は露艦の五月十四日に相當し、恰も露艦の威風凛に當るので、その榮光の下に戦はんとするものゝ如くであつた。

日本海海戦

三一五

取舵一杯

明使信濃丸がロシア艦隊を發見したのは、午前五時であつた。霧の中に、二個のランプを認めて近づいてみると、それは敵の病院船であつた。そして夜が明けはなれ、風雲が利くやうになつて、千五百米、彼方に約十隻の敵艦隊の姿と無数の煙を見たのである。

「敵艦隊二〇三隻に見ゆ。敵は東水道に向ふものゝ如し」

との警報に接し、日本艦隊のすべての無電機は猛烈に火花を散らしはじめた。東郷司令長官は鐵海軍にあつた麾下の諸艦隊に總砲火を命じ、それぞれ豫定の部署に就くことを命じた。

「敵艦見ゆとの警報に接し、吾艦隊は直ちに自動、之を撃滅せんとす。此の日、天氣晴朗なれど波高し」

といふ有名な第一報が、まづ大本營に飛んだ。

午前七時になると、内方警戒線の左翼哨艦「和泉」は軌地に敵艦隊と並進しながら、砲々の情勢を

日本海海戦

三一七

大衆明治史

三一六

五月二十七日。

霧雨と激しく騒ぎ立つ波濤の中に、夜は白々と明けて行つた。敵艦スウォーローフの展望臺に立つと後につゞく敵艦「アレキサンダア三世」が流れる霧のきれ間に、ボンヤリと見えた。

ロジェストウエンスキーは早くから艦橋に出て、艦長イダナチウスを顧みて、

「何か新しい報告は」

と聞く。艦長は静かに頭を振り、ちつと灰色の水面を監視してゐる。視界は段々と明瞭になつて行く。二列敵隊をつくりながら、波を駆つて進む艦隊の姿。それは朝日の光の下に、やがてキラ／＼と輝きはじめるやうとしてゐるのだ。

無電機から報告が来た。

「日本艦隊の無電、今や著しく活況を帯び来れり」

ロジェストウエンスキーは艦長を顧みて告げた。

「吾々は發見されたのだ」

大衆明治史

三一八

續かに打電して来た。

「和泉」の石川艦長は當時の感想を次のやうに語つてゐる。

「彼は敵艦長蛇の陣を布き、威風あたりを拂ひ廻りと進航し来り、各艦は煙突を黄銅色に染り、遠路東航中使大法に熟達したとみえて煤煙を出さず。またロシアの軍艦は概して舷高が高いのであるが、當日はそれが甚だ低く見えたのは異變であつたが、これは燃料搭載の過量なる結果であらうか。とにかく敵艦隊に比較して、威風堂々たるその外装を一瞥し、これでは我が艦隊も大分骨が折れるやうに想はしめた」

午前十時、十一時には片岡長官の第五艦隊、東郷正陸少將の第六艦隊がうすれ行く霧雲の中に姿をあらはして、敵の砲撃をうけながら、よく敵艦隊と接觸して、時々時々敵情を報告して来た。

海上は霧氣のため、五里とは視界が利かなかつたが、これらの報告によつて、數十艘を隔てる敵艦隊の標格が、手にとるやうに分るのであつた。即ち、敵の戦列部隊が太平洋第一、三艦隊全部に特徴艦

が七隻あること、その陣形が二列艦隊であること、向、その連力は約十二艘であることなど、詳細を極めた。

そこで東郷提督は時刻と距離を計算して、午後二時頃、沖の島北方で我が主力艦隊が敵を迎へ、その左翼砲先頭艦より撃破しようとの豫定を立てた。

霧は別々に零れては行つたが、波濤は依然として高いので、水雷艇などは波をかよつて航行困難な

ので、水雷艇隊を對島の三通灣に遊撃させ、とにかく主力を捉へて一宮沖の島北方へ急行した。

三笠の艦橋には、聯合艦隊司令長官東郷大将は胸に雙面鏡を帯び、嘗て皇太子陛下より賜つた一文字古扇二尺二寸の軍刀を手にして悠然と立つてゐる。大将は時に五十九歳であつた。その左右には加藤友三郎参謀長、秋山真之参謀が控へ、旗々として南西、水平線の彼方を見張つてゐる。

午後一時四十五分、敵艦隊は豫定の如く、わが左舷南方數海のところに姿を現したのであつた。

日本海軍

三一九

大衆明治史

三二〇

互ひに敵を左舷に見る反航戦となる。利害共に等しいから、戦回としても、平凡に終り相である。それとも特許して、敵の先頭を丁字型に突つ切るか。

日本海軍に於ける丁字戦法は誰でも知らぬものはない位有名なものだが、何も特別にこの時ばかりやつたのではない。黄海海戦でも丁字戦法だつたし、これは日本海軍戦法の定石だつたのだ。

たゞこの日に、この戦法でやるには、あまり彼我の距離が近すぎた。それは朝来ガスが海上一面を蔽つてゐたため、遠望がきかず、敵艦を認めるのが遅かつたため、無いて戦回を企てれば大いに敵弾を浴びなければならぬ結果になる。かうした場合、定石が定石にならず、寧ろ避けなければならぬのである。

幕僚たちの議論に耳も貸さず一心に敵を見つめてゐた東郷大将は、突然右手を眞直に舉げ、左へ振り、参謀長を見た。

加藤友三郎は素早くその意を覺り、

「艦長、取舵一杯」

と叫んだ。

伊地知艦長は、

「エ、取舵ですか」

「さうだ取舵だ」

そして、長官に向つて、

「長官、取舵に致します」

この命令で三笠は急にその艦首を左方に向けて、丁字型に敵の先頭を壓迫しようとした。

わが艦隊が敵前八千、米に於て、大膽不敵なる逐次旋回を試みるや、敵の旗艦に在つたロジニストワエンスキーの幕僚たちは手を拍つて「我勝てり、東郷(せいせり)と叫んだといふ。

とにかく三笠は敵の巨砲の前に全然暴露したのだから堪らない。

スウォーローフは先に火流を切り、敵艦更に一齊に砲門を開いたから、三笠はまだ旋回を完了しない中に、甲板に敵弾を浴びたのであつた。しかも三笠は敢て應射せず「スウォーローフ、六千五百」の報告を聞いて、はじめて第一弾を放つてゐるのである。

そのうちに三笠に似つて逐次旋回をしたわが第一、第二兩艦隊十二隻の精銳は、敵の二陣艦隊の先

日本海軍

三二一

大衆明治史

三二二

頭を、恰も笠を被せたやうに遮り、技に得意の丁字戦法が出来上つた。

こゝに於て、今までの形勢は逆轉し、敵の二列の先頭艦たるスウォーローフとオスラビーヤは、わが片舷百二十七門の巨砲の前に、すつかりその全艦を暴露するといふことになつたのである。

百二十七門の十二吋と六吋の巨砲は、この二艦を目ざして徹撃になれと打出したのであるから堪らない。百雷撃するうちに閃々たる火流と、暗褐色の爆煙につつまれて、二艦の姿はしばらく見えなくなつてしまつたのである。

日本艦隊は、ロシア艦隊に較べて速力は五割ばかり優れてゐた。此の快速を利用して急旋回を敢行した日本艦隊は、更に乙字型をなして、あくまで敵の先頭を壓迫するのであるから、逃げようにも逃げられないのである。

日本海軍の得意とする正確な射撃と、下瀬火薬の猛烈な爆發力は、あくまで強引に食ひ下る戦法と相俟つて、開戦三十分にして、既に勝利に對する誇りした確信を掴んだのであつた。

敵の旗艦スウォーローフは全艦隊の風やうになつて、列外に飛び出す。つゞいてオスラビーヤは猛烈な火災を起して、落伍するにいたつたのである。炎上する船と化したオスラビーヤは間もなく沈没し

て、七百の乗組員のうち五百名は彼に吞まれてしまった。

スウォーローフは旗艦であるから、これが列外に落伍したといふことは、とりも直さず敵陣の混亂を意味する。しかもロジエストウエンスキー長官は司令塔内で重傷を負ひ、失神して倒れたのである。

秋山眞之少将は、後になつて、當時の状況を次のやうに語つてゐる。

「敵がはじめて大砲を切つたのは、午後二時八分で、わが第一艦隊は三、四分これに届き、二時十一分頃になつてはじめて應戦したが、この三、四分間に飛來した敵砲の数は少くとも三百發以上で、これを先頭に立てる旗艦三笠に集中したから、三笠はまだ一發をも放たぬうちに、多少の損害を出したが、距離が遠かつたため大任我はなかつた。それより約三十分で、敵の戦列は全く亂れた。實に皇國の興衰は、此の三十分間の決戦によつて定まつたのである。

三笠以下主力の十二艦は、いづれも我が海軍の當局者が、多年の慘憺たる經營によつて製鐵されたものだが、然もこれを用ふるは、主として僅々三十分の決戦であつた。吾人が十年一日の如く武裝を攻撃しつゝあつたのも、この三十分間の御用に立たんがためだ。されば決戦は僅か三十分であつても、これに至らしめるには、十年の戦備を要したもので、とりも直さず連綿十年の戦争である」

こそ眞に敵の心腹を害からしめたのである。

戦艦ナワリンは二發の水雷を喫して沈み、戦艦「シロイ・ウエリーキー」と第甲艦隊ナヒーモフモノマリアの三隻は、戦闘力と航速力を失つて、波間を漂流する、一城の崩壊と化してしまつた。

五月二十八日。

早朝、ネボガトフ少将の率ある五隻の艦隊は、僅かばかりの抵抗を試みた後、白旗を掲げた。東郷長官は、降伏した將校以上に帯鎧を許した。

この日、思ひがけの手柄を立てたのは、旗艦「連」であつた。午後三時半頃、豊後島西南四十里の地點で、東から運れて來た敵の駆逐艦二隻を發見したので、旗艦「陽炎」と共に極力追ひ、一時間にして戦闘を開始したが、後の方の一隻は白旗を掲げて降伏の意を示した。これが「ペドワイ」であつた。

捕虜員が艦内に乗り込むと、意外にもその一室に負傷した、ロジエストウエンスキー中將を發見した。重傷と見て、武門の情から、ペドワイ中將と重傷を乗せたまま、曳航して佐賀湾に向つたのである。

決戦といふことの意義を喝破した名言であると思ふ。現代では、この他に航空機などが兵器として新たに登場してゐるが、要するに三十分の決戦にして敵を壓倒するといふことが題目であることは、そんなに變つてゐないのではないかと思ふ。

二十七日の夜戦は、夜物を求めて覺れ狂ふ、わが奇襲艦隊の圍り舞臺たるの戦があつた。朝来高かつた波も、夕潮と共にやゝ風いだので、一時姿を消してゐた水雷艦隊まで出動して、隨所に魚雷をもつてする肉薄攻撃を演じてゐる。

攻撃は午後八時十五分、第二艦隊（龍、雷、電、曙）の四隻によつて大砲を切られ、つゞいて各艦隊、水雷艦隊合計四十隻は、全速、全速と叫びながら暗黒の中を探照燈の下をくゞり暴走したのであつた。

わが水雷艦が三隻、敵陣のため撃沈されたのは此の時のことである。

後日捕虜の話によると、當夜の水雷攻撃は實に奇蹟に屬する猛烈さで、わが艦隊が餘りに肉薄してくるので艦隊の遠くない。しかもその距離があまりに近いので、敵艦の死角内に飛び込まれ、照準することも何も出来なかつたといふ。白刃の真下までくゞるのは、實に日本人の得意で、かうした奇襲

嘆古の大戦たる日本海海戦は、丸一夜で全部を終つた。その後も、わが艦隊の一部は、遠く南方に敵を追つたが、遂に隻影すら發見することが出来なかつた。

最初、朝鮮海峡を通過しようとした敵艦隊は三十八隻あつたが、或は撃沈され、捕虜され、退れ去つたもの、露洋艦、驅逐艦、特務艦等僅々數隻に過ぎない。しかも、それらは多く損害を蒙つてあつた。再起不能であつた。わが艦隊の損失は水雷艦が三隻のみ、その他三隻、捕虜など相當にやられてゐるが、今後の任務に支へる程のもの一つもなかつた。實に待つべき大勝と云はねばならぬ。

東郷大將は大本營に對する戦況報告文に於て「天佑と神助により」戦勝を獲た事を、誌辭から遣り出る言葉を以て綴つてゐる。

「此の對戦に於ける敵の兵力、我と大差あるにあらず、敵の將卒も亦、その祖國の爲に極力奮闘したるを認む。而も、我が聯合艦隊が能く勝を賦して、前記の如き奇蹟を収め得たるものは一に

天皇陛下御威の致すところにして、固より人爲の能くすべきにあらず。特に我が軍の損失死傷の伴ふなりしは、歴代神靈の加護によるものと信仰するの外なく、遂に敵に對して勇進敢戦した將卒も、此の成果を見るに及んで、唯感激の極言を所を知らざるもの、如し」

この文案は秋山参謀の筆になるものといはれてゐるが、筆が書いたにせよ、此の感傷の文は全艦隊将卒の心の底から溢れ出る叫びそのものだったと思ふ。

ロジエストウエンスキー中将は、その後負傷を受けて故國へ歸つたが、この戦争に就いては、ネボガトフとは反対に、死ぬまで沈黙を守り通した。(彼が死んだのは、野島沖の悲劇の日から、僅か二年半ばかり後だ)

ネボガトフは、イギリスの新聞を藉りて、くどくどと自己辯護を繰返してゐたが、ロジエストウエンスキーは、どんな新聞社や通信社の感傷にも口を減してゐた。たゞあまりしつこく訊かれると、「敗戦の真相？ それは簡単な話です。敵弾は命中したのに、こつちのは命中しなかつたからです」と、冷やかに笑ふのであつた。

海上権力の喪失、それはいつでも戦争の敗北と終局を意味してゐる。機動的に海上で打ものめされ、ロシアは、茲にはじめて講和の土ひなきを覚悟したのである。

海軍大臣ビリレフは、ウイフチに向つて、

「艦隊のことはもはや言ふに堪えない。日本は今では極東に於ける完全な主人公である」

と云つて俯いてゐるが、日露戦争もこのに於て勝敗の数は決つたと見るべきである。

ポーツマス會議



小村吉太郎

小村全權の苦衷

明治三十八年六月十日、わが政府は米國大統領ルーズベルトの講和提議を正式に受諾した。これと前後して、ロシア政府もこの提議を受諾することになり、講和の問題が漸く具體化することになった。最初、講和談判地について、わが國は芝罘またはワシントンに主張したが、露國はその同盟國の首脳バリーを主張し、結局大統領の調停によつて、ニュー・ハンプシャー州のポーツマス軍港と定められた。この地は人口一萬内外の閑散な小都市である。

軍港であるため警備がよく行き届くためと、夏に向つて涼しい土地であるといふので、このポーツマスが歴史的な日露講和談判地として選ばれたわけである。

七月三日、全權委員として外務大臣小村吉太郎、米國駐日公使高平小五郎が任命された。隨員として、この外に豪傑の名高い、外務省政務局長山本武夫、公使佐藤愛蔵、書記官安達善一郎、秘書官本多陸太郎(現駐米大使)デューソン顧問、それに陸軍から立花小一郎大佐、海軍からは駐在武官

として、渡米中の竹下勇大佐が専門委員として参加することになった。

小村全權の使命が、どんなものを前途に控へてゐたか、心ある者はよく知り快いてゐた。元老の井上馨は、小村が乾念にやつて来ると、その手を固く握つて、

「君の立場は大變苦しいものだ。今までの名望も、こんどの談判で覆されるかもしれない」と、同情の意を表し、伊藤博文も心からその使命の困難なるを察して、

「君が歸朝のときには、他人はどうあらうと、吾輩だけは必ず出迎へに行く」と、告げてゐる。

七月八日、小村全權は桂首相と共に馬車に乗り、新橋驛に向つた。沿道に歡迎する民衆の歡呼はさながら凱旋將軍を迎へるやうな盛大なものであつた。

（資金も洋山とつて来るだらう。樺太全島割譲、いや南滿洲もこつちのものだ）さう云つた空氣の中に、國民は小村全權の出發に多大の期待をかけてゐたのである。中には、講和會議などまた時機尚早だ、バイカル湖畔までも露兵を驅逐すべしなどと、氣憤をあげてゐる者も、國民の中には少くなかつたのだ。

怒濤のやうな歡迎の中で、小村はいつもの蒼白な笑顔を桂首相に向けて、

「これで自分が歸つて来る時は、國民の人氣は正反對になるだらう」と語つたが、桂は悠然として、語がなかつたと云ふ。

その日の午後、全權一行は、米船ミネソタ號に乗つて、横濱港を無難に通過した。

航海十三日、一行はシアトルに上陸。當時は無電が幼稚だったため、二週間の航海中は、全く情報から離れてゐたが、シアトルに着いてみて、はじめて露國側の全權がワイツタに決つたことを、電報で知つたのである。ワイツタならば、とにかく世界的に名の知られた政治家であるから、相手に懸すのに不足はないわけである。

シアトルの埠頭には、市長をはじめとして歡迎委員が出迎へ、また三千人と云はれた在留邦人は手に手に日の丸の小旗を振つて迎へるのであつた。

二十日の夕方、全行に乗つて一行はニューヨークに向ひ、二十五日に着いてゐる。その途中、一行には忘れ得ない挿話があつてゐる。

それは汽車がロッキー山脈中の成る寒村にいた時だ。早朝で、まだ朝の霧が、しづかに驛の構内

を包んでゐた。

全權の乗つてゐた展望車の後に、見るからに田舎者の身なりをした屈強な體格をした五人の日本青年が、妙な恰好の旗をかきつけて現れて来た。嬉し気に、夢中になつて、その旗を振つてゐる。

隨員の一人が訊ねると、彼等はこの小群から二十哩も離れた森林で働いてゐる樵夫であつた。全權一行が通過すると聞いて、急いで立木の枝を振つて字とし、あり合せの白木桶で日の丸をつくり、これを旗で夜を繼いで歩いて、この驛まで送りついたのであるといふ。

展望車のデツキまで出て来た小村全權は「有難う、有難う、よく出て来てくれたね。連者で、みんな仲よく働いてくれよ」と云つた。

「ハイ」と、賑々しく答へながら、五人の若者は低く頭を下げてお辭儀をしたが、やがて頭を上げるのを見ると、双頬を涙でぬらししてゐる。列車が懐しく進行し出すと、この五人の若者は、また盛んに旗を振つて後を追ひ、やがて朝霧の中に、姿を没するのであつた。

車中にかへつて、小村全權はソファに腰を下すと、如何にも感に堪へざるが如く、

「あゝ、日本人だね」と、いつもの低聲で呟くのであつた。それからまた黙々と、いつもの理想に入り、しづかに期するものがあるが如くである。

ボーツマスへ乗込む

小村全權に送れること七日、八月二日に露國全權ワイツタ一行は、ニューヨークに着いた。ワイツタはその手記で語る。

「予は、まづ米國輿論をうまく利用するのに全力を傾けた。わが乗船が練習につくや、露國する新聞記者に、一々握手して、出来るだけ愛想よく振舞ひ、ステーツメントを手交した。また上陸してからは、どんな身すばらしい記者でも、訪問してくれば會つてやり、煙草を興へ茶をすゝめ、萬事アメ

リカ式に、對等でものを言つた」
自慢たらんぐである。

彼はまた、こんどの講和談判に臨む自分の行動の基調として、次のことを自ら決めてゐる。

「一、どんなことがあつても、我々が講和を望むやうな態度を見せないこと。ロシアの皇帝陛下が自分を全權に任命したのは、別に講和そのものに重きを置いたわけではなく、周囲の諸國が一般に戦争の態勢を好まぬやうだから、その意を容れたに過ぎぬといふ態度を示すこと。

二、自分は大國ロシアの全權であるといふ顔をして、大きく構へること。大國ロシアは最初からこんな戦争を重要視してゐないから、その勝敗については少しも痛痒を感じない態度を示して、相手を感じさせること。

三、アメリカ、特に経商では、ユダヤ財界と新聞の勢力の強大なことを打算して、少しでも彼等の不快を招くやうな舉動のないやうに細心の注意を拂ふこと」

要するに、ワイツァは自ら態度もなく書いてあるやうに、海千由千の古體であつた。この尊大にして老練なる相手を向うに廻しては、智慧と胆の塊と云はれた小村海軍大臣も、相當な苦戦は覚悟しなければならなかつたであらう。

日露兩國全權に對する大統領の公式引見及び引合はせは、八月五日、オイスター路上、大統領の快

ボーツマス會議

三三六

大衆明治史

三三六

走馬メーフラワー號で行はれた。

着来、即といふので、日本全權がさきに引見された。廣間で待つてゐた大統領は、小村全權の手を握つて、

「お、私の舊友がやつて來られた」

といつて、極めて打ちとけた歡迎振りであつた。舊友と云つたのは、兩名ともにハーバード大學出身だからである。

やがて、ワイツァの引合せが済むと、ルーズベルトはシャンパンを杯になみくくと注ぎ、

「一言御挨拶を述べます。別に答辭は必要としません。兩國の元首及び國民の福祉のために戦陣し、公正且つ恒久的の平和成立を、兩國並びに世界文明の將來のために心から懇願するものであります」

と昂然たるものがあつた。日露戦争の講和を仲介するといふことは、政治的にルーズベルト大統領の名譽を、ますます國民の間に高めるといふことになる。大統領としても、條約の成立のためには、一生懸命なわけである。

大統領と談れると、兩國全權は各々ふり當てられた米國軍艦に移乗して、ボーツマス軍港に向つた。

日本全權の乗用艦は、ドルフィンといふ小型巡洋艦であつた。海上は荒れてゐて、操縦が立派なものである。一行は船酔ひなどしてゐる暇もないほど忙しく、本國への報告や會議の作戦に頭をしぼつた。

船に乗りワイツァは、途中から陸路に乗りかへて、ボーツマスに向つた。ボーツマスに着いたのは八月八日であつた。美天の中を兩國全權は十九日の夜たる體面に迎へられて、上陸し、工廠内の午餐會、州知事のレセプションなどがあつて、翌朝になつて郊外六哩の地にある、ウニントウオース旅館に着いた。

なにしろボーツマスは軍港だけで他には州廳があるだけの地方都市であり、ホテルと云つても緑な設備があるわけではないのだ。そこへ兩國全權や世界各國の新聞記者、さては物見高いアメリカ人の避暑まで殺到したのであるから、その混雑は一通りではなかつた。

到着てられた皇も、宿望ばかりで事務室などの用意はない。そこで大きな寢室を急いで改装して事務室に當て、テーブルを連繋でつくり、電話を大急ぎで陳設するなど、職員はその晩から大活動をはじめた。本多前太郎氏など、この晩はサンドワイツァを相俣りながら徹夜をして、數十通の暗號電報を片づけたといふ。

ボーツマス會議

三三七

大衆明治史

三三八

この二時間で事務室を急造したことは、電信會社出張員の話から、その夜のうちに米國新聞記者の特ダネとなつて、翌九日のボストン、ニューヨーク、シカゴの朝刊は大々的に見出しで「日本人の組織力」として詳しく報道し、ロシア側事務室の鈍重、混雑さに較べて、こゝに日露戦に於ける日本側の勝因があるなどと、論評をさし加へた新聞もあつた。

講和談判の本會議は、十日の午前十時から開かれ、小村全權から十二箇條よりなる、わが講和條件簡潔書を提出した。

紛糾また紛糾

日露戦争の下層會議にやつて來た支那全權の李鴻章は面無表情な大男であつたが、ワイツァも大男の多いロシア人の中でも、すば抜けた大男で、六尺は優に越えてゐた。

これを、胸の悪い小村全權の瘦身短體に較べると、どちらが戰國國の全權か分らないやうな印象を與へた。たゞ小村は舉措端正で、何處となしに烈々たる闘志を藏したといつた點で、相手方に警戒の

念を起させたのである。

若い時に飲んだウオツカのためか、ウイツアの鼻の生きは赤くなつてゐる。引つきりなしに煙草を吸ふのが、フツツクのチヨウキの上にしきりに落ちる。しかもそれを少しも氣にかけぬ風に、しきりに自説を述べ立てる。堂々たるところはさすがに露國の元老政治家の真味を示すものがあつた。談判がはじまると、ウイツアの増大に構へた態度は、事ごとに日本側の神経を苛立たせるばかりであつた。

憤慨した小村は、

「君はまるで露國の代表者みたいなことばかり云ふではないか」

と詰ると、ウイツアは傲然と、

「まだ露國もないのに、どうして露國があるのか」

と嘲く。

「陸に連戦連敗、旅順奉天を陥され、海に艦隊を全滅させられても、露國とは思はないのか」

「戦争はまだこれからである。ハルビンに集結中のわが軍は一段と強化され、今や攻進の用意全く成

ボーリッマス會議

三三九

三、取捨を全權の裁量に委せる附加條件。

樺東に於ける露國海軍力の制限。

滿洲港の武装解除。

わが方の條件簡略書に對する露國側の回答書は直ちに出来されて、會議は遂に閉議に入つた。わが根本的要求たる滿洲問題に就ては、大體に於て先方も觀念してゐたが、それでも何だかんだと附加條件や文句をつけて、ねばるのであつた。

殊に問題となつたのは、東清鐵道の讓渡問題であつた。ウイツアは、

「該鐵道は東清鐵道會社といふ一私法人の財産である。だからロシア政府としても、これをとり上げて、日本に讓渡することは出来ない」

小村も執拗に、

「この鐵道は戰前より、日本に對する脅威を構成してゐるのであるから、將來の平和のために、是非ともこれを日本の手に収めなければならぬ」

と主張するのであつた。

ボーリッマス會議

三四一

大衆明治史

三四〇

つた。その莫大なる兵力と云ひ、充實せる兵備と云ひ、露國の歴史はじまつて以來の優勢を保つものであることは、リネウキツチ大将の報するところである」

これでは、なかなか論事も進行しないのである。

わが方が提出した十二ヶ條より成る要求は、六月三十日の閣議で決定したものに、聖裁を仰いだもので、これは大體次の三つに大別される。

一、買徴を期すべき絶對的必要條件

滿洲より露兵を撤去させる。

遼東半島電信權及東清鐵道兩部支線（ハルビン旅大間）の讓渡。

二、買徴に努むべき比較的必要條件

取捨簡便。

中立國軍人露國艦艇の交付。

サガレン（樺太）及附屬諸島の割讓。

沿海州漁業權の獲得。

大衆明治史

三四二

しかし、ウイツアは、あくまでこの鐵道は私利財産だからと頑固つて譲らず、論争數回いつ果ても分らない。遂に小村は、最後の雄辯を投げ、露清秘密條約をスツバ抜いたのである。

「貴君はあくまで一會社の私利財産と主張されるが、われわれが得た正確なる情報によれば、そもそも東清鐵道なるものは、一八九六年モスコに於て調印された露清秘密條約を根據とするものではないか」

とやつた。

この秘密條約は露清の總廷式に參列した李鴻章と露國外相、ロベノフ公卿との間に調印された、日本に對する露清の共同作戰を決めた露清同盟條約であつて、ボーリッマス會議の僅か數ヶ月前、露清側から決めたのを、わが北京公使館で全文を入手して、小村全權の手許まで英譯の條約文が届けられてゐたものである。

「この條約によれば、本鐵道の目的は露國が清國を援けるための軍隊を輸送するためと明記してあるが、これでも、貴君はこれを民間の一私有財産と主張されるのか」

舌鋒鋭くつめよる小村の言葉に、ウイツアは蒼白になつて、悪事もない。まさか、秘中の秘たる同

「日本側は、日本側に委譲知れたつてゐるとは思はなかつたのである。」

ワイツアは止むなく、會議の速記を中止せしめて、この秘密條約の内容を發表せしめるところがあつたが、金所を覆かれた意味は最後までたゞり結局、長春、以南大連までの東清鐵道即ち南滿洲鐵道は日本の手に歸したのである。わが大政の大動脈は一本、茲に於て始めて振動することになつたのである。

かうしたわけで、先に挙げた絶対必要條件たる一の要項は、わが主張は貫徹したが、二及び三の條件に至つて、會議は紛糾に紛糾を重ね、南滿洲の漁業權を譲渡すると云ふ以外、全部拒絶し、殊にわが方で重大視してゐた樺太及び賠償金の問題では、はじめから相手にしないのである。

「樺太は今日まで取返には進まれてはゐないが、城下の面を餘儀なくされた取返固ではない。償金や割地などと云ふ條件は、日本軍がベテルスブルクまで進軍して来たなら、御相談に應じよう」

小村はこれに對しては、
「率直に云へば、明治初年、日本は樺太を、露領千島と交換して以來、樺太の露國による領有を、わ

が國防の脅威と感じてゐるのである。その結果、今度の戰爭でこれを占領したのであるが、これが回復は今や日本國民の牢固たる意志となつてゐる。また賠償に就ては、我方の水むるものは官費の拂ひ戻しに過ぎぬ。かゝる官費の支拂に應ずるのは、戰敗國に課せられた償金支拂などとは異なり、少しも屈辱を意味するものではない。」

と反駁し、その試案を便して止まなかつた。併し露國側はあくまで頑強つた。皇帝がワイツアを慰撫するため打つた電文には、「一時の地も、一ループルの金も日本に與ふるべからず。何ものも、余をして之より一步をたに譲らしめ得ない」とあつた。決裂の時機は迫つたのであつた。

條約成立す

小村全權は斯かる情勢の下に一大決心を固め、

「議和は最早殊途の途なきに至つた。露會はリネワイツア總司令官等の報告により、露軍が優勢にして戰後一轉の望みあるものと確信し、此の應酬和をなすの意を結つたものゝ如くである。而も今にし

て樺太及び軍費賠償の二問題を懸案することは、日本帝國の榮辱に關する重大問題である……」
との見解の下に、詳細に情勢を述べ、講和決裂の責任は一に露國に在る旨を宣言する用意ありとの最後の決意を、政府に打電した。

そして公私一切の荷物、ポーツマス市の款待に感謝する意味で、同市の慈善事業に米金二萬弗寄附の小切手を用意するなど、引揚げの萬端の準備を終つて、本國政府の最後の回調の到着を待つた。

政府では重以元老會議を開き、二十八日附の回調が午後一時過ぎに到着した。
「貴電に關し文武重臣開會の會議に於て、慎重に議を議したる結果、開戰の目的たる滿洲關係の重要問題が既に満足なる解決を得たる以上、たとへ軍費及び割地の二大要求を不幸にして實現するの已びなきに至るとも、尙ほ此の應酬和の成立を期することは、軍事上及財政上の事情に於て絕對の必要ありと認め、即ち此の機會を逸せず是非とも講和を成立せしむべし」と云ふに評議一決し、勅諭を得いで致に訓令する次第である」

此の回調を讀み上げた瞬間、その場に居た隨員も、わが特派記者も、聲を放つてはかざるはなかつたと云ふ。

これより先、本多經吉はその回調の譯文を持つて、直ちに全權の室を訪れた。本多氏は語る。
「私は殆んど胸をあげて大涙を見上ぐるの勇氣すらなく、歎息しながら之を讀み流した。若米以來の過勞を餘程感じて居られたと見え、小村さんは長椅子に仰臥し沈思に耽つてをられたが、珍しくさうした姿勢のまゝで之を受取られた。此の痛憤半極の電調が小村さんに與へたらしき、反應は極に自チコツキの上部にホンの微動が見受けられたのと、默然としてサインし、默然として運され、いつものやうに其の場を何等の喧嘩がなかつた一室である」

しかし、沈黙は五分ばかりして破られた。元氣よく立上つた小村は、ベルを押して山崎局長を呼び戻し決然たる翌日の會議の作戦を練るのであつた。

その晩の食堂には、さしも談論風雲の山崎局長も、表氣憤懣の立花小一郎大佐も、がっかりしたのか姿を見せず、淋しいものであつた。たゞ小村全權だけが、いつもの歌々たる調子で、顧問のギョソンを伴れて、靜かに談笑してゐるばかりであつた。

翌朝、ホテルの玄関を出て馬車に乗りこむと、小村は傍らの山崎を顧みて、
「今日は徳川だぞ」

といつて、笑ふのであつた。

會議は豫定の如く、すらすらと進行して行つた。日本の重臣閣僚會議で決定した安福系「樺太半島、領土割譲」はウイツテも承認することになり、こゝに於てさしも世界の輿論を驚かしてゐた日露間の懸案も安堵したのである。

引きつゞいて休戦協定の成立、撤兵問題などの條件もベタ／＼と決定し、九月五日の午後三時四十分、兩國全權は講和條約文及び附屬文十二通にそれぞれ署名を修つた。

折から十九日の祝日は設けずとして天に謝し、海には汽笛、街には教會の鐘が鳴りひびき、平和祝の聲は、ポーツマス全市に響がつたのである。

この條約の總評として、ルーズベルトは九月一日附でその密友に送つた手紙の中で、

「日本が樺太の北半を棄てたのは、棄てずに済んだものを棄てたものと思はれる。これは確に自分が日本のために取つてやることの出来たものと思ふ。併し大體から見れば、まづ満足と云ふべく、講和條件は實に日本にもまづ相當のものと思ふべく、また英國にも米國にも好都合と思はれる」と書いてゐるが、自棄自棄、その満足の色を見るべきである。ルーズベルトは一貫して日本最良で

ポーツマス會議

三四七

ハリマン協定の打破

十月十六日朝、小村全權一行を乗せた船は横濱港に入つた。折柄米朝談判中であつた英國東洋艦隊と帝國軍艦から放つた砲火たる砲撃は、秋雨に煙つた横濱の空に響いた。

同日艦隊の入港を祝して、前日から全市を埋めてゐた國旗は、この時一齊にとり下げられてしまつた。これが小村全權を迎へるに當つての國民的意志表示の第一歩だつたのである。

然として小村は舊國の姿を眺めてゐたが、やがてランチで外務省から珍田次官、林駐韓公使(權助)が船に乗り込んで来て、歡迎の挨拶を述べ、つゞいて或る重大なるニュースを傳へると、見る見る小村の表情は硬直して行くのであつた。國民の望の如き非難攻撃はまだ堪へることが出来る。しかし、このことだけは小村は日本人として難耐出来ぬ、さういつた表情なのである。

重大ニュースとは、即ちハリマン協定である。即ち小村の留守中に日本を訪れて大歡迎を受けた米國の國務王ハリマンは、うまく元老や内閣の連中を丸めこんで、日本が折角ロシアから得た南滿洲鐵

ポーツマス會議

三四九

大衆明治史

三四八

あり、その勢は今日のわれわれと雖も多しなくてはならないが、現實の米國の輿論としては、講和當時と講和談判の時とは大分變つてきてゐるのである。

開戦當時は「負け犬」に味方するといふ米國人心理で日本を攻撃したけれども、その日本が思ひの外に強くてロシアを完膚なきまでにやつ／＼けるのを見ると、今度は日本に對する強い警戒心が生れて来たのであつた。「日本に強くなりなればは、極東に於けるわれわれの權益は、ロシアに代つた日本

の脅威の前にもさらされる」と云つた意向は、アメリカのみならず、英國方面に強く起つたのである。樺太割譲や領土問題で、日本が最後のドタン場で、あらゆる方面の牽制を受けなければならなかつたのは、實に斯うした英米の策動によるものだと考へられる。

小村全權は舉國的不評のうちには歸國しなければならなかつたが、當時の國民にはかうしたことや日本

の實力に就いては、殆ど知らされてゐなかつたためである。

尤もウイツテも、樺太南半分を譲つたといふので、歸國後彼の政敵から「樺太南半分割譲」と評名

されてからかはれてゐる。しかし、彼自身は、その手記の中で、ポーツマス條約は自分の大手筆として誇つてゐるし、ロシア官邸も彼に傾いてゐるに、前例のない待遇を與へ、特に伯爵を授けてゐる。

大衆明治史

三四〇

道を、日米共同經營でやらうといふことになり、首尾よくその豫備協定を桂首相との間に結び、行き違ひにハリマンは歸國中とのことである。

當時の日本は戦後の財政難で大の車の時であり、南滿洲鐵道の買の償値も知る由もなく、二億半ばかりの金で、すつかり目をまはし、米國對國の極東經營といふ遠大なる謀略に、誰一人として氣がつか

なかつたのである。小村は椅子から飛び上らんばかりにして、

「さうか。そんなことでもありはせぬかと案じたから、俺は阿蒙も起たぬ病氣を掛けて歸國を急いだのだ。こんなことをやられては、十萬の同胞の血を流し、百難を拂して漸く贏ち得た滿洲進出の大勳

眼を、結局赤兒の手をぬぐるやうに暴々とアメリカに持つて行かれてしまふ。よし、俺は早速これを叩き潰すぞ」

小村は歸國の船中で、遺言と稱して、『滿洲經營要綱』といふ一頁の意見書を書き上げた。

日露戦争をして直に有終の美を爲さしむるもの、それこそ日本民族の大大陸進出にありと固く信じてゐた小村にとつて、滿洲問題の解決こそ、その生命であつたのである。この書を書き上げた時、小村

は本多卿太郎氏に「横濱で私が爆弾でやられたら、あなたは此の書類を無事に保護して東京に歸つて桂首相に届けて下さい」と云つて、その寫しを手渡してゐるのである。ハリマン協定の成立を聞いて、小村が嚇怒するのは當然だらう。

小村外相はそれから官中に参内し、謀んで使命の復奏を終つて退出するや、即日桂首相をその官邸に訪ひ、ハリマン協定に對して、斷子反對なる旨を述べ、つゞいて財界の最高責任者と目されてゐた元老井上馨のところへは三日も通ひつゞけて、これを説破するのであつた。

井上にしてみれば、それほど事態を深刻には考へてゐなかつたのだ。日本とアメリカが共同してシングレットを組織して、アメリカの財力によつて、滿洲沿線の炭坑などを開發したら、その方が俄に痛まなくてよいではないか、といつた考へである。

一度扱ひついたら、悉ゆるものを自己の利益とするまで離れない、戦艦のやうな國際資本、ドル外交の本質について極めて極端なのである。

やがて滿洲はアメリカ資本のために、がんがらめに轉られて、日本のものでありながら、日本は指一本さすことが出来なくなるのは、火を賭るより明かなのである。

小村外相の無謀と無類は、元老をしらみつぶしに説得し、遂に一度び決定したハリマン協定を破棄することに成功した。

十月二十七日、ハリマンが桑港に着くとそこに待ちうけてゐた上野衛事はこれを船室に訪れて、協定取消のメッセージを手交された。苦惱を噛みつぶしたやうなハリマンの表情は、やがて猛烈なる復讐となつて現れてきたのである。有名な錦堂鐵道計畫、米國國務卿ノックスの滿洲鐵道國際化の提案などみなこの現れである。

しかし、これらも、その後の小村の強硬外交で叩き潰されたが、極東に對するアメリカの執拗なる關心と不愉快なおせつかいは、その後も依然として、今日に及んでゐることは、國民周知のことである。

しかし、とにかく日露戦争の結果として、日本は今や大陸政策遂行の據點と進路を占めることが出来たのである。アジア解放戦の前哨戦としての、日露戦争の意義は、この上なく大きい。それは單に小村外相とか、伊藤博文、桂太郎とかの個人的な働きによるばかりではない。

明治史を通じて、われわれが力強く看取される、新興日本國民の伸びんとする實力と努力が、その

まに昇華して、この成果を擧げることが出来たのである。時に、明治は終焉に近かつたが、新しい興えられた日本の方向は、今日に至つても尚、滿洲の開發を續けてゐるわけである。



明治の終焉

戦後の地位

日露戦争の勝利は、東亞に於ける日本の指導的地位を、全世界に對して示す第一鞭であつた。死傷は好むと好まざるとに拘らず、日本の國威と、その東亞に於ける發言權を認めざるを得なかつた。

ロンドン・のスペツァリター紙は、戦後の日本を論じて、「この新興國は、歐洲の最強と稱せらるゝもの」を打倒し、その陸海軍を稱雄し、西洋第一流の名將も、相對しては遠征すべき精銳五十萬を、アジア大陸に於て轉戦する能力あるを證せり。今や何れの國と雖も、その存亡を請するの決心なくして、日本と衝突を交ふるの不可なることを覺らしむ。蓋し、同國は既に北太平洋の雄にして、多年北京に於て優越なる勢力を振ひ、世界の中、最も未開の大市場たる清國に於て、貿易その他事業上に於て吾人の最も有力なる競争者たらん」と述べてあるが、その隆々たる前途は、識者の等しく認めるところであつたのだ。

明治時代を通じての二大戦争たる、日清日露兩役が如何なる意味で戦はれたか、それは韓國の獨立

を保護し、半島に伸びる第三國の摩手を、われ／＼は日本の生存權に對する直接の脅威と認められたがために、國威を賭して戦ふこと二回に及んだのである。今後は永遠にこんなことがあつてはならない。それは日本の東亞に於ける地位から云つて、崇高なる義務でもあり權利でもあつたのである。そのため、日露戦争が終り、日本の宗主權が認められると、伊藤博文は總督として京城に赴き、大いに新政一新を計つた。農事の改良、道路の改修、各種學校の新設など、伊藤は嘗て日本の近代化の覆れた後師であつたことを、韓國に於ても示したのである。半島の近代化は若々軌道に乗り、日本の東亞に於ける地位は一段と強化されたのである。

嚴島會談

明治四十年の春の一日、伊藤總督は嚴島の紅葉谷別荘に在り、折から訪れて来た南滿洲鐵道總裁、後藤新平と三日間にわたつて大論戰をたゞかした。

伊藤も後藤も共に言ふことは大きい、しかも胸臆を吐露しての談論だったので、後藤の激語、伊藤

の罵詈など時に室外にもれ、何も知らぬ女中など、「何と酒醉のわるい人達だらう、紅腕喧嘩ばかりしてゐる」とさうやいたほどであつた。

後藤が三日三晩にわたつて説きつゞけたのは、日本の外交政策の確立、ことに大陸政策の將來であつた。

「閣下の念は、列支、及び對露根本政策を立て、百年の長計を定めるにあることは、申すまでもありません。しかもその重大なる事に當り得るもの、實に國家の柱石にして一代の重擔を負はるゝ閣下を指しては外にありません。閣下、若し愚見に御異存なくば、まづ韓國統監の地位を去り、朝鮮皇を捨て、一個の親戚家として、支那に遊び、さらに強國を請れて、その後家と共に、東亞の長計を説じられては如何です」

「自分は近く統監の職を、會領定地に譲るつもりであるが、君の云ふ親戚説話によつて何の謝果があるといふのか」

後藤はこゝとばかりに脚を進めた。

「閣下まづ支那へわたり西太后に面談し、大アジア主義によつて、東洋人自らの手で東洋の再建を計るの議を進められたならば、西太后は必ずこれを慶賀王、袁世凱に譲るであります。閣下また彼等と會見して、世界の趨勢を説かれ、彼等を啓蒙されれば、東亞の大計の樹立されること、私の信じて疑はぬところであります」

外交については一雙眼ありと自負してゐる伊藤のことだから、その言葉の熱ならないうちに、早くも反駁をはじめた。

「君の云ふ大アジア主義といふのは何かね。自分は初めてきく言葉だ。國際の實狀を察せず、かゝる言を弄するならば、彼等に萬端論のいゝ口實を與へるやうなものではないか」

「いや、大アジア主義は恰も米國のモンロー主義の如く、自衛の目的に出るものです。もし云ふところの萬端論の因をなすならば、モンロー主義は米國論の因をなさねばならぬ。モンロー主義だけを認めて、大アジア主義を認めぬといふのは、彼等がたゞ都合が悪いからであります。主義が悪いのではなく、日本の實力と外交が確立しないから、外人がこれを認めようとはしないのです……」

後藤新平の熱論は、この大アジア主義をめぐつて、列強の動向を分析してゐるところがなかつた。

今日では大アジア主義と云へば誰でも知つてゐるが、當時に於ては、さすがの伊藤博文でも、奇蹟の言としか受けとられなかつたのである。論議三日、伊藤は、

「熟考の上、實行を考へよう」

「山縣、樺の二元老にも、今夜の議論は暫つて他言いたしません」

といふので終つた。

翌明治四十一年、向島にある伊藤の別荘に、再び後藤は呼ばれた。後藤は當時、逓信大臣であつた。

伊藤は、

「支那の形勢も、世界の形勢も、般島會談當時に較べると大いに變化した。我輩も統監を辭して朝野を説いた。そこで、君の云つたやうに國外に乗り出さうと思ふ。勿論、これが博文、最後の御奉公と思ふが……」

そこで言葉を切り、さらに、

「そこでまづ支那のことだが、支那は西太后の没落と共に中心勢力を失ひ、群衆暴動の状態で、とてこれを相手に、東洋の根本筋は定められん。因つて、自分はヨーロッパ列強を廻つて、その諸者と

語り、日本の將來を考へたい」

「國家のため、喜びに堪えません。しかし、溥儀と外遊されるより、極東に於て大關係あるロシアに赴かれ、かつ現在ロシアで最も勢力ある蔵相ココツエフに會見されては如何でせう」

「それはよい思ひつきだが……」

「ココツエフのことならば、私が彼に二書を送り、ヘルピンまで出張することを促せば、必らずやつて來ます」

「本宮に彼は來るかね」

「どうか、私におまかせ下さい」

それから二十日も経たないうちに、ココツエフから「快諾」の電報がとゞいた。

伊藤はこれを読んで破顔一笑、

「いや、君の大風呂敷も、たまには大物をつゝむんだね」

と、上氣味であつた。

伊藤はすぐヘルピン行きを用意にかゝり、船券を得て出發したのであるが、七月十五日ヘルピン開

頭で、鬼彈を胸にうけて死んだ。

伊藤は安政三年、十六才で長州藩の足輕として勤番してから、明治と共に生き、

明治と共に死んでゐる。しかも、その最後を飾るにふさわしい場合を得て、正に歴史的な終幕と云へよう。しかもその胸中にいだいてゐた、大亞細亞の運命圖は、今日われわれが、まざまざと眼前に見るところのものである。明治史の本宮の意味を、われわれはこんなところに見るべきであらう。

「明治」逝く

半世紀にも満たない僅かな時代に、日本は眞に目覚ましい發達をとげた。

この偉くべき進歩の動因は、不世出の英主にたまはりました。明治大帝を中心に、國民が眞に舉國一致の團結の下に、勇往邁進したる「明治の精神」に歸することが出来る。

指導者も優れてゐた。彼等の眼光はつねに世界の大局を洞見し、彼等の精神はいつも天事な調和を示して、凡そ極端に流れるといふことはなかつた。外國文化を攝取するのに急であつても、日本の傳統

精神がいつも基礎をなしてゐた。

國民も勿論、進歩するだけのよい素質を澤山持つてゐた。偏することのない物の觀方、あくまで進取敢爲の精神は、明治全時代を通じて、どれくらゐ活氣ある場面を展開したかしのれない。

もちろん明治史にも未熟さもあるし、悲しみ、焦燥もある。しかし、外國が二百年から三百年もかかつてやつたことを、僅か五十年にして追ひ着かうといふのであるから、それは恕すべきであらう。

敢闘の意氣を満面にみなぎらして、世界史のコースを列強に伍して疾走するこのランナーに交待して、われわれは更に新しい勇氣と決意をこめて、走りつゞけなければならぬ。

今日では大アジア主義と云へば誰でも知つてゐるが、當時に於ては、さすがの伊藤博文でも、奇蹟の言としか受けとられなかつたのである。論戦三日、伊藤は、

「熟考の上、實行を考へよう」

「山縣、樞の二元老にも、今夜の議論は替つて他言いたしません」

といふので終つた。

翌明治四十一年、向島にある伊藤の別荘に、再び後藤は呼ばれた。後藤は當時、通信大臣であつた。

伊藤は、

「支那の形勢も、世界の形勢も、般島會談當時に較べると大いに變化した。我家も統監を辭して朝鮮を脱した。そこで、君の云つたやうに國外に乗り出さうと思ふ。勿論、これが博文、最後の御奉公と思ふが……」

そこで官吏を切り、さらに、

「そこでまづ支那のことだが、支那は西太后の没落と共に中心勢力を失ひ、群衆暴動の状態で、とてこれを對手に、東洋の根本策は定められん。因つて、自分はヨーロッパ列強を離れて、その識者と

語り、日本の將來を考へたい」

「國家のため、喜びに堪えません。しかし、溥儀と外遊されるより、極東に於て大國體があるロシアに赴かれ、かつ現在ロシアで最も勢力ある蔵相コソツエフに會見されては如何でせう」

「それはよい思ひつきだが……」

「コソツエフのことならば、私が彼に二書を送り、ハルビンまで出張することを促せば、必らずやつて来ます」

「本當に彼は来るかね」

「どうか、私におまかせ下さい」

それから二十日も経たないうちに、コソツエフから「快諾」の電報がとゞいた。

伊藤はこれを読んで破顔一笑、

「いや、君の大風呂敷も、たまには大物をつゝむんだね」

と、上氣球であつた。

伊藤はすぐハルビン行きを用意にかゝり、勅許を得て出發したのであるが、七月十五日ハルビン開

頭で、史傳を胸にうけて死んだ。

伊藤は安政三年、十六才で長州藩の足輕として勤王してから、星加波五十二年、眞に明治と共に生き、明治と共に死んでゐる。しかも、その最後を飾るにふさわしい勲章を得て、正に歴史的な終焉と云へよう。しかもその胸中にいだいてゐた、大亞細亞の運命圖は、今日われわれが、まごまごと眼前に見るところのものである。明治史の本當の意味を、われわれはこんなところに見るべきであらう。

「明治」逝く

牛世紀にも満たない僅かな時代に、日本は眞に目覚ましい發達をとげた。

この偉くべき進歩の動因は、不世出の英主にてましましたる 明治大帝を中心、國民が眞に舉國一致の團結の下に、勇往邁進したる「明治の精神」に歸することが出来る。

指導者も優れてゐた。彼等の眼光はつねに世界の大勢を洞見し彼等の精神はいつも天事な調和を求めて、凡そ極端に流れるといふことはなかつた。外國文化を攝取するに念であつても、日本の傳統

精神がいつも基調をなしてゐた。

國民も勿論、進歩するだけのよい素質を澤山持つてゐた。備することのない物の體方、あくまで進取の精神は、明治全時代を通じて、どれくらゐ活氣ある場面を展開したかしのれない。

もちろん明治史にも未熟さもあるし、進歩も、進歩もある。しかし、外國が二百年から三百年もか

かつてやつたことを、僅か五十年にして追ひ着かうといふのであるから、それは想すべきであらう。放蕩の意氣を満面にみなぎらして、世界史のコースを列強に伍して疾走するこのランナーに交替して、われわれは更に新しい勇氣と決意をこめて、走りつゞけなければならぬ。

——マキ 終——